広島市の文化財　第34集

広島市東区温品所在

北谷山城跡発掘調査報告

1986.3

広島市教育委員会

はしがき

広島市内には，約200カ所の中世山城跡の存在が確認されています。これらの山城跡は，市街地周辺の丘陵上に所在しており，発掘調査等の実施によって，広島市の歴史をたどることができ，貴重な資料となっています。

このたび，道路建設に伴い，用地内に所在する永町山城跡，北谷山城跡について，広島市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果，多くの遺構，遺物が発見され，この山城跡は，戦国時代を中心に使用されたものであることがあきらかになりました。とくに，城内からは，当時の生活の一端をうかがえる石組みの「かまど」や，当時の貴重品である中国製青磁が発見されるなど，中世山城の性格を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

本調査にあたり，ご指導・ご援助いただきました関係者の方々に厚くお礼を申しあげます。

この報告書が，郷土の歴史研究や理解をすすめるうえで役立つことができれば幸いに存じます。

昭和61年3月

広島市教育長　藤井　尚

例　　言

1. 本書は，市道安芸区154号線建設に伴い，昭和59・60年度の2ケ年にわたり，実施した北谷山城跡，永町山城跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は，広島市東区役所建設部土木課から依頼を受けて，広島市教育委員会が実施した。

3. 本書の執筆は，Ⅰ・Ⅴを橘本義和，Ⅱを幸田淳，Ⅲを奥田壮紀，Ⅳ・Ⅵを阿部滋が担当し，編集は，阿部が行った。

4. 本書掲載の航空写真は，スタジオ・ユニに委託した。

5. 遺物写真のうち，40は1/8，他は1/3とした。

6. 第1図は，建設省国土地理院発行の50,000分の1，広島・海田の地形図を複製したものである。

7. 方位は，座標北を用いた。

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
Ⅱ　位置及び史的背景 …… 3
Ⅲ　遺　　構 …… 6
Ⅳ　遺　　物 …… 25
Ⅴ　永町山城跡 …… 44
Ⅵ　ま と め …… 49

挿　図　目　次

第 1 図　北谷山城跡・永町山城跡の位置と周辺の主要な遺跡 …… 2
第 2 図　北谷山城跡・永町山城跡周辺地形図 … 5
第 3 図　北谷山城跡断面実測図 …… 6
第 4 図　北谷山城跡地形測量図及び遺構配置図 …… 7
第 5 図　第 1 郭第 1 号，第 2 号建物跡・柱穴列・溝状遺構実測図 …… 9
第 6 図　第 1 郭第 1 号柱穴群実測図 …… 10
第 7 図　第 1 郭第 3 号建物跡実測図 …… 11
第 8 図　第 1 郭石列実測図 …… 12
第 9 図　第 1 郭第 1 号土壙実測図 …… 13
第 10 図　第 2 郭第 2 号柱穴群実測図 …… 14
第 11 図　第 2 郭第 1 号かまど跡実測図 …… 15
第 12 図　第 2 郭第 3 号柱穴群実測図 …… 16
第 13 図　第 3 郭中央部遺物出土状況実測図（その 1 ） …… 18
第 14 図　第 3 郭中央部遺物出土状況実測図（その 2 ） …… 19
第 15 図　第 3 郭第 4 号建物跡・第 2 号～第 4 号土壙実測図 …… 折り込み
第 16 図　第 3 郭第 2 号かまど跡実測図 …… 20
第 17 図　第 3 郭第 4 号柱穴群実測図 …… 折り込み
第 18 図　第 3 郭縦堀状遺構実測図 …… 21
第 19 図　第 4 郭第 5 号建物跡実測図 …… 22
第 20 図　武者走り実測図 …… 折り込み
第 21 図　第 1 郭・第 2 郭間第 5 号土壙実測図 … 24
第 22 図　土師質土器実測図(1) …… 26
第 23 図　土師質土器実測図(2) …… 27
第 24 図　土師質土器実測図(3) …… 28
第 25 図　瓦質土器実測図 …… 29
第 26 図　陶磁器実測図(1) …… 31
第 27 図　陶磁器実測図(2) …… 32
第 28 図　陶磁器実測図(3) …… 33
第 29 図　石製品実測図 …… 34
第 30 図　石硯・鉄製品実測図及び古銭拓影 …… 35
第 31 図　弥生土器実測図 …… 37
第 32 図　永町山城跡地形図及び遺構配置図 …… 44
第 33 図　永町山城跡堀切実測図 …… 46

付　表　目　次

第 1 表　北谷山城跡出土土師質土器（皿）法量分布図 …… 25
第 2 表　北谷山城跡出土遺物観察表 …… 38
第 3 表　永町山城跡と類似の山城 …… 47

図　版　目　次

図版 1　北谷山城跡(上)・永町山城跡(下)全景（航空写真）
図版 2　a 北谷山城跡全景（航空写真）
　　b 永町山城跡全景（航空写真）
図版 3　a 第1郭近景（東から・調査前）
　　b 同　上（東から・調査後）
図版 4　a 第1郭東側近景（南から・調査後）
　　b 第1郭第3号建物跡（北から）
図版 5　a 第1郭石列（東から）
　　b 同　上（南から）
図版 6　a 第2郭近景（東から・調査前）
　　b 同　上（東から・調査後）
図版 7　a 第2郭第1号かまど跡近景（西から）
　　b 第2郭第1号かまど跡検出状況
図版 8　a 第2郭第1号かまど跡前遺物出土状況
　　b 第2郭東側遺物出土状況
図版 9　a 第3郭近景（南から・調査前）
　　b 第3郭第4号建物跡（西から）
図版10　a 第3郭第2号かまど跡検出状況
　　b 第3郭中央部遺物出土状況
図版11　a 第3郭中央部遺物出土状況
　　b 第3郭白磁皿出土状況
図版12　a 第3郭第4号柱穴群（南から）
　　b 同　上（南から・調査後）
図版13　a 第3郭第4号柱穴群内火箸出土状況
　　b 第3郭第4号柱穴群内土師質土器出土状況
図版14　a 第4郭近景（東から・調査前）
　　b 第4郭第5号建物跡（東から）
図版15　a 第4郭青磁碗出土状況
　　b 第4郭礎土断面
図版16　a 武者走り（東から）
　　b 武者走り上遺物出土状況
図版17　a 武者走り上遺物出土状況
　　b 同　上
図版18　a 縦堀状遺構（南から）
　　b 第1郭・第2郭間第5号土壙（南から）
図版19　a 永町山城跡東側近景（南から・調査前）
　　b 永町山城跡東側堀切（北から・調査後）
図版20　北谷山城跡出土遺物(1)
図版21　北谷山城跡出土遺物(2)
図版22　北谷山城跡出土遺物(3)
図版23　北谷山城跡出土遺物(4)
図版24　北谷山城跡出土遺物(5)

Ⅰ　はじめに

広島市教育委員会では，昭和57年12月，市道安芸区154号線が広島市東区温品所在の北谷山城跡及び永町山城跡にかかることを知った。そこで，造成主である広島市東区役所建設部と両城跡の取り扱いについて協議を重ねた結果，両城跡とも地理的条件等から設計変更は不可能であり，記録保存もやむなしとの結論に達した。これをうけて，広島市教育委員会では，昭和59・60年の2ケ年で発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は，工事を急ぐところから順次着手していき，昭和59年7月～8月に永町山城跡を，昭和60年4月～8月に北谷山城跡の調査を実施した。

調査の実施に係る関係者は，下記のとおりである。

調査委託者　広島市東区役所建設部土木課

調査主体　広島市教育委員会

調査担当係　広島市教育委員会社会教育部管理課文化財係

調査関係者　森脇昭之　社会教育部長
上川孝明　管理課長（現総務局人事課長）
藤井克己　管理課長
木原　亮　管理課課長補佐兼文化財係長（現婦人教育会館館長）
桧垣栄次　管理課文化財係長

調査者　奥田壮紀　管理課文化財係主事
阿部　滋　管理課文化財係主事
橋本義和　管理課文化財係主事

調査補助員（順不同）

湊鬘術，小西清，曽我部竹一，小早川正，二野下信子，木下チサ子，北川由紀子，大野照江，金子ユキエ，松場益代，山根シズエ，山根敬夫，代慶千恵子，吉谷恵代，坂田加奈子，高田芳子，森綾子，国川静人，谷口八重子，酒井タエ子，橋本徳，伊藤和子，片山豊子，井坂江三子，岡野弘典，横田浩嘉，有間伸治，田村俊幸，槙木美登里，酒井美恵，広本喜稔，米本省二，鼓智子，河合淳子，住川香代子

なお，広島市東区役所建設部土木課，広島県道路公社，日成建設，松村組，浅沼組，鴻治組，温品公民館広島修道大学史蹟踏歩会，市立高取北中学校歴史クラブほか多くの方々には，調査を円滑に進めるために多大なご配慮を頂いた。さらに，報告書の作成にあたっては，東京国立博物館陶磁室，広島大学考古学研究室，倉敷考古館，広島県草戸千軒町遺跡調査研究所，広島県立埋蔵文化財センター，（財）広島県埋蔵文化財調査センターの方々から広範なご教示を頂いた。ここに記して謝意を表わしたい。

1. 永町山城跡　2. 北谷山城跡　3. ニッ城跡　4. 田原城跡　5. 尾上城跡
6. 津村城跡　7. 屋太山城跡　8. 鏡山城跡　9. 鶴江山城跡
10. 多々万比城跡　11. 新城城跡　12. 出張城跡　13. 阿計久羅城跡
14. 石井城跡　15. 下岡田遺跡

第1図　北谷山城跡・永町山城跡の位置と周辺の主要な遺跡

II 位置及び史的背景

北谷山城跡及び永町山城跡は，それぞれ広島市東区温品町字法道寺及び畳谷に所在する中世山城であり，両城跡とも高尾山（標高424.5m）から西に派生する尾根上に位置する。各城跡の最高所の標高は，北谷山城跡が91m，永町山城跡が59mを測り，直下の水田面からの比高はそれぞれ50mと27mを測る。また，両城跡は，直線距離にして170mしか離れておらず，さらに北谷山城跡は永町山城跡の背後を見下す位置にあり，両城跡の密接な関係を想起させる。

両城跡周辺の地形を概観してみると，永町山城跡を境に，南方には呉婆々宇山（標高682.2m）に源を発する温品川（府中大川）が形成した沖積地が海田湾に向って広がり，北方は，東西両側から派生した丘陵が温品川に臨み，狭小な河谷を形成している。また，両城跡とも第1郭からは，南方の府中町域や海田湾を遠望することができ，築城意図を感じさせる。

さて，両城跡の所在する温品周辺の地域は，古代においては，「倭名抄」の安芸郷に比定されている。また，「延喜式」に記述のある安芸駅は，温品に隣接する府中町に比定されている。この時期の遺跡として，府中町所在の下岡田遺跡がある。この遺跡からは重圏文軒丸瓦や「高田郡厨……」と記された木簡が出土しており，建物遺構の配置などからも駅館跡と考えられている。(注1) さらに，温品川の西岸から中山川に至る平野部には，方格状の条里地割の存在が指摘されている。(注2) 以上の点や府中町に在庁官人が存在していたことから，温品を含めたこの地域が安芸国の政治的・経済的中心地域であったといえよう。

次に，古代から中世の温品を含め，安芸国の歴史を概観してみたい。

平安中期以後，在庁官人の中心勢力であった佐伯氏は，国衙在庁機構の中で田所職を世襲するようになり，(注3) 田所姓を名のるようになる。田所氏は，平氏の台頭による厳島社領の拡大という状況下にありながらも，令制の衰退に伴って次第に国衙領の私領化を進め，その勢力を扶植し豪族化していった。その所領は，鎌倉時代に至って安芸郡南半，佐伯郡の内の太田川以東，高田郡の三郡に及んでいた。(注4)

中世になると，承久の変（1221）以後鎌倉幕府の御家人が各地に守護・地頭として配置される。安芸国内においても，守護職に甲斐国武田村に本領をもつ武田氏が補任されるのを初め，毛利氏，熊谷氏，吉川氏等が地頭職を補任される。温品村においても，武蔵国村山党といわれる金子氏が地頭職を得たと考えられる。(注5) これらの東国武士は，既に東国に本領をもっていたため，すぐには下向して来ず，代官を置いて所領の支配にあたった。やがて文永・弘安の役を機に次第に西国へ下向し始め，南北朝期を前後する段階で移住を完了するものと考えられる。金子氏も鎌倉時代末期には下向して来たと考えられる。

安芸国に入国して来た東国武士は，各地に山城を築く。武田氏の銀山城跡，毛利氏の郡山城跡（旧本城），吉川氏の駿河丸城跡・熊谷氏の伊勢ヶ坪城跡などがあげられる。これらの山城はいずれも所領を一望できる丘陵上に位置し，銀山城跡を除いては，低丘陵上に数段の郭を配した小規模なものであるが，人工の堀切や自然の谷・河川を利用した堀などを巧みに配し，防禦機能を高めるよう配慮されており，いわゆる山城としての機能を有している。こうした特徴をもつ城は，県内では鎌倉時代末から南北朝時代にかけて多く築かれたとされる。(注6) この時期には，東国から下向した武士が盛んに国衙領・荘園の押領を行ったようで，彼らが所領の一円支配を強力に進めようとし，このためこれらの山城を築いていったと考えられる。

温品村においても，この時期国衙領の押領が地頭代あるいは地頭の手によって行われている。(注7) また，これと相俟って貞治六年（1367）には金子氏が温品村の惣地頭職を武田氏から預置されている。(注8) これらのこ

とは国衙領を背景に領主化していった田所氏の勢力が次第に弱まり，金子氏を含めた守護・地頭が，それぞれの所領に土着しその支配地を領国化していく過程を物語るものである。また，守護家としての武田氏が金子氏等の小領主層を次第に被官化していく過程をも示唆するものでもあろう。

これらの小領主層の勢力の伸長を示すものとして，応永11年（1404）の「安芸国々人一揆契状」(注9)があげられよう。これは，国内の国人領主33名が互いに同盟し，この当時安芸国守護であった山名氏に対抗したものである。この中には，毛利氏一族，熊谷氏などとともに金子氏と温品村の在地名を名乗ったと思われる温科氏の名が見える。なお，金子氏が温科村の金子氏かについては定かでなく，また，温科氏との関係は明らかではないが，いずれにしてもこの時期安芸国内の有力国人衆に名を連ねていることは注目できる。

さて，この時期安芸国内では，守護家の武田氏が安南・安北・山県等に所領の宛行を行っており(注10)分郡支配を成立させるが，その勢力は分郡内に限られていた。応仁の乱後，国内では大内氏・尼子氏の勢力が拮抗し，緊張状態が続く。この過程で，国人領主層は鎌倉時代以後続いた惣領制を捨て，地縁的結合を強め，次第に整理統合される。この中で毛利氏は，所領の一円的支配を貫徹し，国人領主層の所領の所有権を知行制へと編成していき，戦国大名へと成長していく。

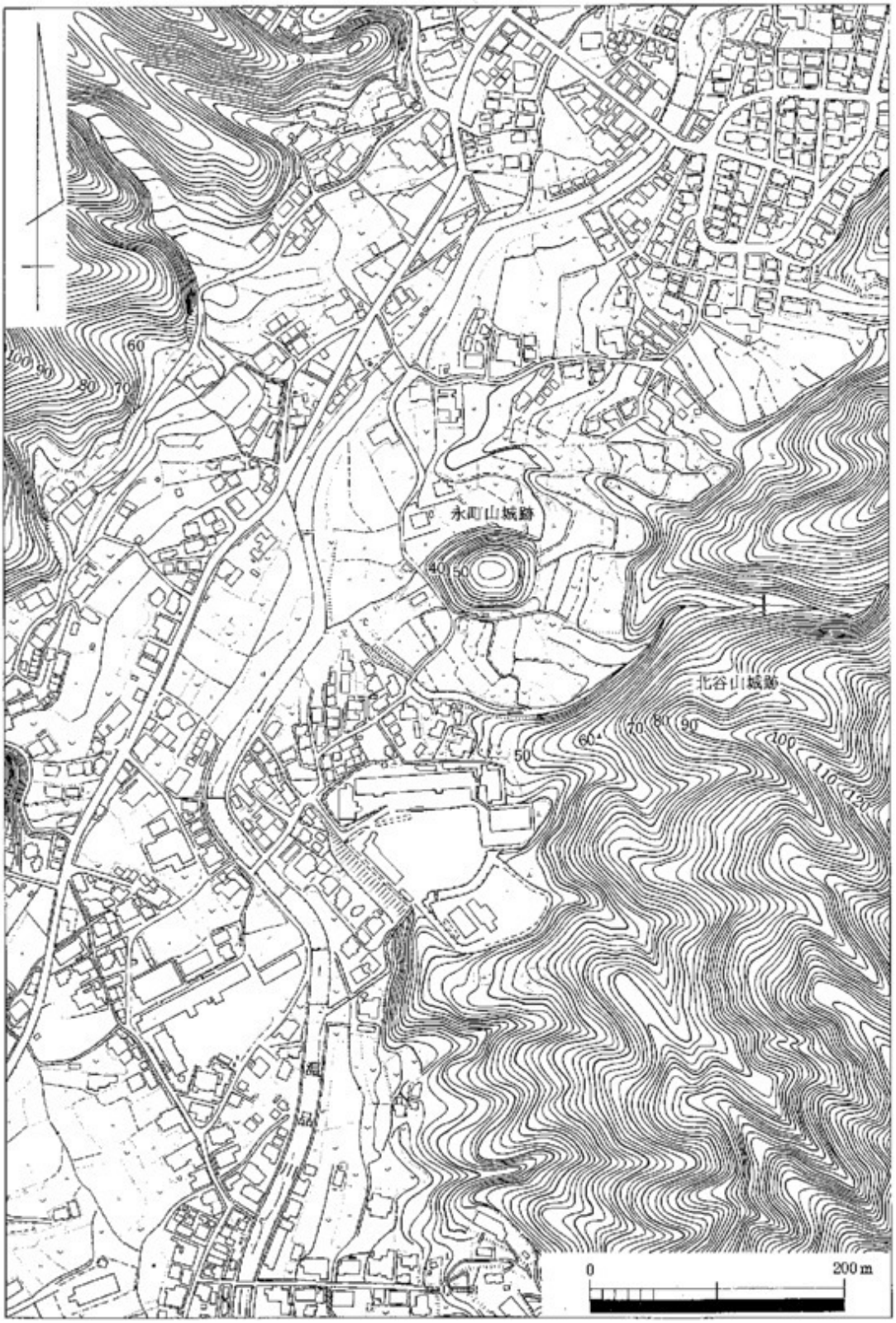
毛利氏は天文10年（1541）には守護であった武田氏を滅ぼし，さらに，大内氏を倒してその実権を握った陶氏を弘治元年（1555）厳島に倒して中国地方を統一していく。

この時期温品村では，明応8年（1499）に温科氏が武田氏に背き大内方についたため滅ぼされた。(注11)以後毛利氏の広島湾頭統一まで，武田氏・大内氏・毛利氏へと支配権が移動しており，(注12)温品地域の戦略的重要性をうかがわせる。

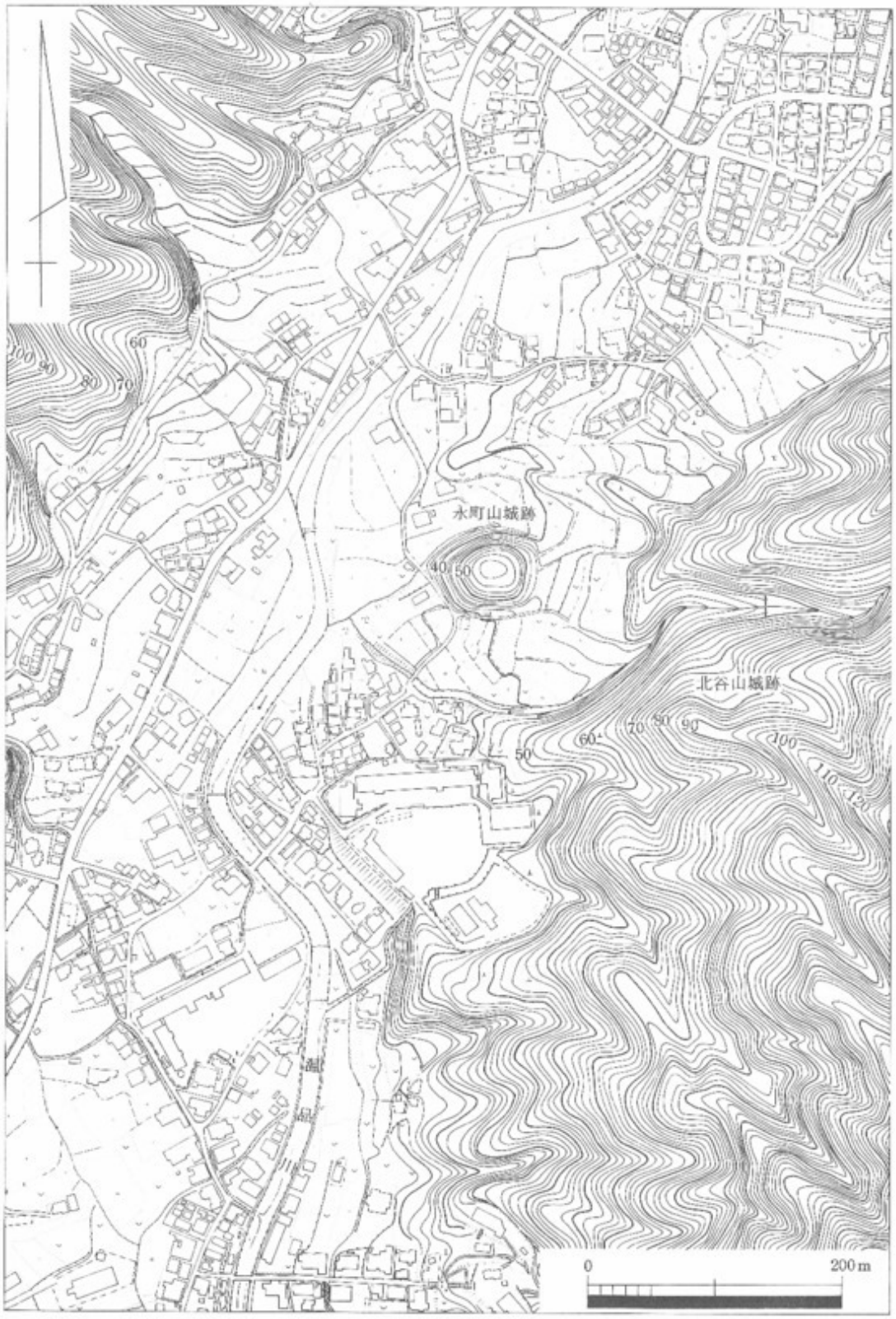
（注1）府中町教育委員会『下岡田遺跡発掘調査概報』1965. 66年
（注2）『新修広島市史』第1巻 1961年 広島市
（注3）『田所文書芸藩通志収集』1号，3号，4号
（注4）『田所文書』2号
（注5）『毛利家文書』1493号，1494号，1502号，1504号
（注6）河瀬正利「広島県における中世山城跡について」『芸藩地方史研究 110，111合併号』1977年
（注7）『東寺百合文書』193号，198号，『藤田精一氏旧蔵文書』1号
（注8）『毛利家文書』1504号
（注9）『毛利家文書』24号
（注10）『熊谷家文書』，『吉川家文書』
（注11）『毛利家文書』167号
（注12）『毛利家文書』251号，258号，『熊谷家文書』167号

その他参考文献

広島県史中世編
新修広島市史
安芸府中町史
安芸町史
日本城郭大系31 広島・岡山



第2図　北谷山城跡・永町山城跡周辺地形図



第2図　北谷山城跡・永町山城跡周辺地形図

III　遺　　構

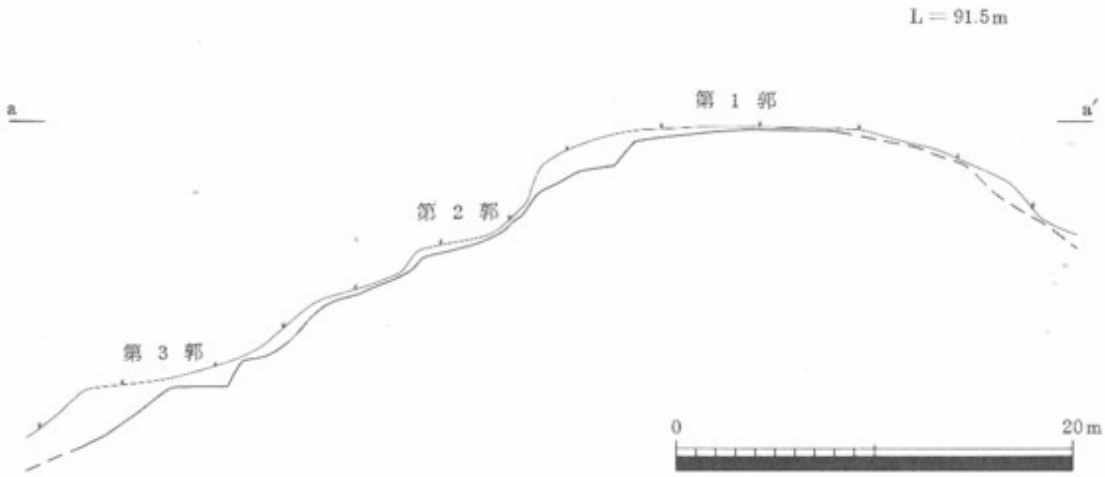
調査の概要

本城跡の発掘調査により，尾根上を中心に4つの郭と武者走りが検出された。

郭は最高所にあるものを第1郭とし，第1郭の北西側に配された細長い郭を第2郭，第2郭の北西側に配された郭を第3郭，第1郭の西側に配された郭を第4郭とした。また，第4郭は武者走りを介して第3郭と結ばれていた。

なお，第1郭は主墳と4つの小平坦面で構成されており，第3郭には縦堀及び縦堀状遺構が付随していた。

このほか，発掘調査範囲外について測量調査を行った結果から，第1郭が南東部へ延びること，第1郭の南東側に堀切，第4郭の南側に第5郭が存在することが窺われた。



第3図　北谷山城跡断面実測図

第4図　北谷山城跡地形測量図及び遺構配置図

第　1　郭

第1郭は標高91.5mで当城跡の最高所に位置し，東西30m，南北20mの規模をもつ郭である。調査前の地表観察では，郭内は東側を中心とする平坦面があり，その北側，西側及び南側に一段低い平坦面が存在することが予想された。調査の結果，東西20m，南北17mの平坦面（主壇）及び郭の縁辺部に位置している4つの小平坦面が検出された。

主壇の周辺に配されたこの4つの小平坦面は，それぞれが独立して機能するには小規模であり，第1郭の一部として取り扱うことが妥当と考えられるものである。これらは主壇の北側に配されているものから南西に向かって順に1～4とした。小平坦面1は第1郭北側の縁辺部を1.5mほど掘り下げて築いているもので，長さ9m，幅1mほどの東西に長い不整形を呈している。小平坦面2は小平坦面1の西方に並ぶように検出されたもので，第2郭に下る斜面部の中ほどを長さ6m，幅1mにわたって細長く削平して築かれている。主壇との比高差は2mを測る。この2つの小平坦面は検出位置及び平面プランから，いずれも第2郭を意識して築かれていると考えられる。小平坦面3は第1郭の北西側縁辺部で検出されたものであり，主壇との比高差4mを測る地点が長さ7.5m，幅4mほどの半円形状に削平して築かれている。小平坦面4は第1郭南西側縁辺部で検出されたものである。一部が発掘調査範囲外まで延びるが，概ね長さ6m，幅3mの長方形を呈しており，主壇との比高差3mを測る。

なお，小平坦面3と小平坦面4の間からは，約10mにわたる幅0.4～1.5mの細長い平坦面が検出された。これは検出された地点及び地山削平が行われている状況から，小平坦面間を結んだ通路と考えられる。

郭の土層を観察した結果，主壇と小平坦面1～3は地山削平を施され，小平坦面4は後述するように石列を土留めとした盛土で築成されていることが判明した。また，小平坦面1の地山直上には主壇とほぼ同レベルまで赤褐色土層が確認されたことから，最終的には盛土によって主壇の拡張が行われたと考えられる。

第1郭からは3棟の建物跡，柱穴列，溝状遺構，柱穴群，土壙，石列が検出され，青磁器片，土師質土器が出土した。

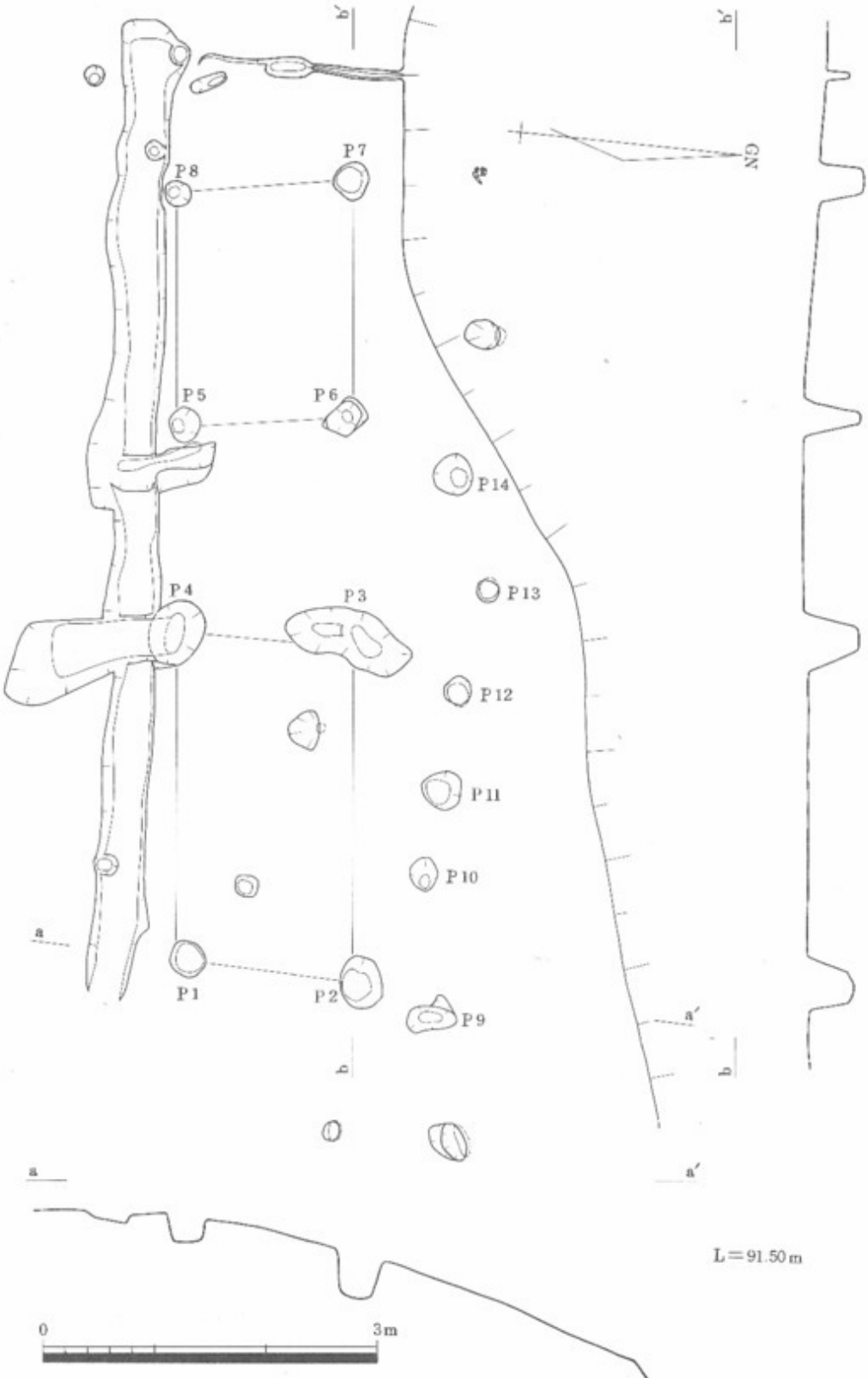
第1号，第2号建物跡・柱穴列・溝状遺構　（第5図）

第1郭主壇の北東部では多数のピットが検出されたが，形状，規模，及び配置からみて構築物の柱穴と考えられるものが14個（P1～P14）存在している。

これらから想定される構築物の中で，建物については柱穴の規模及び配置の規則性から2棟が想定された。P1～P4は径35～45cm，深さ25～35cmでほぼ一定の規模をもち，やや歪みはあるが長方形を呈する配置から，1間×1間の掘立柱建物跡（第1号建物跡）と考えられる。この建物は桁行3m，梁間1.6mの規模をもち，桁行方向はほぼ東西を指す。ただし，この地点は発掘範囲の境界付近であり，桁行の規模を考慮すれば，建物跡が発掘範囲外に続いている可能性もある。P5～P8は径30cm前後，深さ25～40cmではぼ同規模であり，その配置から桁行2.1m，梁間1.6mを測る1間×1間の掘立柱建物跡（第2号建物跡）と考えられる。桁行方向は第1号建物跡と同方向を指す。

P9～P14は径20～40cm，深さ30cm前後と規模的にみて一定してはいないが，掘立柱を建てるには十分な大きさであり，1m前後の等間隔で概ね主壇の縁辺部に沿って並んでいる。また，第1号建物跡の北側にほぼ平行に並ぶ状況でもあることから，この柱穴列は建物を遮蔽する柵列などが築かれた跡であることが考えられる。

溝状遺構はほぼ直線状を呈するもので，長さ9m，幅40cm前後，深さ5～10cmの規模を有し，2棟の建物跡の南側に近接して検出されている。この遺構は2棟の建物跡と平行に沿う位置関係をもつことから，建



第5図　第1郭第1号，第2号建物跡・柱穴列・溝状遺構実測図

物跡と関連をもつことが窺われる。東端から西端まで約30cmの比高差をもち全体に緩く傾斜していることから雨水排水の溝と想定されるが，建物跡に近接し過ぎていることもあり，断定はし得ない。

遺物としては，第2号建物跡内から青磁器片と土師質土器の皿が出土している。

第1号柱穴群　（第6図）

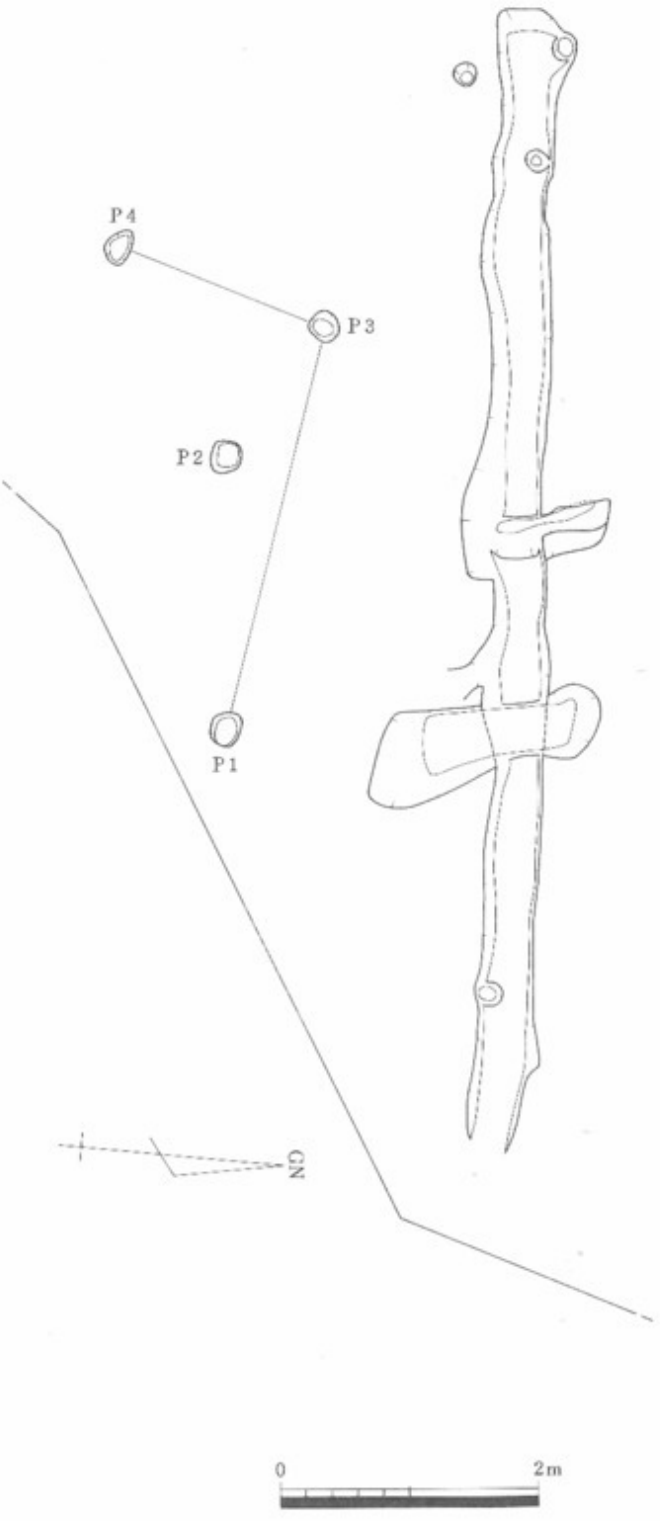
溝状遺構の南側の発掘調査範囲境界付近において検出された4個のピット（P1～P4）である。径はいずれも25cm程度であり深さは15～35cmを測る。これらのうちP1，P3，P4はほぼ直交する配置状況にあり，建物跡の可能性が想定できる。しかし，検出地点を考慮すれば他の柱穴が調査範囲外に存在するとみられるため，規模等については全容が明らかになった時点で検討する必要がある。

第3号建物跡　（第7図）

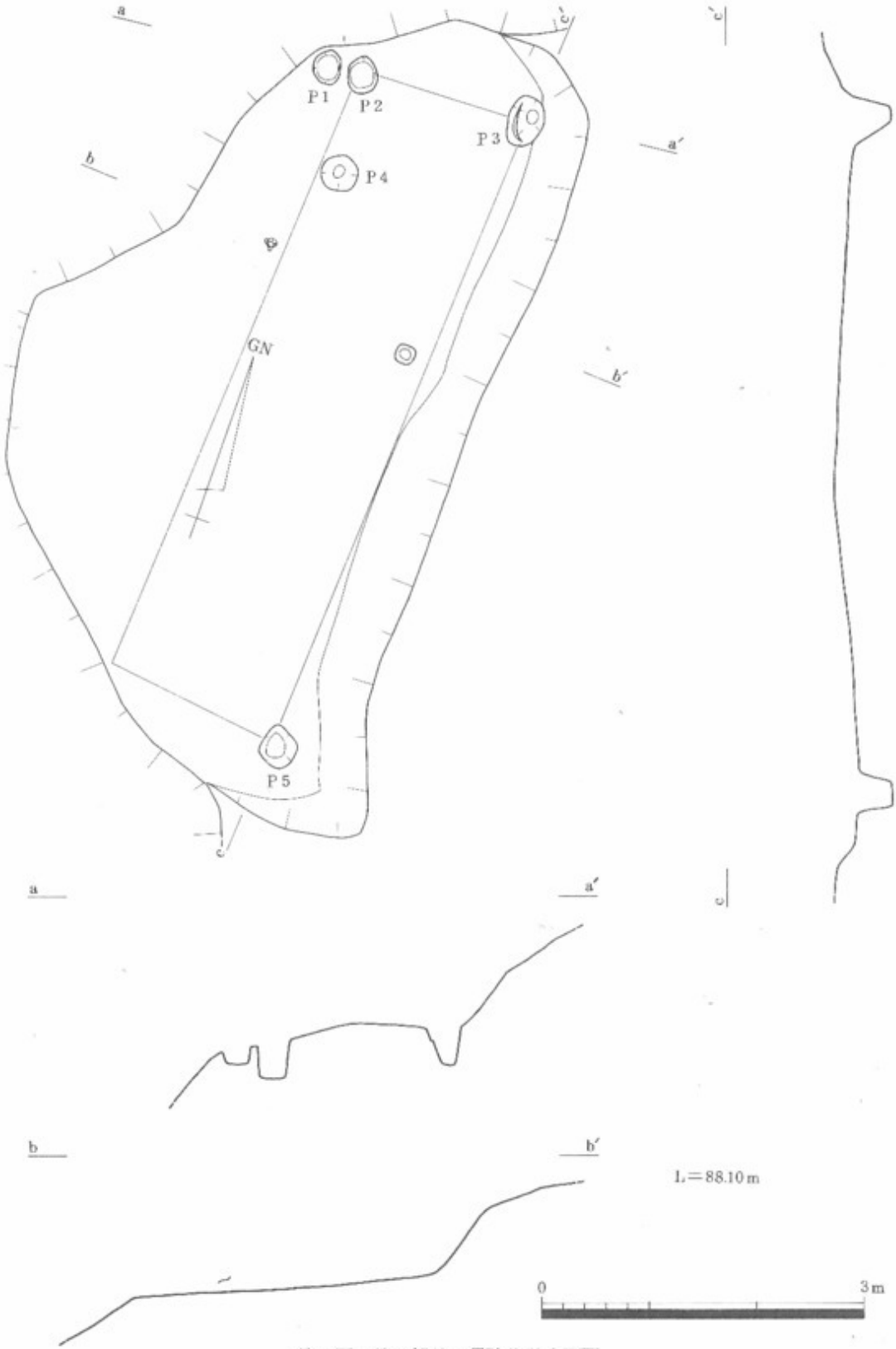
第1郭北西側の縁辺部に位置する小平坦面3から，径が等しい5個のピット（P1～P5）が検出された。これらのピットは径30～35cmを測るもので，配置の上からみるとP1～P3及びP5がほぼ直交する。この中で深さが35cmと一定しているP2，P3，P5の3個は，少なくとも一連の構築物の柱穴と考えられる。

構築物については，P2，P3，P5の配置に加え小平坦面中央部に岩盤が存在しているため，柱穴の考えられるピットは見あたらないものの桁行6.3m，桁間約3m，梁間1.7mの規模をもつ1間×2間の建物跡が想定される。また，P3はその形状から掘り替えが認められ，当初の深さは約15cmであったと推定される。この深さはP1の深さと一致することから，少なくとも一度この建物の改築が行われたことが想定できる。

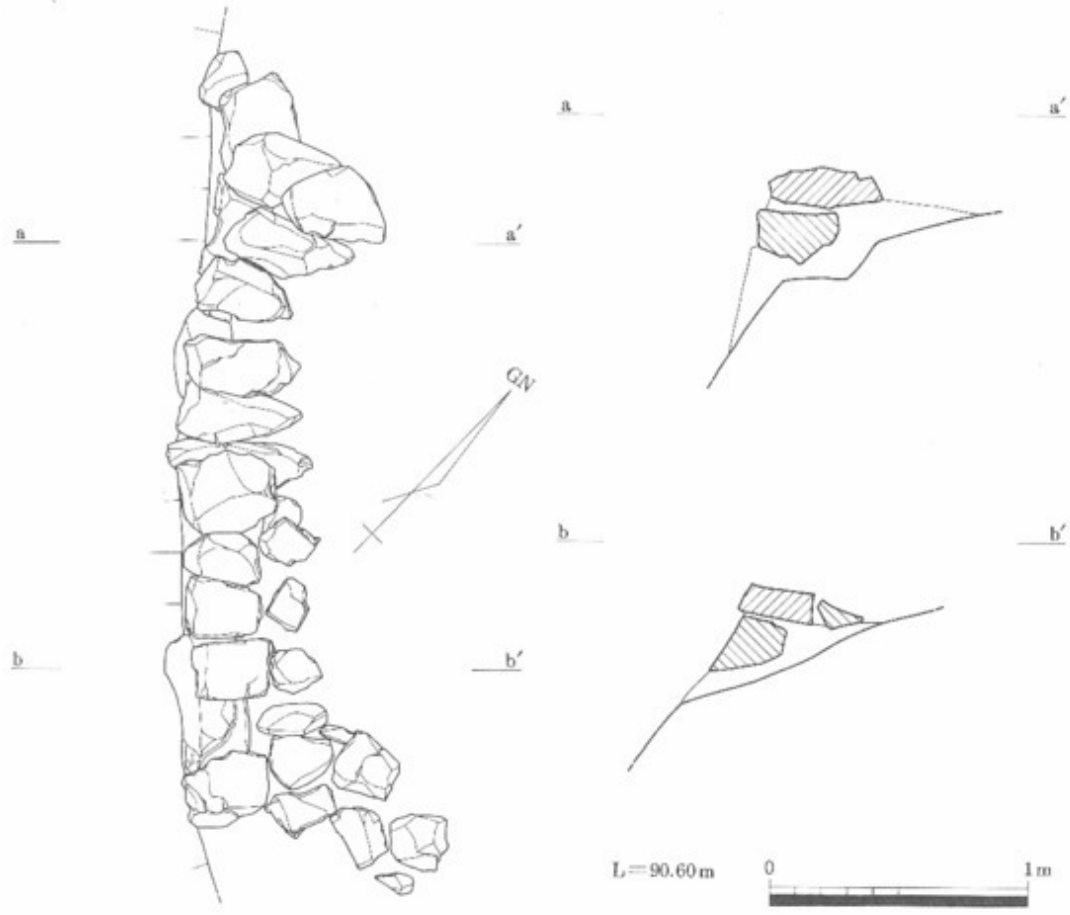
この建物跡内からは土師質土器の皿が出土している。



第6図　第1郭第1号柱穴群実測図



第7図　第1郭第3号建物跡実測図



第８図　第１郭石列実測図

石　　列　（第８図）

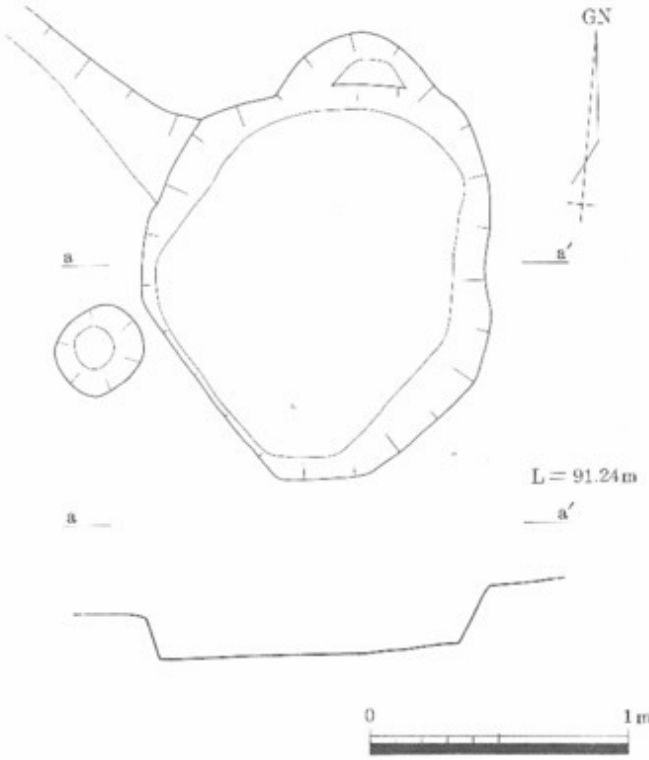
第１郭南西側の縁辺部に位置する小平坦面４から検出されたものである。崖端に沿って地山を若干削平し，その上に赤褐色粘質土を敷いて安定を図ったうえで石を据えている。個々の石材には長さ25～50cm，幅15～30cmの厚みのある割石が用いられている。この石列の現存長は約３mであり，ほとんどの部分で２～３段に積み重ねられている。

石列が築かれている地点は，土層観察により，地山上に単一の黄褐色土層が存在し石列上面まで堆積していることが確認された。この黄褐色土層の直上は土師質土器片を伴うことから，石列上面のレベルで平坦面として使用されていたとみられる。こうしたことから，石列は盛土の土留め用の石垣として築かれたと考えられる。

ただし，盛土により築成された平坦面は，規模的には狭小であり単独で機能したとは考え難く，既述したように通路で結ばれている小平坦面３などと有機的なつながりをもたせて使用したと考えられる。

第１号土壙　（第９図）

第１郭主腹の中央から西に寄った地点で検出されたものである。概ね円形のプランを呈し，上縁部径140cm，底部径120cm，深さ15～45cmの規模を有する。この土壙は遺物を全く伴っておらず性格は不明である。また，土壙の西側に接して径30cm，深さ20cmのピットが存在するが，土壙との関わりは不明である。



第９図　第１郭第１号土壙実測図

第　２　郭

第１郭の北西側に配された郭で第１郭との比高差は約５mを測り，東西30m，南北0.5～４mの細長いプランを呈する。この郭は表面観察によれば，斜面を一括削平して同レベルの平坦面を築成したものと予想された。しかし，調査の結果，郭の東側は地山削平面が２段になっていることが判明した。この２段の地山削平面は比高差約40cmを有している。北側に位置する下段は郭の西側の地山削平面とほぼ同レベルにあり，南側に位置する上段は斜面に向けて削平が行われたもので，平面プランは長さ10m，東端幅1.5mで西端に向かって収束する細長い三角形を呈する。また，下段の南側には幅30～40cm，深さ５～30cmの溝が検出されている。

この地点の土層観察の結果，下段には上段と同レベルまで淡赤褐色土が堆積していることが確認された。また，この淡赤褐色土層上の遺物には，上段から出土した遺物と同一個体のものがあることが判明した。これらのことから，下段は盛土が行われ，上段と共に一つの平坦面として使用されていたと考えられる。

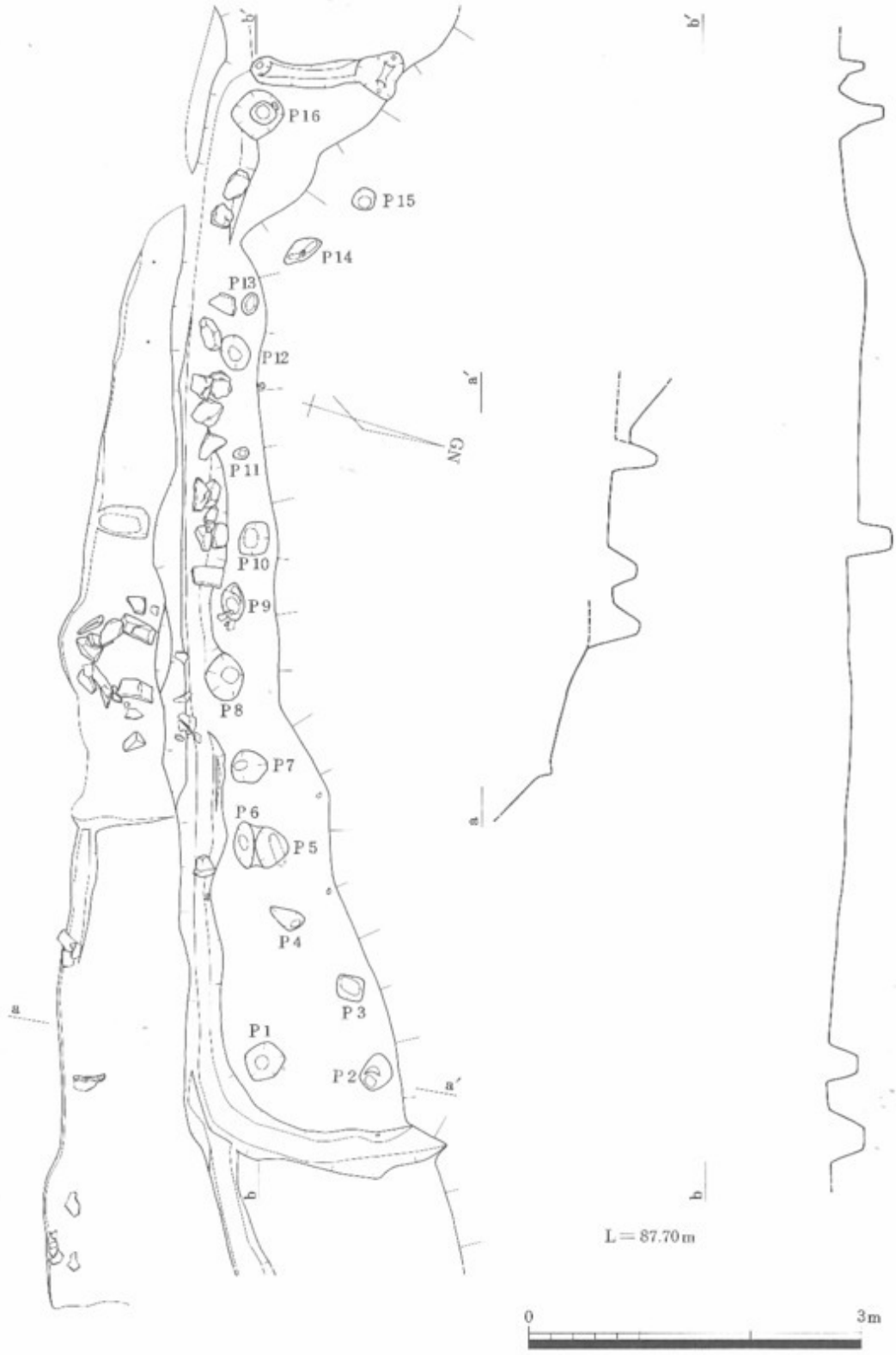
以上のことから，第２郭東側は地山削平で築成された後，拡張が行われたことが考えられる。

なお，この郭からは２つの柱穴群とかまど跡が検出され，備前焼の大甕などの破片，瓦質土器，青磁器片，古銭（名称不明）が出土した。

第２号柱穴群　（第10図）

第２郭東側の下段部から16個のピット（P１～P16）が検出された。これらのうちの14個のピット（P２～P15）は径が15～40cm，深さが25～50cmでばらつきが見られるものの，その形状及び検出地点が下段の縁辺部に沿って概ね70～80cmの等間隔で並ぶことから，柵列と考えたい。また，P１とP16は検出地点が前述した柵列からはずれているが，規模的には柵列の柱穴とほぼ同じであることから，これに関連するものとみられる。

ところで，この下段部には２つの溝が存在している。一つは幅30～40cm，深さ５～30cmの規模で南側に存在し，上段の東端から約1.5m西寄りの地点で北に折れるL字状のものである。もう一つは前述の溝の



第10図　第2郭第2号柱穴群実測図

西端付近から北に延びる幅20cm，深さ5cmの規模のものである。この2つの溝で区画される範囲内において柱穴群は検出されていることから，溝と柱穴とに何らかの関わりがあることが考えられる。

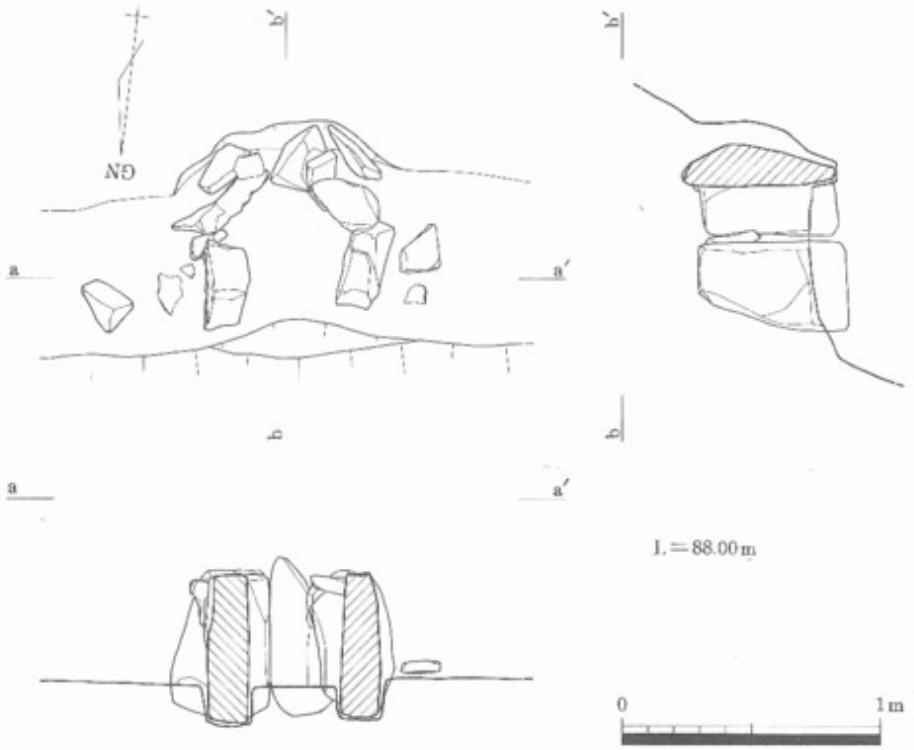
この柱穴群が検出された地点は，細長い第2郭の中でも特に狭小になった地点である。それにもかかわらず柵列を構築して更に削平面の幅を狭くしていることは，郭内の通行を困難にさせることで防禦機能をもたせていると考えられよう。

第1号かまど跡　（第11図）

第2郭東側の上段部から検出された馬蹄形の石組みである。この石組みは幅60cm，奥行き60cmの規模を有するもので，地山を若干掘り込んで高さ約60cm，幅約15cmの割石を用いて築かれており，隙間には小角礫がはめられている。

このかまど跡は上面のレベルがそろえられており，北側に築かれている焚口付近及び内部には炭を含んだ約5cmの焼土が堆積している。また，このかまど跡は南側の斜面を掘り込んで築かれているが，近接している地山との隙間に赤褐色粘質土がつめてある。これは石の転倒を防ぐための処置とみられ，かまどが比較的丁寧に築造されていることが窺われる。

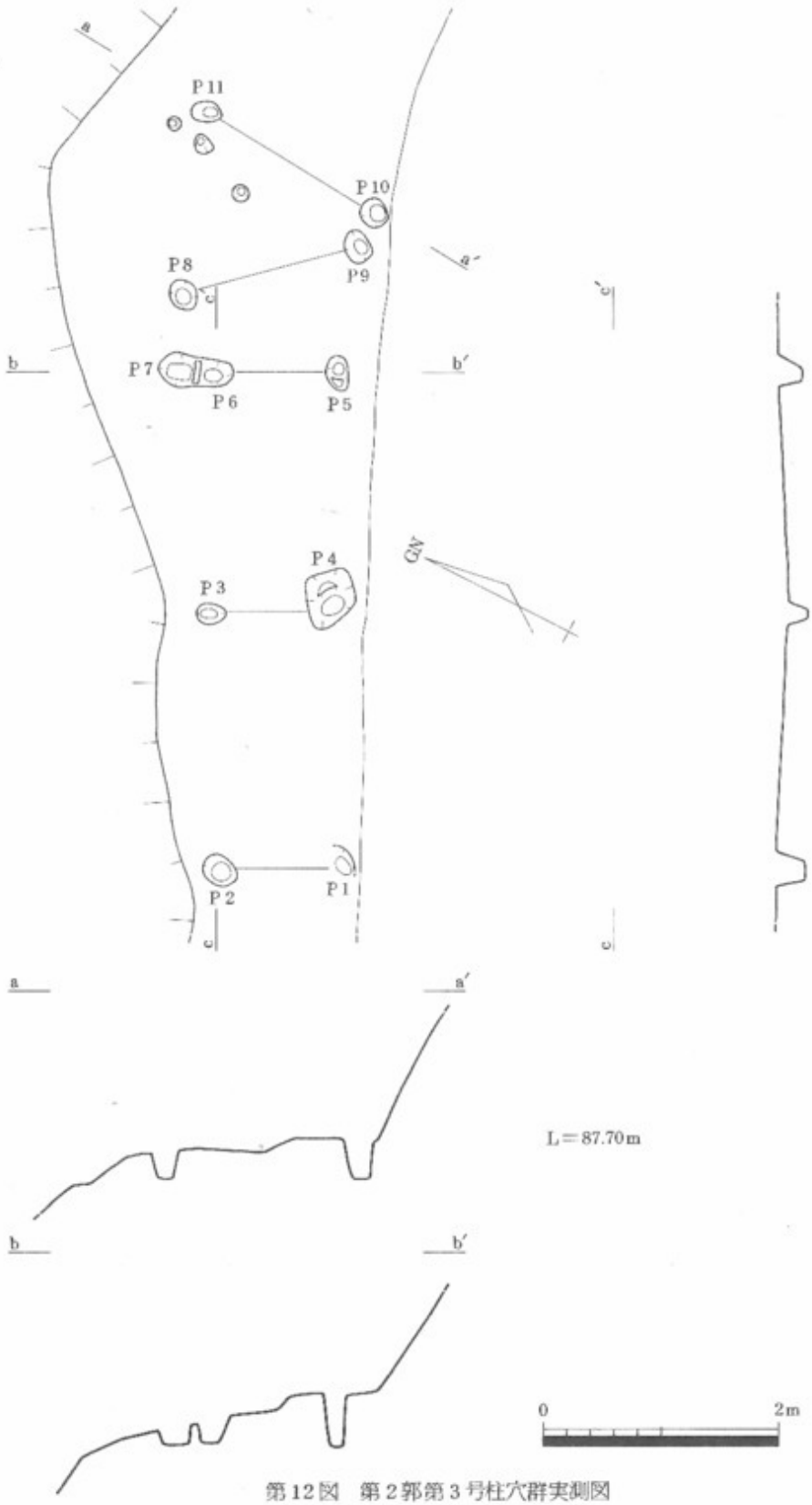
遺物として，かまど跡の石の上及び周辺から備前焼の破片が出土した。



第11図　第2郭第1号かまど跡実測図

第3号柱穴群　（第12図）

第2郭西側から14個のピット（P1～P14）が検出された。これらの中でP1～P11は径が20～30cmで深さが20～40cmを測り，底部のレベルがほぼ同じであることから柱穴と考えられる。これらの柱穴は深さのうえで北側の縁辺部付近に並ぶものが浅く，南側の斜面下に並ぶものが深い傾向をもつ。



第12図　第2郭第3号柱穴群実測図

構築物については，P1～P6の配置から桁行4.2m，梁間1mの規模を有する2間×1間の建物跡が想定されよう。しかし，この地点は幅1.5mと比較的狭い削平面が続く箇所であり，想定される建物の梁間の規模を考え合わせた場合，郭の細長い形状からみて東半部と西半部の有機的なつながりを維持する点で問題が残る。一方，この問題点は逆に考えれば敵の侵攻を妨げる点において好都合なものとなる。この観点からみれば，P1とP2，P3とP4，P5とP6あるいはP7，P8とP9，P10とP11がそれぞれ対応し郭の長軸方向とほぼ直交する配置を形成していることから考えて，板塀や門などを想定する方が妥当であろう。

第2郭はその細長い形状から帯郭と考えられるものであるが，この種の郭は通路的な機能をもつものが多いだけに，柵列，板塀あるいは門などの防禦施設を有していたと考えられる点は特筆される。また，これらの防禦施設は2カ所に設けられているが，そのいずれも南側斜面部に存在する第1郭の小平坦面と対応する位置に設置されており，双方を有機的に結合させて防禦機能を高めていると考えられる。

第　3　郭

第2郭の北西側に配された郭であり，第2郭との比高差は約8mを測る。この郭は調査の結果，南側に地山削平面が東西25m，南北0.5～3.5mにわたって存在していることが確認された。この削平面の南北方向の幅が最も狭小となっている中央部は，北側斜面が他と比較して極端に急な傾斜になっており，東西方向も4～5mの幅で大きく掘り込まれていることから，縦堀と考えられる。

一方，土層観察の結果，地山削平面の縁辺部から北側に向かって，削平面と同レベルで単一の褐色土層が存在していることが判明した。この褐色土層は地山削平部東端付近から西に約15m，北側に最大で3m余りの範囲で確認されており，遺物の出土状況から，地山削平面と一体で使用されていたと考えられるものである。

以上のことから，第3郭は地山削平で築成された後，盛土によって拡張されたと考えられる。

なお，地山削平部の南側斜面下に沿って溝が検出された。この溝は幅20cm，深さ2～10cmの規模を有し，郭のほぼ全域にわたって設けられているが，性格は不明である。このほか，検出された遺構として建物跡，3基の土壙，かまど跡，柱穴群，縦堀状遺構がある。

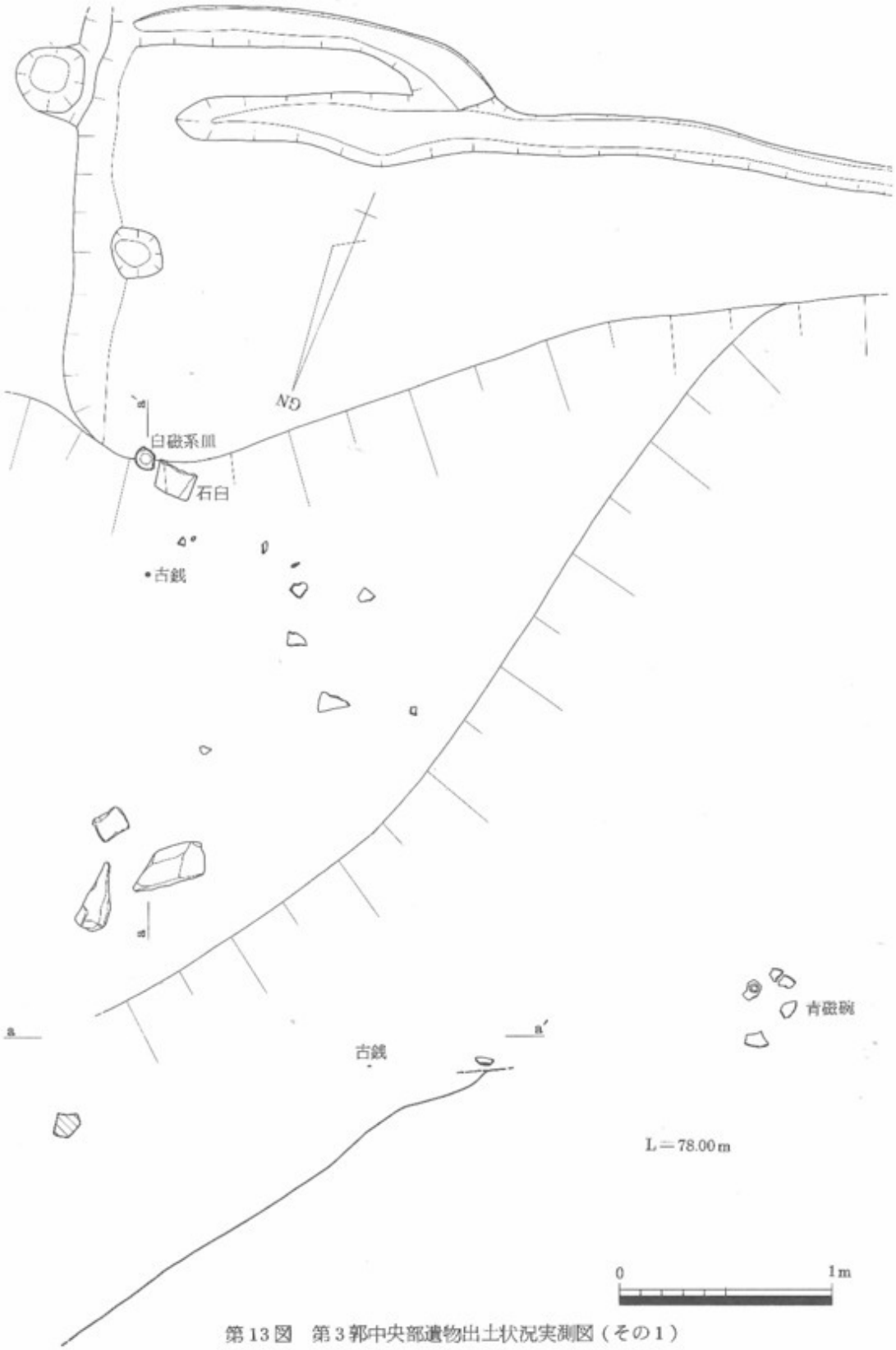
また，遺物としては陶磁器，土師質土器，鉄製品，石製品，古銭が出土しており，特に中央部からは比較的集中して出土した。（第13・第14図）

地山削平面上の遺物には白磁皿，備前焼の大甕破片，備前焼のすり鉢破片，白磁系皿及び石うす片がある。盛土上の遺物としては古銭（治平元寶），備前焼の大甕破片，陶器片及び青磁碗がある。これらの遺物はすべてほぼ同レベルの地点からの出土であり，備前焼の大甕破片は同一個体のものである。

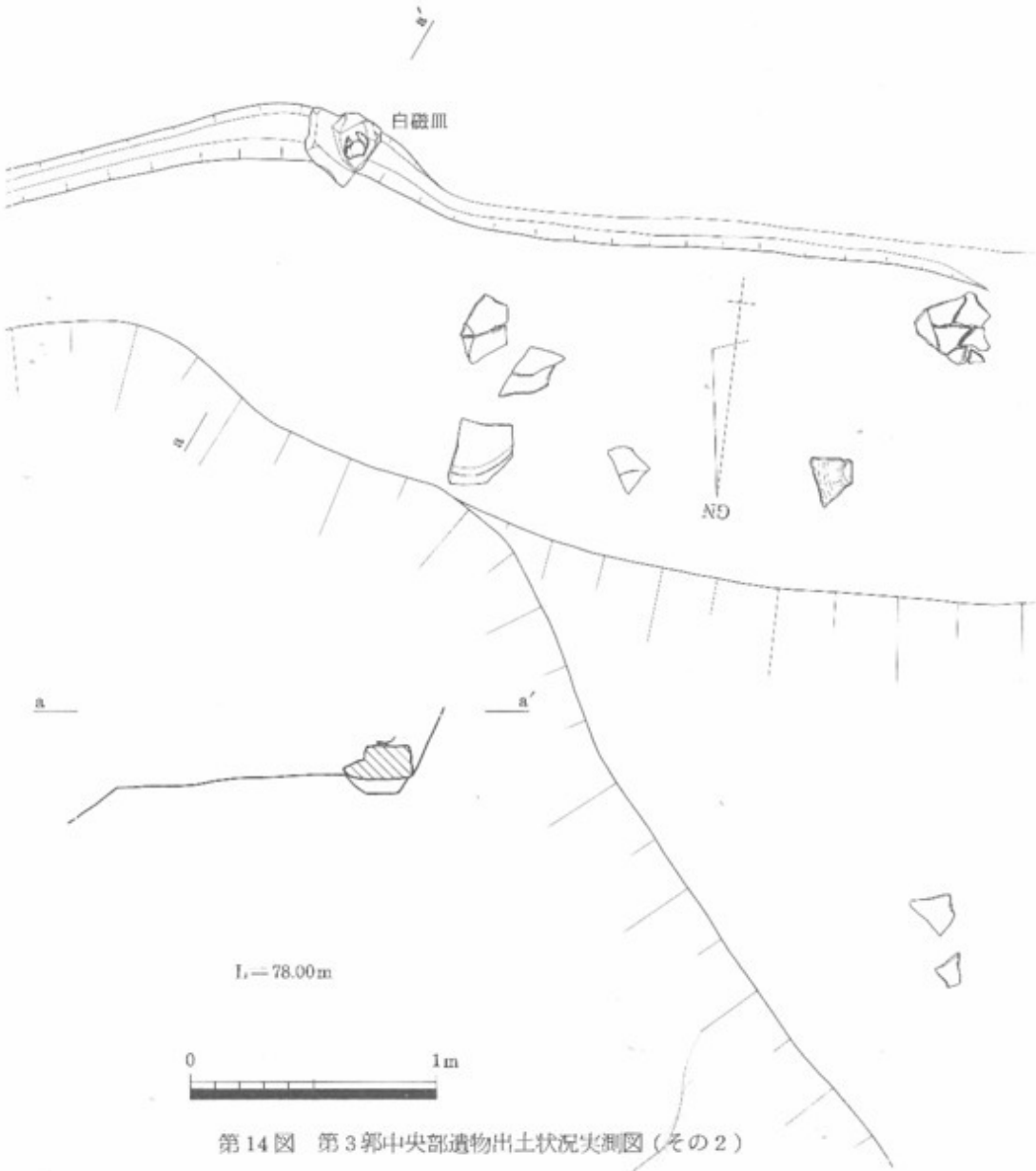
第4号建物跡・第2号～第4号土壙　（第15図）

第3郭東端付近の削平面上から四角形及び円形を呈する7個のピット（P1～P7）が検出された。これらのうちの4個（P1～P4）は径ないし幅が25～30cm，深さが30～40cmと同規模であり底部レベルも同じであること及びその配置から，関連した構築物の柱穴と考えられる。また，この4個と規模や深さなどが異なってはいるが，P5～P7も形状などから柱穴と考えられる。

P1，P2，P4はその配置から桁行4m，梁間3.3mの規模を有する1間×1間の掘立柱建物跡と考えられる。ただし，盛土上の柱穴は検出できなかった。この建物跡の桁行を示すP1・P4間とほぼ一致するように，南側の斜面が他に比べて高所まで削平されており，その上端付近には幅20～40cm，長さ1.5mの平坦面も存在している。これは建物跡と関連をもつと考えられるもので，建物跡南側の桁行と斜面との間が比較的狭いこと，後述する土壙とかまど跡が桁行線上に重複していることから，廂などを渡した跡と想定される。



第13図　第3郭中央部遺物出土状況実測図（その1）



第14図　第3郭中央部遺物出土状況実測図（その2）

建物跡内からは土壙3基とかまど跡が検出されているが，かまど跡に接してP3が存在している。P3は前述したように建物の柱穴と考えられるもので，その四角形を呈する形状から，P1，P2と共に桁行3.3m，梁間2.2mの規模をもつ1間×1間の建物を構成していたとみられる。このP3で構成される建物と前述のP4で構成される建物との関係は，P3とかまど跡の切り合い関係によりかまど跡がP3より後出することが判明したことから，P3の建物からP4の建物に拡張されたことが想定される。また，かまどは拡張された建物に付随したものと考えられる。

なお，建物跡と同一平坦面上に存在しているP5，P6については，建物跡南側の桁行線に対して，P5がほぼ直角の位置にありP6が延長線上に位置することから，双方とも建物に関連する可能性はあるが，P5は規模が小さくP6は深さ及び構成される桁間が一定しないことから断定はし得ない。

3基の土壙はいずれも円形のプランを呈し，建物跡の南側桁行に沿うように並んで検出された。規模は東側の第2号土壙から順に，径70cm・深さ15cm，径50cm・深さ5cm，径50cm・深さ20cmを測る。これらの土壙は掘り込みが浅く，規模や断面形状において出土遺物の大甕の底部と類似したものがあることから，大甕を設置していた跡と考えることができる。

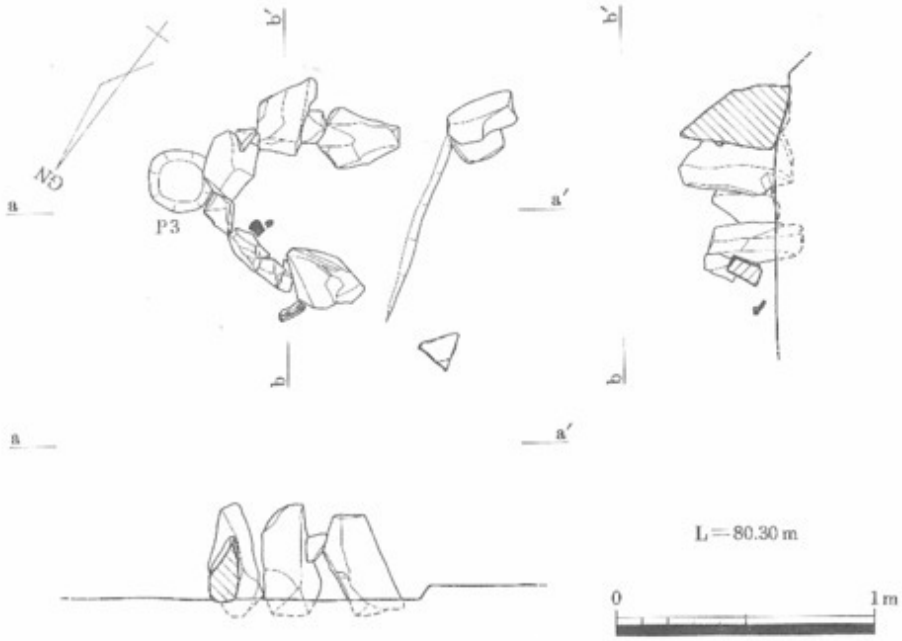
なお，第3号土壙の西側から土師質土器の皿，建物跡東側の梁間付近から鉄製品が出土している。

第2号かまど跡　（第16図）

建物跡内から検出された馬蹄形の石組みで，幅70cm，奥行き70cmの規模を有する。地山を若干掘り込んで高さ25～45cm，幅10～20cmの割石6個を用いて築いており，隙間に小角礫をはめている。

このかまど跡は，上面のレベルがほぼ一定になるように築かれ，西側に設けられた焚口付近と内部には炭を含む厚さ5cmほどの焼土の堆積がみられる。

焚口周辺から遺物として土師質土器の内耳鍋破片と備前焼の破片が出土している。



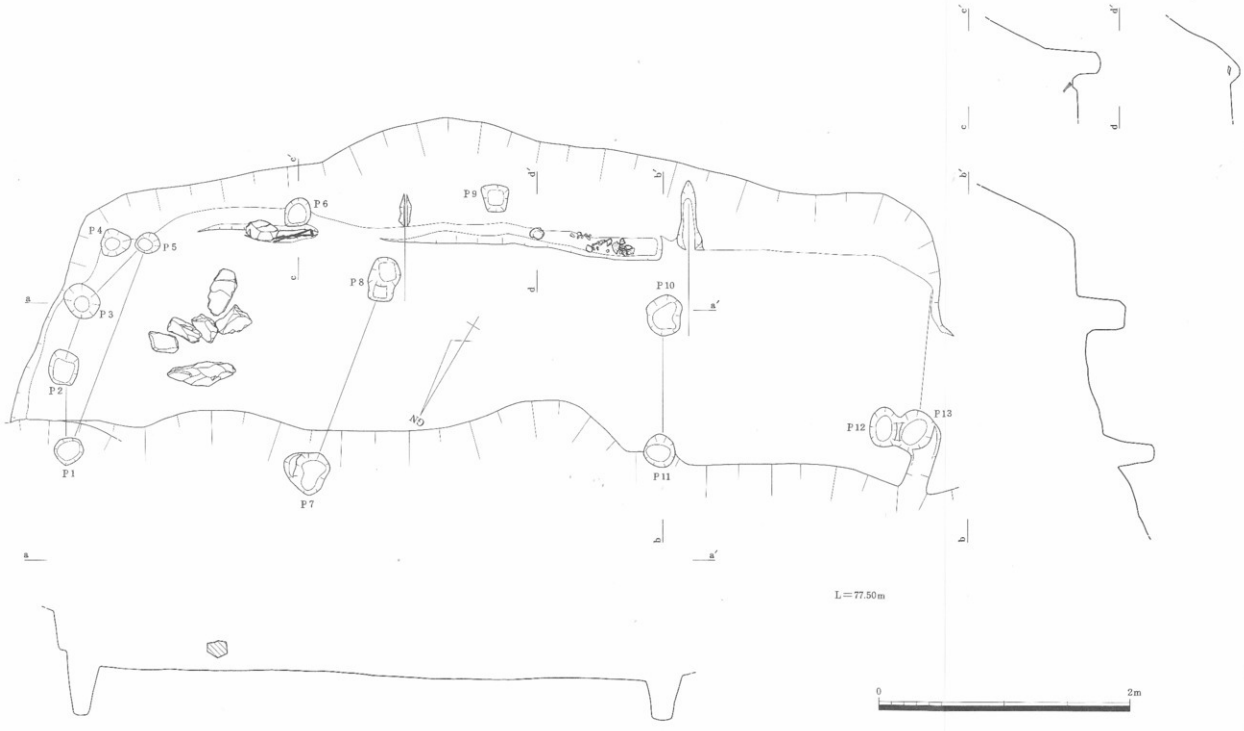
第16図　第3郭第2号かまど跡実測図

第4号柱穴群　（第17図）

第3郭西側の武者走りに接続する地点から13個のピット（P1～P13）が検出された。これらのピットは形状及び規模から柱穴と考えられる。すなわち，四角形を呈するものもいくつかあるが径及び幅は20～30cmとほぼ同規模であり，深さの点で2つの系統に大別することができる。一方は30～45cmの深さを有するもので主に削平面中央付近から縁辺部にかけて検出されており，P2，P3，P7，P8，P10～P13が該当する。他方は20cm余りの深さを有するもので削平面南側の斜面下付近を中心に検出されており，P1，P4，P5，P6，P9がこれに該当する。両者の比較から縁辺部付近の柱穴の方が深く造られていることがわかる。

構築物としてはまずP1，P3，P7，P8，P10，P11によるほぼ長方形の配置から建物跡が想定されようが，P7及びP8がいずれも桁行線上からはずれること，この2個の柱穴で形成される梁は斜めになること，立地が第3郭と武者走りを結ぶ狭い地点であることから，建物跡とは考え難い。

第15図　第3郭第4号建物跡・第2号～第4号土壙実測図



第17図　第3郭第4号柱穴群実測図

P4，P6，P9は1.5mほどの等間隔を有して南側斜面下付近に直線的に並ぶことから，土留め用の柵列が想定される。しかし，斜面下付近に設けられているとは言え一部分にしか存在していない点を考慮すれば，他の機能をもった構築物の存在が十分考えられる。

ところで，この地点の柱穴の配置は概ね郭の長軸方向と直交する関係をもっている。すなわち，P1とP5，P2とP3，P7とP8，P10とP11の対応関係がこれにあたる。この関係は柱穴どうし以外でも見うけられる。柱穴群の存在している南側の斜面からは，幅約3cmで奥行きが約25cm，幅約10cmで奥行きが約50cmを測る2つの細長い掘り込みが検出された。この掘り込みは形状及び方向からいずれも斜面と直角に板などを設置した跡とみられるものであり，P8とP10がそれぞれ対応関係をもっている。更に，第3郭の虎口を形成しているとみられる斜面とほぼ直角に突出した厚き約50cmの地山壁の東側壁面に，P13が対応する関係をもっている。

以上のように郭の長軸方向と直交する関係が数多く見られること及びこの地点が武者走りとの接続地点であることを考え合わせて構築物を想定すれば，通路を遮断する防禦施設としての板塀などがあげられる。

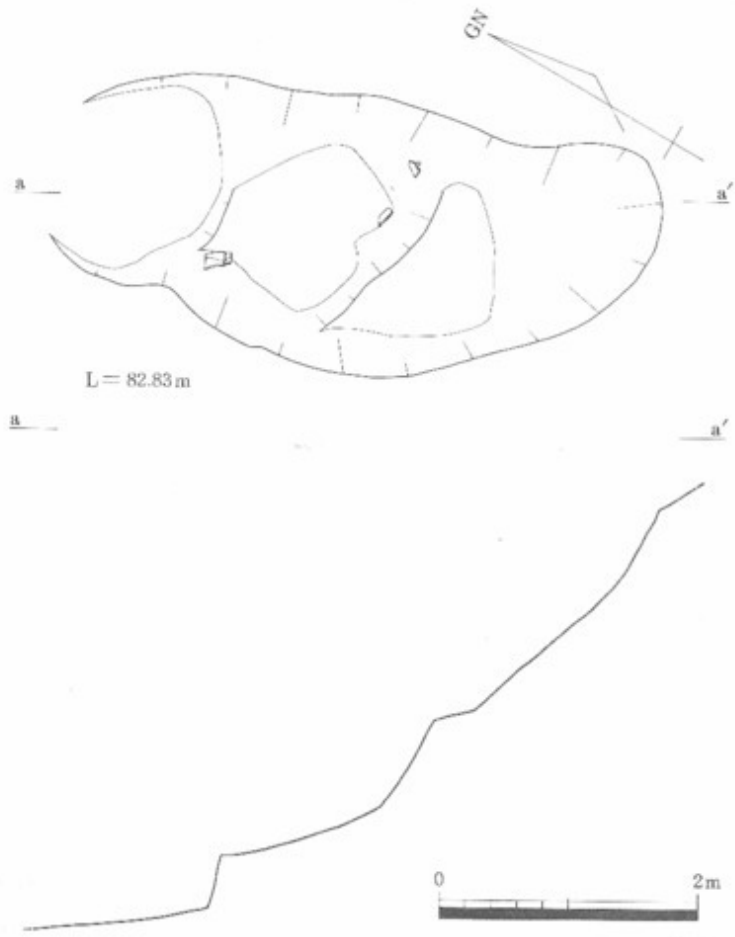
また，P1～P3及びP5はわずか1.5mの幅の削平面上に約50cmの等間隔で存在していることから，門などが構築されていたことも考えられる。

第3郭の中でこの地点だけは，武者走りと有機的に結びつけて強力な防禦機能をもたせる意図からか，郭内の他の部分のように盛土が行われていない。この点において，第3郭はこの地点と盛土が存在する地点とで異なる機能を有していたことが推察される。

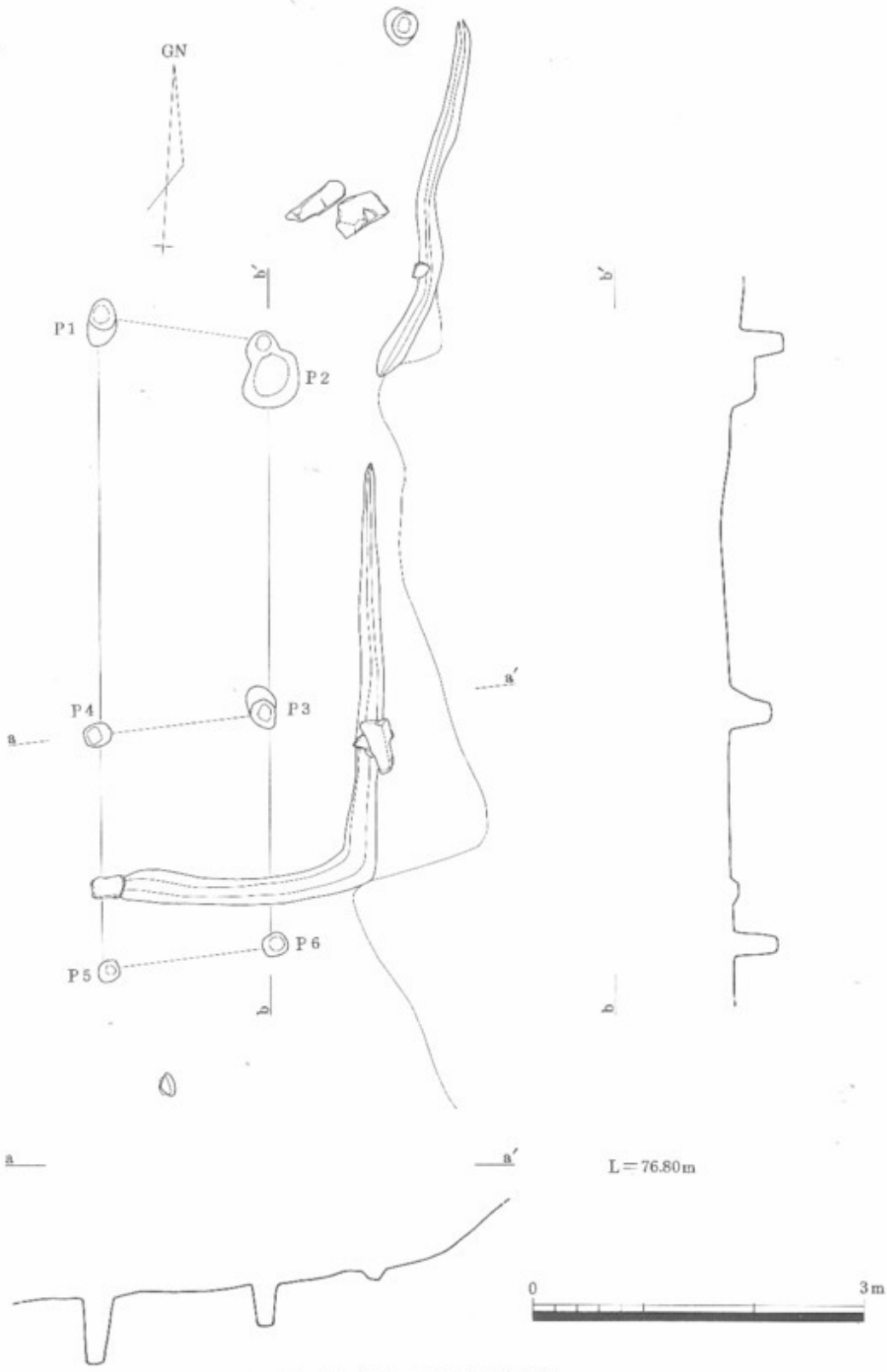
柱穴群が検出された地点の遺物には土師質土器の皿と火箸がある。火を焚いた跡はこの付近では検出されなかったが，最も近いところでは後述のように武者走りの中央部付近で検出されている。このことは，柱穴群のある地点が武者走りと関わりをもっていたことを示す1つの手がかりとみることもできよう。

縦堀状遺構（第18図）

第3郭中央部の地山削平面上1.1mの地点を下端として，第2郭・第3郭間の斜面が南北に5.5m，東西に1.5～2.0mの規模で掘り込まれているものである。地山直上より備前焼の破片が出土していることから，城に



第18図　第3郭縦堀状遺構実測図



第19図　第4郭第5号建物跡実測図

第20図　武者走り実測図

伴う遺構と考えられる。

この遺構は検出位置及び形態から縦堀と考えられるものであるが，縦堀のもつ横への移動を阻止する機能からみた場合，郭などの存在していない地点に設けられているため，断定はし得ない。

第　4　郭

第1郭の西側に配された郭で第1郭との比高差は約12mを測り，南北12m，東西6mの半円形のプランを呈する。この郭は土層観察などから，地山削平により削り出した土を縁辺部の斜面上に削平面と同レベルまで盛って，一体で利用していることが確認された。

また，調査前の観察では，南側の第5郭と連続していることが予想されたが，調査の結果，第5郭との間は急峻な崖になっており，幅30～40cmの細い通路が存在するだけであることが判明した。

第4郭からは建物跡が検出され，青磁碗が出土した。

第5号建物跡　（第19図）

第4郭のほぼ中央部から，柱穴と考えられる径20～25cm，深さ40～60cmの同規模のピット6個（P1～P6）が検出された。これらはその配置から，桁行5.4～5.9m，梁間1.5mの規模を有する1間×2間の掘立柱建物跡と考えられる。しかし，桁間はP2・P3間及びP1・P4間が3.3～3.8m，P3・P6間及びP4・P6間が2.1mであり等間隔を有していない。

一方，この建物跡の東側から南側にかけて，L字状を呈する幅20～25cm，深さ5～10cm，長さ5.8mの溝が検出された。この溝は建物跡とほぼ一定の間隔を保っていることから建物に関連するとみられ，西端が北端に比べて20cm程度低くなっており全体に傾斜をもっていることから，雨水排水のためのものと考えられる。

ところで，この溝は建物跡の東側を平行に3.6mほど南下してほぼ直角に折れ曲がり，P3・P4とP5・P6の間を梁と平行に2.2mほど西下して，西側桁行と直交する地点で収束する。この状況から，建物にP1，P2，P3，P4による1間1間で使用された時期があることが推察され，改築されたことが考えられる。

武　者　走　り　（第20図）

調査前の地形が急斜面であった第3郭と第4郭の間から，調査の結果，平坦面が検出された。この平坦面は幅が0.5～2.0cm，長さが20mにわたる細長いもので，両端がそれぞれ第3郭の西側と第4郭の北側で接続されていることから，武者走りと考えられる。平坦面の大部分は地山削平で築成されているが，区間中央部には岩盤が存在しており武者走りをふさいだとみられ，これを打ち欠いて平坦にしている。この岩盤部を境にして東側の削平面上から，溝と黒色土層が検出された。

溝は幅20cm，深さ10cmの規模をもち，斜面下に沿って8mにわたり存在している。東端から西端に向かって緩い傾斜をもっているが，性格は不明である。黒色土層は岩盤部に近い削平面上から検出されたもので，60cm×80cm程度の範囲で2～3cmほど堆積しており，炭を含むことから火を焚いた跡とみられる。この土層上とその周辺から，長さ40cm前後，幅20cm前後の石数個と備前焼の破片，土師質土器片，鉄製品が出土している。しかし，いずれも火を受けた痕跡は認められない。

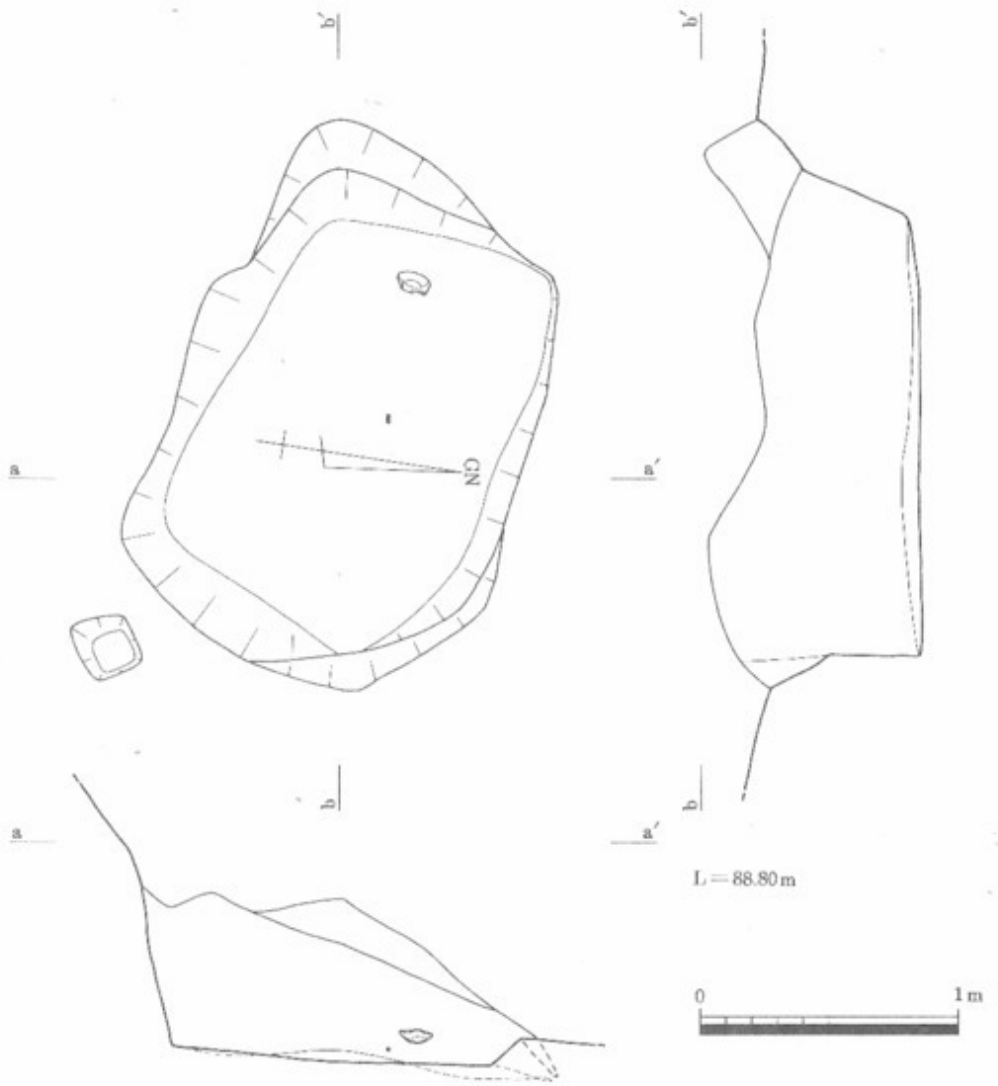
また，岩盤部に存在している大岩の風化が著しい上部からは，土師質土器の鍋が出土している。

第　5　号　土　壙　（第21図）

第1郭・第2郭間の斜面の東端部中ほどから検出されたものである。ほぼ長方形のプランを呈しており，現状では上縁部が長軸約2m，短軸約1.4mで，底部が長軸約1.6m，短軸約1.1mを測り，5～70cmの深さを有する。

土壙内の底部からは土器片が出土した。この土器片は器壁の厚さや色調などから弥生土器と考えられる底部の破片で，地山直上に存在していたことから土壙に伴うものと考えられる。したがって，この土壙は弥生時代の遺構と考えられる。しかし，時期については，底部1片のみであることから明らかにできない。また，土壙の性格も不明である。

弥生時代の遺構はこの土壙しか検出されず，遺構に伴う遺物も前述の1個のみであった。しかし，遺構に伴わない遺物として，土壙の周辺や第2郭，第3郭の盛土中から分銅形土製品の破片や土器片が出土していること，近辺に畳谷遺跡や畳谷東遺跡といった同様の立地をもつ弥生時代の遺跡が存在することから，以前ここにも弥生時代の遺構が存在していたとみられる。それが当山城の築城に伴って破壊され，斜面部に存在していた土壙だけが残存したと考えられる。



第21図　第1郭・第2郭間第5号土壙実測図

IV　遺　　物

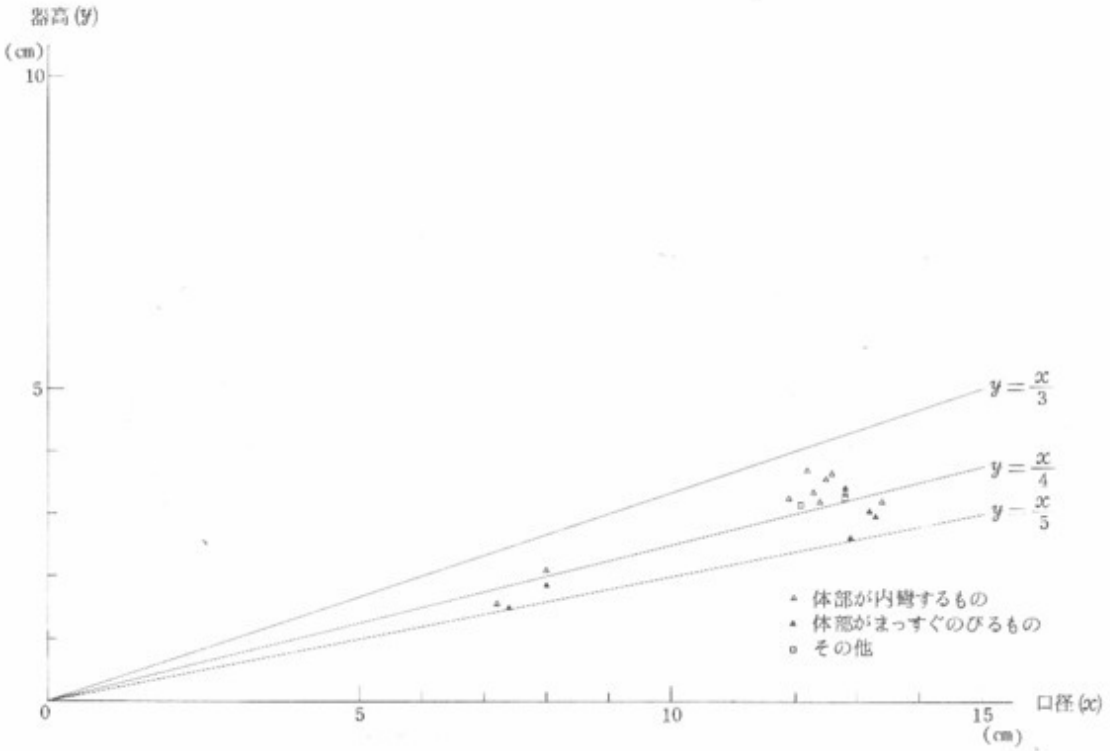
本城跡から出土した遺物には，土師質土器，瓦質土器，陶磁器，石製品，鉄製品などがある。土器の個々の大きさ，形状，特徴などについては，後の観察表にゆずり，ここでは，それぞれの概要について触れてみたい。

土師質土器　（第22・23・24図）

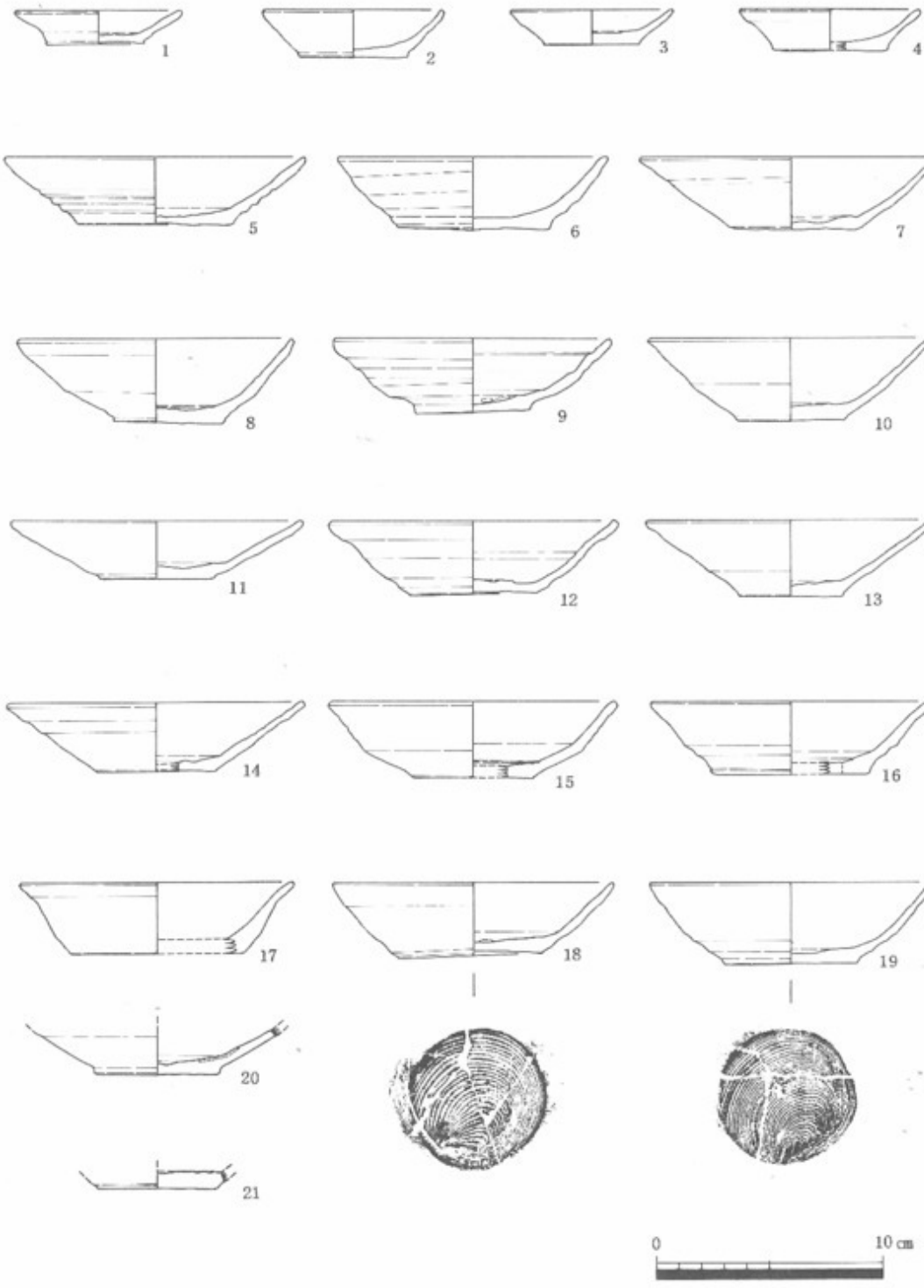
今回出土した土器類のうち，その大半は土師質土器である。この土師質土器は，ほとんどが皿によって占められており，[注1]口径と器高の関係からみて，さらに小形のものを抽出することが可能である（第1表）。成形は，何れもロクロによるもので，底部は糸切りによって切り離している。また，全体に軟調気味のものが多い。皿は，一般に供膳用と考えられるが，例えば，第4号建物跡内出土の中には，口縁部に煤が付着したものもあることから，灯明皿として使用されていたことも窺える。

体部の形態は，いくぶん内彎するものと，ほぼまっすぐのびるものとの2種類に大きく分けられる。また，法量の分布状況を見ると器高と口径の比が1：3から1：4の間のものは体部が内彎するものが多く見られ，1：4から1：5の間では体部がまっすぐのびるものが多く分布している（第1表）。

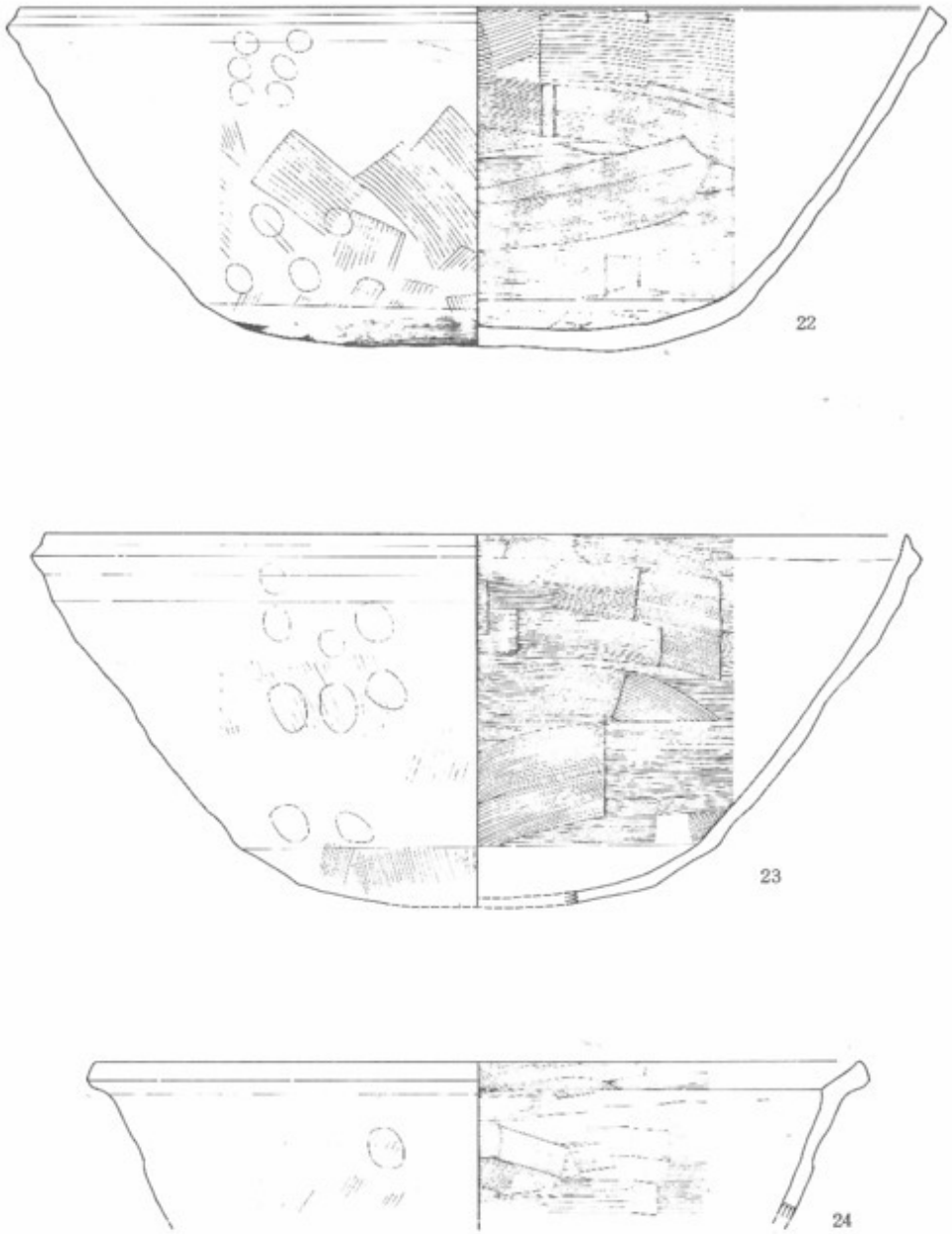
このような土師質土器は，草戸千軒町遺跡の例からみて，時間的推移と共に小型化，調整の粗雑化が現われてくる傾向があるとされている。[注2]断片的資料ではあるが，広島県西部においては，高田郡吉田町郡山城跡で表採された土師質土器と，周辺の遺跡から出土したものとを比較した場合，体部の形態が，内彎から外反するという傾向を示しており，これが室町時代から戦国時代末期にかけての時期に比定されている。[注3]



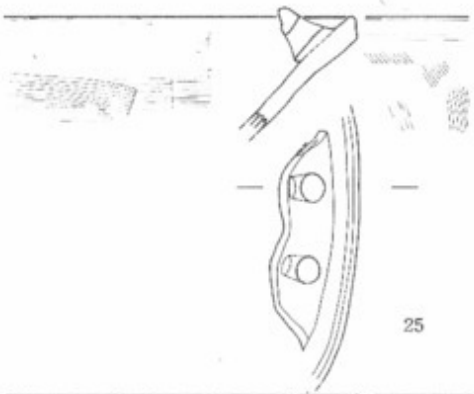
第1表　北谷山城跡出土土師質土器（皿）法量分布図

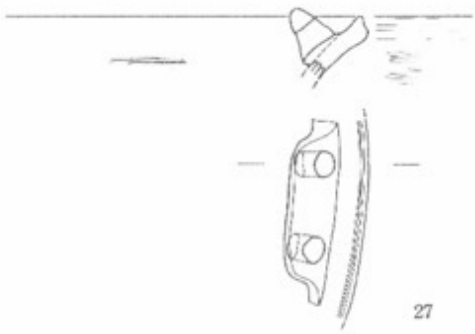


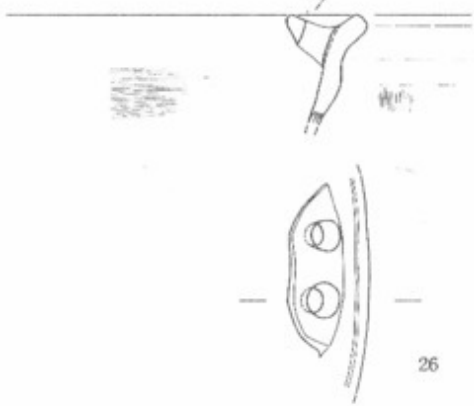
第22図　土師質土器実測図 (1)

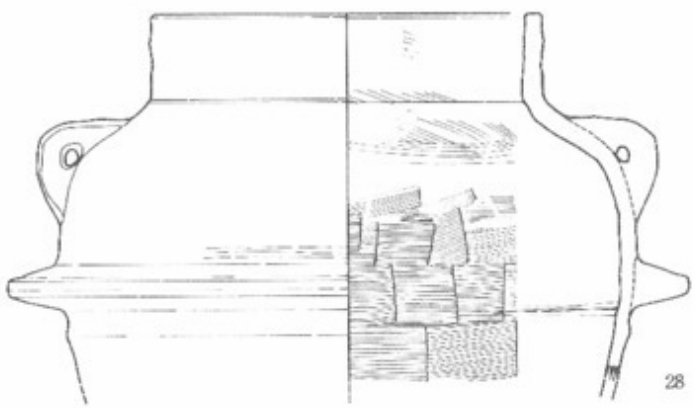


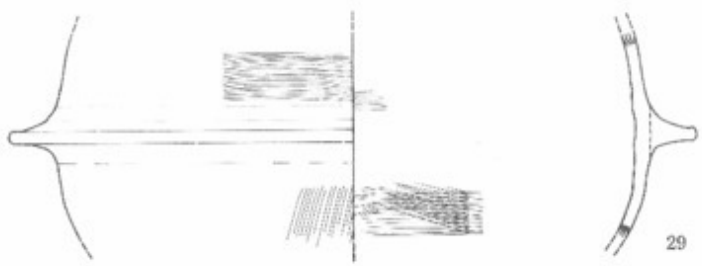
第23図　土師質土器実測図 (2)



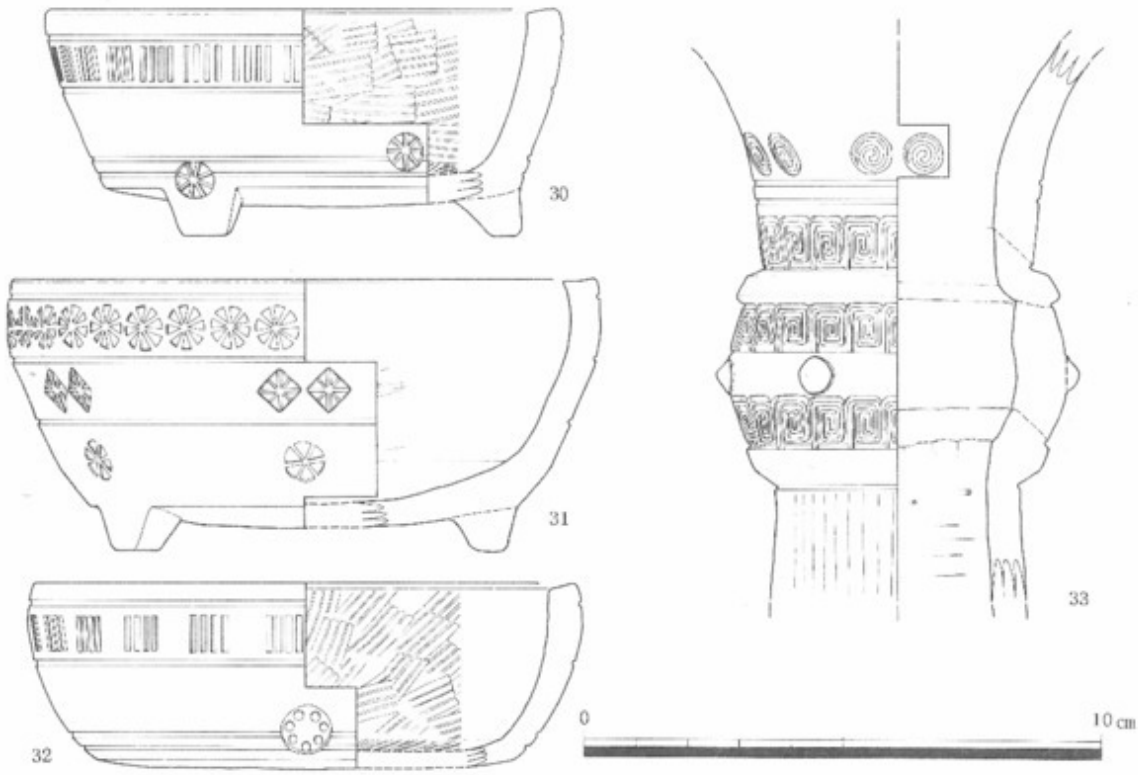








第24図　土師質土器実測図 (3)



第 25 図　瓦質土器実測図

このことは，先に述べたように本城跡出土の土師質土器の皿についても，体部が内彎するものから次第に開いていくという形態の変化は，器形の小型化と相まって，上記の傾向を概ね傍証することができそうである。このことからも，これらの皿は，15 世紀後半から 16 世紀前半頃の時期を推定することができよう。

また，本城跡から出土した土師質土器の皿は，磨滅が著しく底部の切り離し方法が不明のものもあるが，判別可能なものについては全て回転糸切り技法を採っている。今回の資料を観察した結果，２種類の回転糸切り技法が混在していることがわかった。そのほとんどは，糸を途中で引き抜く「離し糸切り」だが，中に，糸を完通させる「まわし糸切り」がある（9，19）。底部の縮小化は，ロクロによる糸切り技法の変化が大きく影響していると考えられるが，(注4)この２点を見る限りにおいては，形態，大きさ等の明確な違いを指摘することはできない。今回の資料は個々の時期差はあまり大きく隔たらないと見られるものの対比する資料が少ないこともあり，この違いが時期差によるものか，工人差によるものかは不明であり速断は慎みたい。しかし，２種類の技法が混在している点で興味深い資料であり，今後の類例を待ってさらに検討したい。

この他の土師質土器には，鍋，釜といった煮沸用のものがある。鍋は，内耳の付くものと付かないものに分けられる。前者については，大きさを推定し得なかったが，いずれも体部に対してほぼ直角に内耳が付き，断面形状を見ると，口縁部より高くなるものもある。このうち，25 については，第４号建物跡内に構築されたかまど跡のそばから出土している。また，後者については，内面全体を密なハケ目調整によって比較的滑らかに仕上げている反面，外面は凹凸が目立っている。22・23 は，幅や条痕の数から同一の原体でハケ目調整を施した可能性がある。22 は，武者走りの西寄りにある岩盤の窪みに静置したような出土状況を示しており，23 は，使用痕としての煤の付着が極めて顕著である。

釜は，体部の周りに鍔を貼り付けた羽釜である。28は，底部寄りを欠失しているが，球形気味の体部を有し，口縁部はほぼ直立する。29は，鍔の部分だけであるが，残存部分の形態や成形・調整技法が28と類似している点からみて同様の形態であった可能性がある。両者共，鍔以下に煤の付着が認められる。

瓦　質　土　器　（第25図）

瓦質土器としては，香炉と仏花瓶がある。香炉は3個体あるが，形態的にはあまり差異はない。施文に用いた型押を見ると，30と32の体部上半に見られる四本単位の長方形が，その形状・大きさから見て同一の原体と考えられる。

仏花瓶は，中位部分のみの出土ではあるが，残存部分からみてあまり大きくならないと思われる。上下の向きについては，他の類例などを勘案して一応開く側を上とした。しかし，調整は，直線的にのびる側を内外面共丁寧に仕上げており，この点を考慮した場合，さらに上下の方向については逆転する可能性もある。

陶　磁　器　（第26・27・28・29図）

これに属するものとして，備前焼，青磁・白磁などがある。

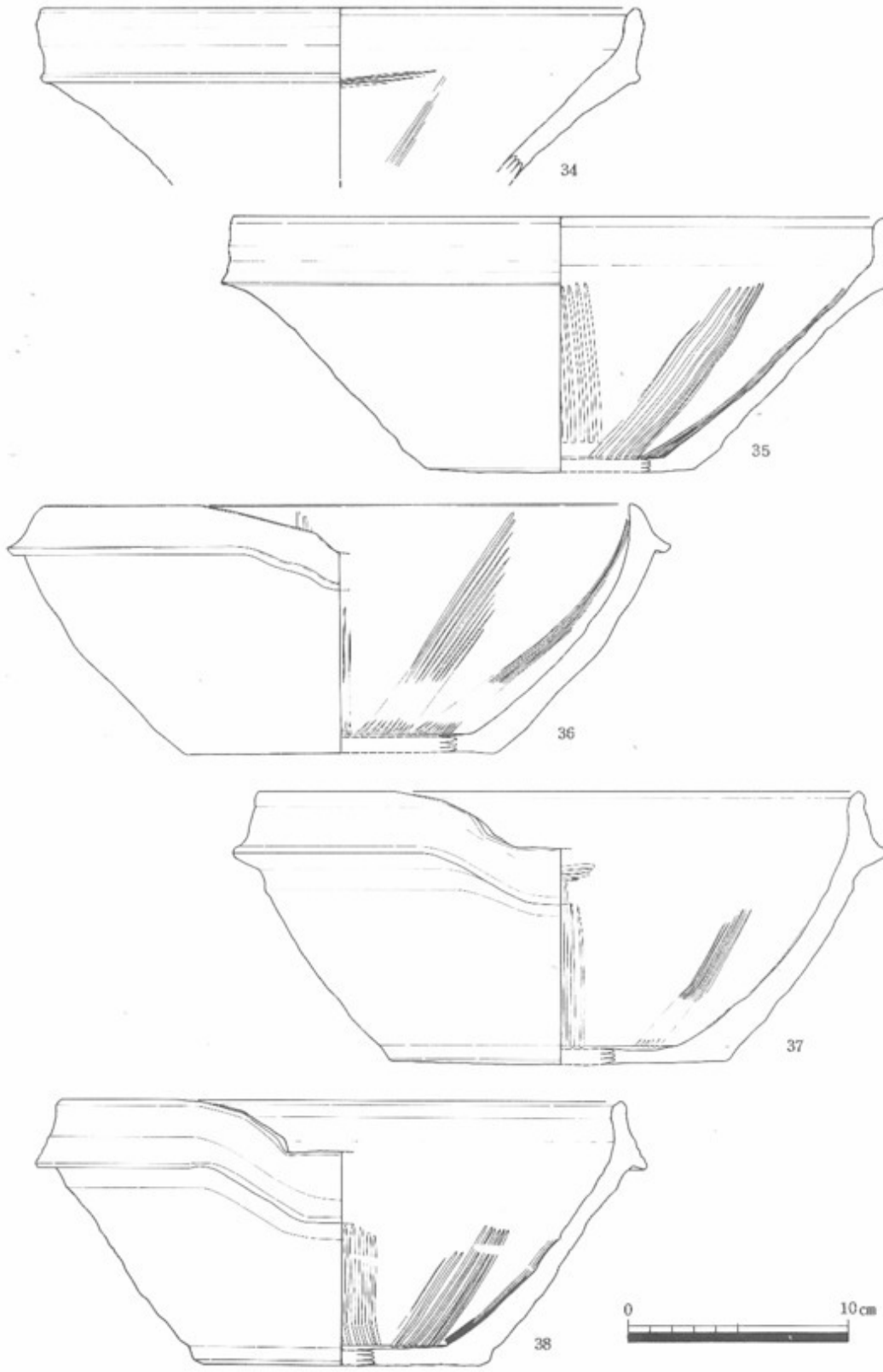
備前焼は，すり鉢，深鉢，甕がある。また，図示し得なかったが，櫛歯状工具により平行沈線と波状文を施した壷の肩部の小片も見つかっている。すり鉢の口縁部は立ち上がりが大きく，甕は口縁部を長く折り返した玉縁をつくり出している。これらの特徴は，Ⅳ期後半頃の特徴を具備していると考えられる。(注5)

すり鉢は，いずれも使用痕が認められ，36，37のように内面のカキ目が消えてしまったものもある。深鉢は，武者走りの西寄りの焼土範囲より出土した。鉢自体は火を受けた痕跡がなく，後からその場に廃棄されたものと考えられる。また，40の甕は，口縁部が第2郭東側，底部が第3郭西側，体部が縦堀状遺構内より出土しており，これらの出土状況を見ると，明らかに本城跡が営まれた時期にこのように割れて散乱したと考えられる。以上のような出土状況は，いずれも本城跡の廃絶要因を類推する上で興味深い。

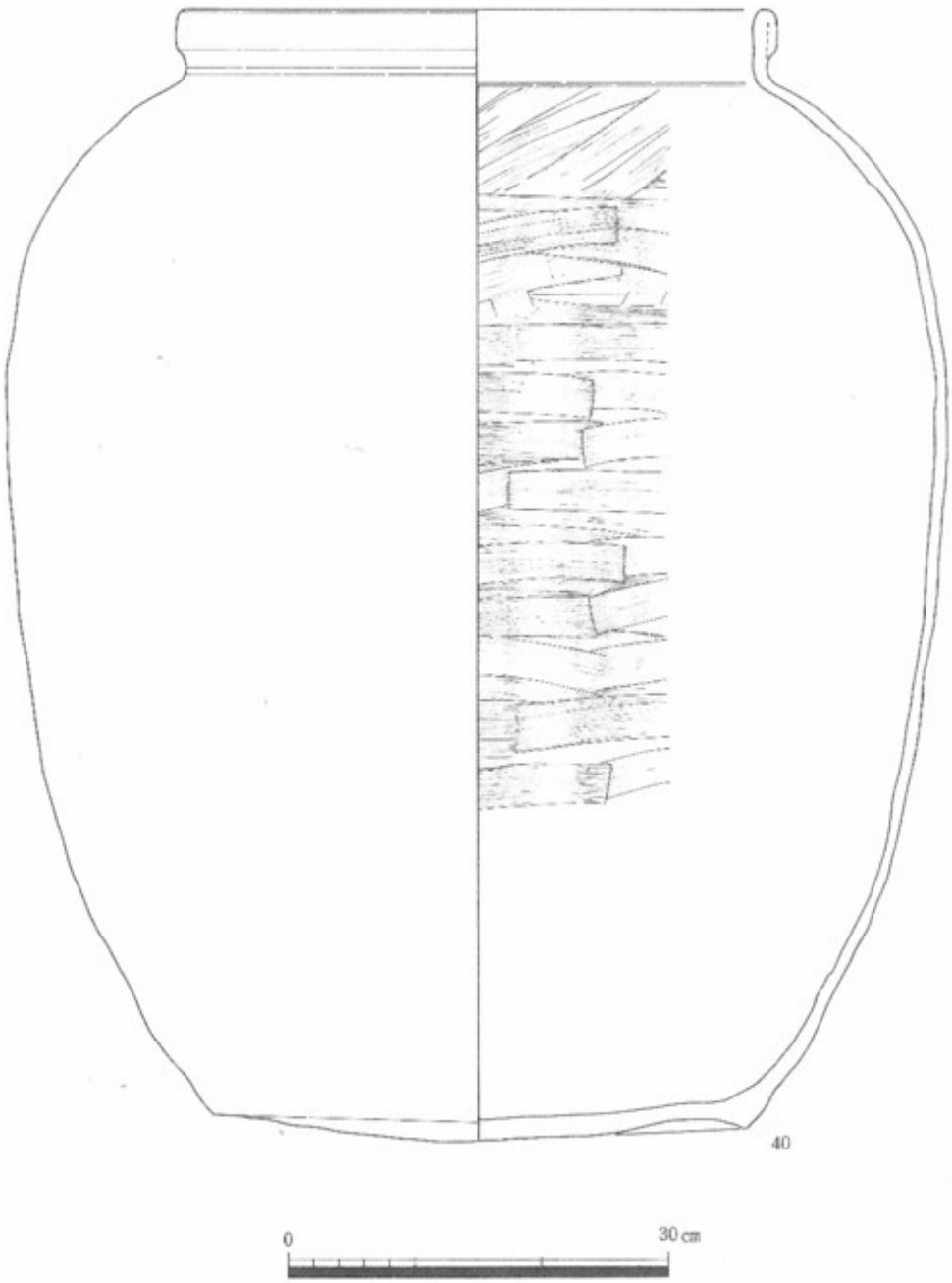
なお，深鉢については，内面上位に「大」と篦で記しており，同様の窯印をもつものとして，池田城跡出土の甕が見つかっている。(注6)これらの資料は，中世における備前焼の流通径路，範囲を知る上で貴重な資料であり，今後の類例増加が期待される。

青磁は，いずれも明代龍泉窯系の碗で，外面に連弁文を有している。ただし，45については幅広の連弁文を施しているが，46・47については細線の連弁文を描いている。また，45の内面には草花文が見られるが，他は無文である。これらの違いは，45が他のものよりもやや先行する特徴としてとらえられ，45は15世紀前半，その他については15世紀末から16世紀前半にかけて製作されたものということができよう。(注7)

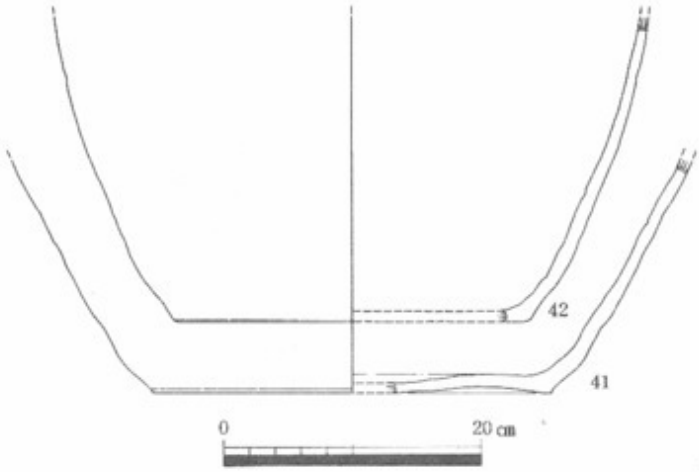
白磁については，43が中国明代のものと考えられる。また，44は李朝の白磁系皿と考えられるが，両者共窯名は比定し得なかった。(注8)

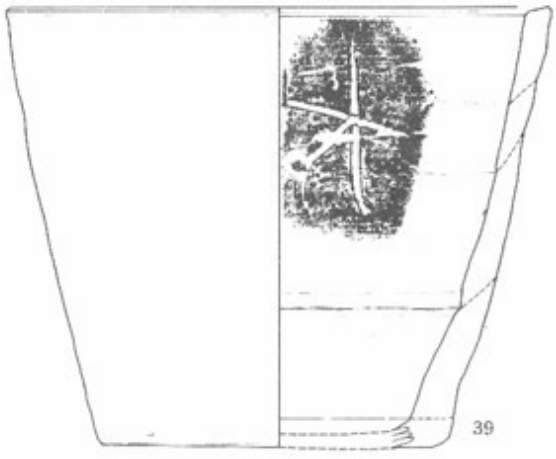


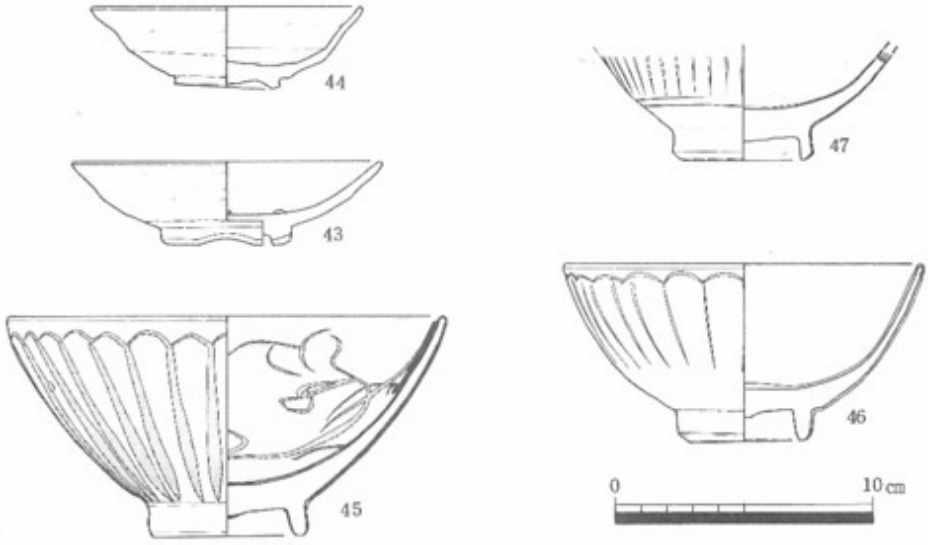
第 26 図　陶磁器実測図 (1)



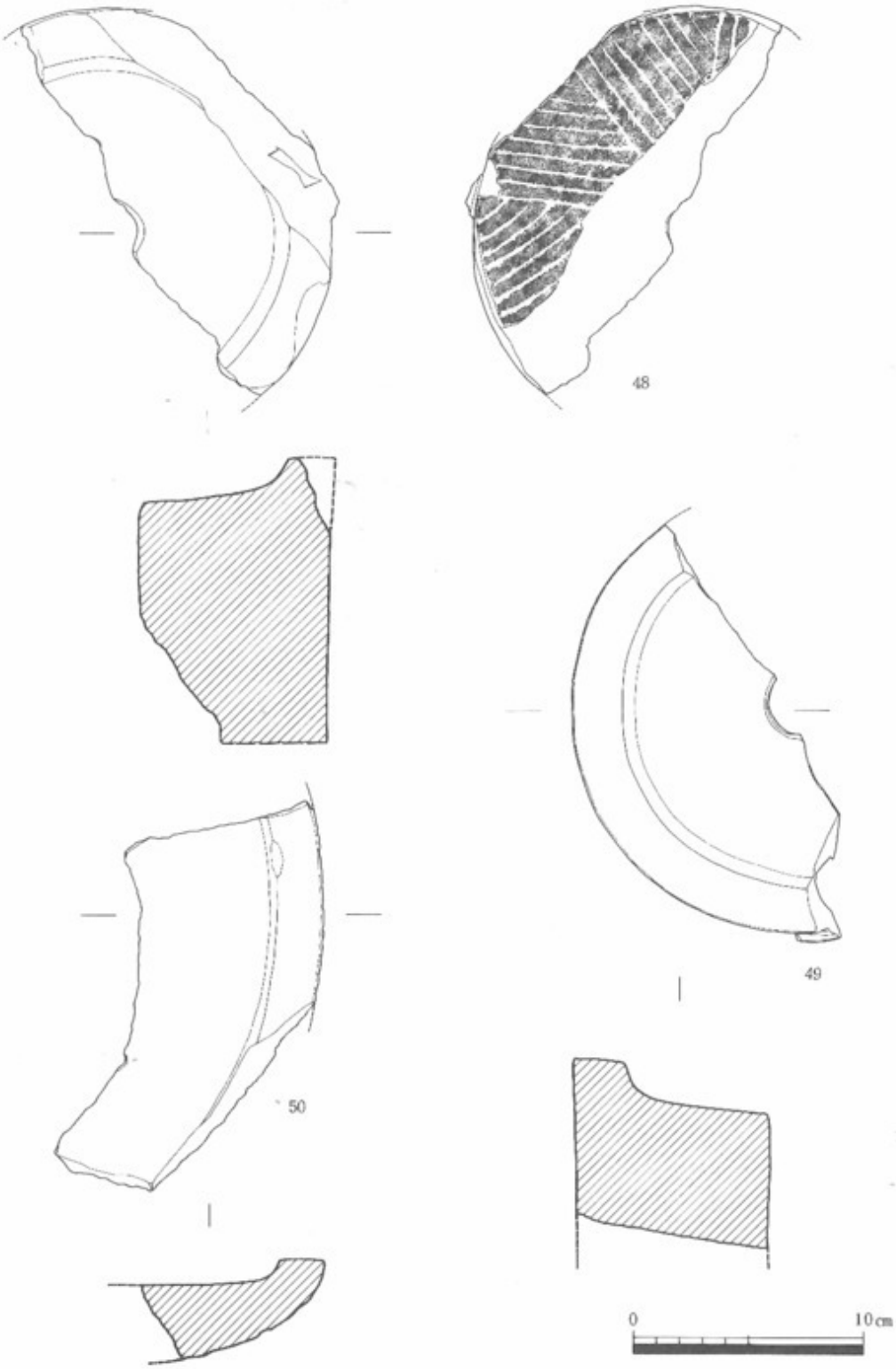
第 27 図　陶磁器実測図 (2)







第 28 図　陶磁器実測図 (3)



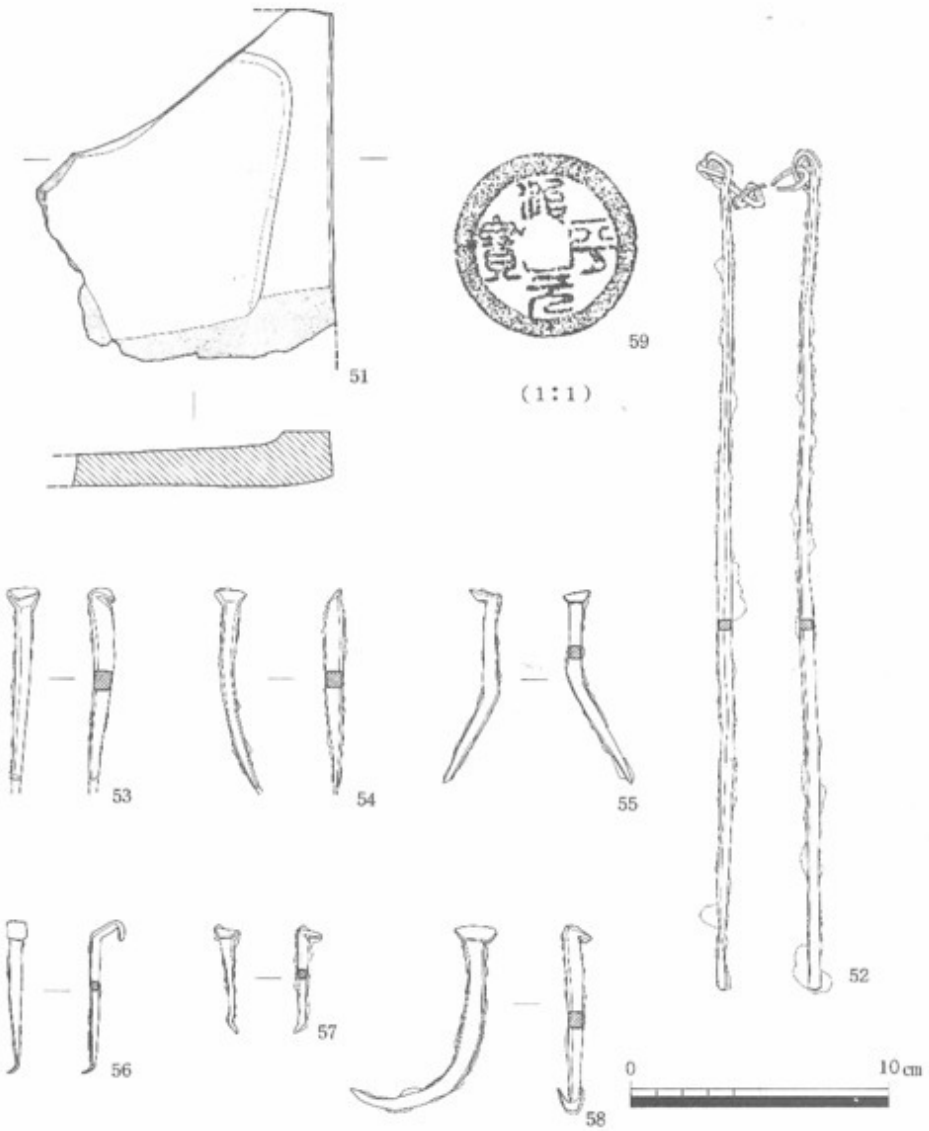
第 29 図　石 製 品 実 測 図

石　製　品　（第29・30図51）

石製品には，石臼と硯がある。

石臼は，いずれも細粒な花崗岩質の磨臼である。48は，44の白磁系皿と共に，第4号建物跡の西側から出土した。12.4cmの高さを測り，上面をくぼませて研磨調整し，中央寄りに穿孔部分が残る。裏の溝は断面U字形で，側面に柄をつける穴がある。49も上臼で，裏面は残っていないが，製作技法上は48と同一であり，大きさもほぼ近似する。50は茶臼の下臼と考えられ外面をノミ状工具で調整している。臼部は残っていないが割れ口部分を観察すると，下側に高台の名残りがある。

硯は，第3郭北側より出土したもので，粘板岩質の長方硯と考えられる。長さ，幅については不明であるが，厚さは21cmを測る。陸部が側面に沿っておらず，再加工した可能性を残している。



第30図　石硯・鉄製品実測図及び古銭拓影

鉄　製　品　（第30図52～58）

鉄製品には，火箸，鉄釘がある。

火箸は，第4号柱穴群より出土したものである。一対の長さはそれぞれ32.2cm，32.3cmを測る。断面は方形を呈し，最大部分の厚さは0.4×0.5cmである。尖り気味の尻の部分を折り曲げて，鎖で連結させている。ただし，箸が出土した近辺には火を受けた痕跡は見受けられなかった。

鉄釘はいずれも，頭部を薄くつぶした後折り曲げ，断面は方形を呈する形態のものばかりである。長さ3.5cm～10.6cm，断面面積0.04cm²～0.25cm²を測る。

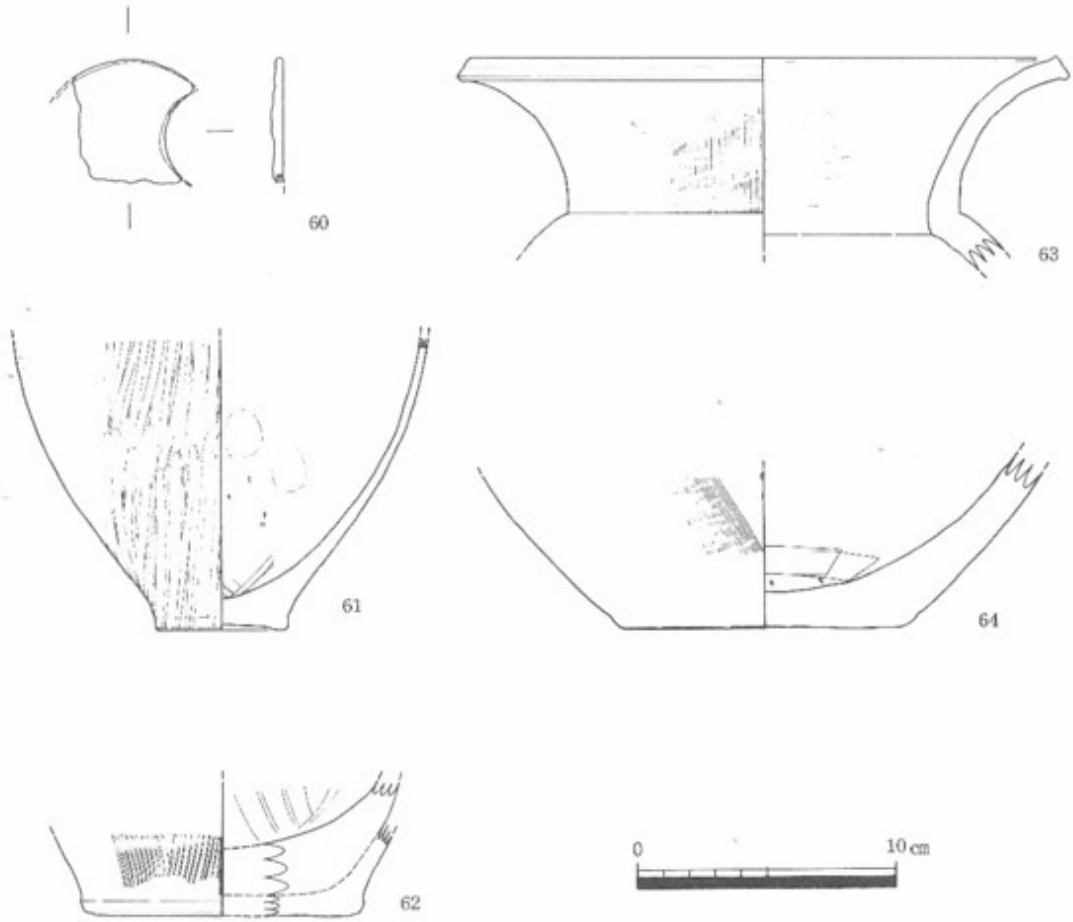
古　　銭　（第30図59）

古銭は3枚出土したが，判読可能なものは1枚だけである。これは第4号建物跡の西側から出土した。銭種は治平元寶で，北宋の治平元年（1064）が初鋳年である。

また，判読不可能な残りの2枚は，いずれも第1号かまど跡の西側から出土した。

なお，今回の調査では，中世関係の遺物のほかに，分銅形土製品，弥生土器が出土した。これらは，第3郭の地山削平による平坦面を前方へ拡張した盛土内，及び第1郭と第2郭の間の斜面で検出された第5号土壙内とその周辺から出土した。60の分銅形土製品は，第5号土壙から北東約3.5mのところで出土したが，流れ込みの出土状況を示していたため，時期を推定する決め手を欠く。中央部厚は約5mmを測るが，残存する形状からは，元の大きさを推定しかねる。裏面は，平たく，表面は，全体的に磨滅が著しいがわずかに凸面を呈している。色調は黄褐色を呈し，焼成はやや軟調，胎土は砂粒を若干含む。61は，甕の下半部で第5号土壙南西約2mの第1郭側から第2郭へ下がる斜面において検出された。凹気味の底部は，直径4.8cmを測り，体部は内彎気味に立ち上がる。外面は縦方向へのヘラ削り後ナデ調整，内面は，縦方向のヘラ削り後ナデ調整を施し，底部付近は0.5cm幅の細いヘラ状工具を用いてナデている。上半部には煤が付着し，底部寄りに焼成時の黒斑が認められる。色調は黄褐色を呈し，焼成は良好，胎土は砂粒を含み，金雲母も認められる。62は，底部のみであるが，土壙内からの唯一の出土遺物である。平底を呈し，底径10.6cmを測る外面は縦方向のハケ目調整後，内面はヘラ状工具によるナデ調整を施している。器壁は粘土を貼り付けて厚く仕上げている。色調は，外面が赤褐色，内面は明褐色を呈し，焼成は軟調，胎土は砂粒・金雲母を比較的多く含む。

63・64は共に第3郭盛土内より出土したもので，他にも小片ではあるが，比較的多くの弥生土器が出土している。63は，口縁部で，推定口径22.5cm，推定頸部径13cmを測る。肩部から強く折れ曲って外反気味に大きく開き，口縁端部はわずかに肥厚し，凹み気味に仕上げている。外面は，縦方向のハケ目調整後ナデ調整，内面はわずかに横方向のハケ目調整が認められる。色調は明褐色を呈し，焼成は良好，胎土は砂粒を比較的多く含み，金雲母もわずかに見られる。64は底部で，底径10.6cmを測る。外面はわずかにハケ目調整が認められる。内面の底部付近はヘラ状工具を用いてナデ調整を行っている。色調は明褐色を呈し，焼成はやや軟調，胎土は砂粒を多く含み金雲母もわずかに認められる。



第31図　弥生土器実測図

(注1)　草戸千軒町遺跡の場合，土師質土器を分類する基準として，法量を用いており，一般に器高3cm以上を杯，3cm未満を皿と呼称している。しかし，本例の場合，器高3cm前後に集中し，用途の違いがはっきりしない中で，分類することは無意味なので，ここでは一応皿という名称で統一した。

(注2)　恵道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」（調査研究ニュース『草戸千軒』No.48）1977年

(注3)　小都　隆「高田郡吉田町郡山城跡採集の土師質土器」『芸備』第1集　1973年

(注4)　小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』101号　1979年

(注5)　間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古学館研究集報』1・2・5号　1966～1968年

(注6)　広島市教育委員会『池田城跡発掘調査報告』　1986年

(注7)　東京国立博物館鑑識室　矢部良明氏御教示による。

(注8)　(注7と同じ)

表２　北谷山城跡出土遺物観察表

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm) 口径(a)	底径(b)	器高(c)	口径/器高 (a/c)	口径/底径 (a/b)	形態	成形・調整	備考
1	５郭北側	皿	7.4	4.3	1.5	4.93	1.72	体部は，ほぼ直線的に立ち上り，口縁部はわずかに肥厚する。 口縁端部は，平ら気味におさめる。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟質 胎土：砂粒を多く含み，金雲母が見られる。
2	３郭西側	皿	8.0 (推定)	4.6	2.1 (推定)	3.81	1.74	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は肥厚する。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：黄褐色 焼成：やや軟質 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母がわずかに見られる。
3	第３号建物跡	皿	7.2 (推定)	4.2	1.55 (推定)	4.65	1.71	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 底部は全体的に厚手である。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：黄褐色 焼成：良好 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。 口縁部に煤が付着する。
4	第３号建物跡	皿	8.0 (推定)	5.0 (推定)	1.85 (推定)	4.32	1.6	体部は，ほぼ直線的に立ち上り，口縁端部はわずかに肥厚する。 口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は肥厚する。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：黄褐色 焼成：良好 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。
5	武者走り	皿	13.3 (推定)	6.8 (推定)	2.95 (推定)	4.51	1.96	体部はほぼ直線的に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は少し肥厚する。 体部外面に強い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：褐色～暗褐色（混ざんでいる） 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母はほとんど見られない。 体部下半の外面に棒状工具によって施した４本の凹みが周回する。 器表は磨滅している。 火を受けた可能性がある。
6	第３号柱穴列	皿	11.9	6.6	3.25	3.66	1.80	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は肥厚する。 体部外面に弱い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は磨滅のため，調整不明。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟質 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。 全体的に磨滅が激しい。 口縁部は皮打っている。
7	第２号掘物跡北側	皿	13.4	5.25	3.2	4.19	2.55	体部はいくぶん内彎気味に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は少し肥厚する。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：灰色，部分的に暗灰色 焼成：軟質 胎土：砂粒を多く含み，金雲母が見られる。 器表は磨滅している。 火を受けた可能性がある。

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm) 口径(a)	底径(b)	器高(c)	口径/器高 (a/c)	口径/底径 (a/b)	形態	成形・調整	備考
8	5郭北側	皿	12.2 (推定)	4.8	3.7 (推定)	3.30	2.54	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は平たくおさめる。 底部は全体的に厚手である。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。
9	5郭北側	皿	12.3	5.1	3.35	3.67	2.41	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部はいくぶん平ら気味におさめる。 体部と底部の境は少し肥厚する。 体部外面に弱い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。 底部内面に指頭痕あり。 体部下半の内外面に部分的に黒斑がある。 体部の凹凸が激しい。
10	3郭西側	皿	12.6 (推定)	4.7 (推定)	3.65 (推定)	3.45	2.68	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は平ら気味におさめる。 底部は全体的に厚手である。 口縁端部に強い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ後仕上げナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。
11	3郭西側	皿	12.9 (推定)	5.05	2.6 (推定)	4.96	2.55	体部はほぼ直線的に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 底部は全体的にやや厚手である。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：軟調 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母がわずかに見られる。 体部下半の内面に部分的に黒斑がある。
12	第3号柱穴列	皿	12.8 (推定)	5.65	3.25 (推定)	3.94	2.27	体部下半は内彎気味，体部上半はほぼ直線的に立ち上り，口縁端部は肥厚する。 口縁端部はいくぶん平ら気味におさめる。 底部は中央が少し肥厚する。 体部外面に弱い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：暗褐色～褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。
13	3郭西側	皿	12.8 (推定)	4.5	3.4 (推定)	3.76	2.84	体部は直線的に立ち上り，口縁端部はいくぶん平ら気味におさめる。 底部は全体的に厚手である。 体部外面に弱い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は不明。	色調：褐色～暗褐色（内面） 赤褐色（外面） 焼成：軟調 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母がわずかに見られる。
14	4郭北側	皿	13.2 (推定)	5.3 (推定)	3.05 (推定)	4.33	2.49	体部はほぼ直線的に立ち上り，口縁端部は平たくおさめる。 体部と底部の境は少し厚くなる。 体部外面に強い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 体部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。 外面に煤が付着する。
15	第3号柱穴列	皿	12.8 (推定)	5.3 (推定)	3.35 (推定)	3.82	2.42	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は平たくおさめる。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。	色調：暗褐色～褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm) 口径 (a)	底径 (b)	器高 (c)	口径/器高 (a/c)	口径/底径 (a/b)	形態	成形・調整	備考
								底部は全体的に厚手である。 口縁端部に強い稜。	底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	金雲母がわずかに見られる。 底部内面に棒状工具によって施した3本の溝が周回する。
16	第3号柱穴列	皿	12.4	6.9	3.2	3.88	1.79	体部はいくぶん外反気味に開き，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は少し肥厚する。 体部外面に強い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ，底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は不明。	色調：褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。
17	3 郭 西 側	皿	12.1 (推定)	7.5 (推定)	3.15 (推定)	3.84	1.61	体部は外反気味に開き，口縁端部は丸くおさめる。 体部下半はかなり肥厚する。 底部は欠失しているが全体的に厚手と思われる。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は調整不明。 底部の切り離し方法は不明。	色調：褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒をほとんど含まず，金雲母がわずかに見られる。
18	第3号建物跡	皿	12.4 (推定)	6.3	3.2 (推定)	3.88	1.97	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。 体部と底部の境は肥厚する。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：明褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。 底部内面に指頭痕あり。
19	1 郭 西 側	皿	12.5 (推定)	5.85	3.55	3.52	2.14	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は尖り気味におさめる。 体部と底部の境は少し肥厚する。 体部外面に強い稜。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面はナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：黄褐色～褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，黒雲母が内面に見られる。 体部上半の外面にススが付着する。
20	第3号柱穴列	皿	—	5.6	—	—	—	体部はほぼ直線的に立ち上り，体部と底部の境は肥厚する。	ロクロによるまきあげ成形後，体部内外面共ヨコナデ。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：褐色 部分的に灰色に転じる。 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母が見られる。
21	1 郭 西 側	皿	—	5.1	—	—	—	体部は欠失しているため不明だが，底部は全体的に厚手である。	ロクロによるまきあげ成形と推定される。 底部内面は回転ナデ。 底部の切り離し方法は回転糸切り。	色調：黒灰色（内面） 明褐色（外面） 焼成：良好 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母が見られる。

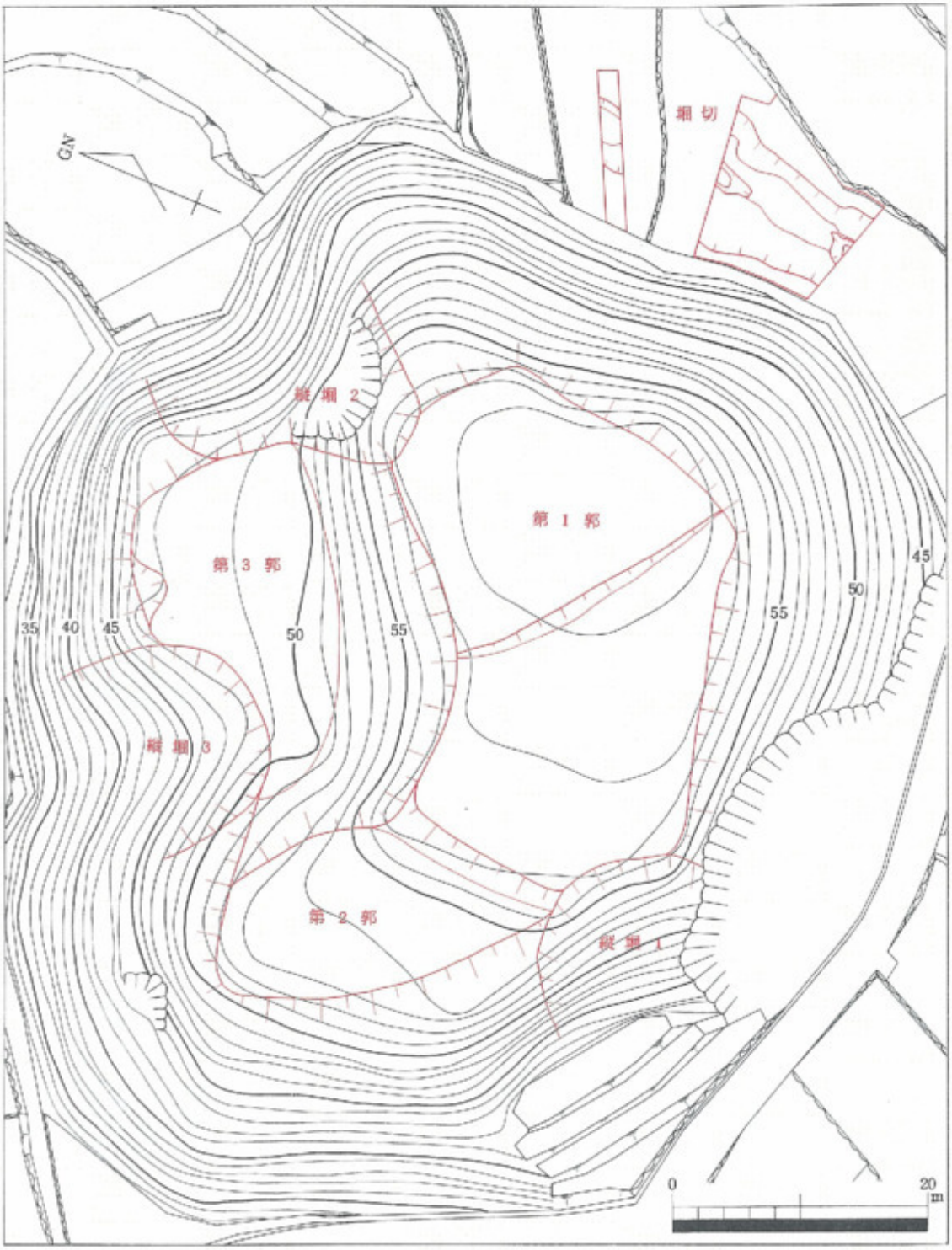
図面No.	出土地点	器種	法量	形態	成形・調整	備考
22	武者走り西端	鍋	口径 35.2 cm 器高 18.15 cm	体部はいくぶん内彎気味に立ち上り，口縁部は肥厚する。 口縁端部は凹み気味におさめる。 底部は体部に比べて少し厚手である。 体部と底部の境はあまり明瞭でない。	体部内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 底部は内外面共縦横方向のハケ目調整後ナデ調整。 体部外面は縦～斜め方向に粗いハケ目調整後，口縁部付近は横ナデ調整，残りはナデ調整。 口縁端部は横ナデ調整。	色調：黄褐色（内面） 褐色（外面） 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み 金雲母が見られる。 底部外面は火を使用したために煤が付着する。 全体的に外面の凹凸が著しい。 （指頭痕あり）
23	3 郭 西 側	鍋	口径 33.4 cm (推定) 器高 14.5 cm (推定)	体部はいくぶん内彎気味に立ち上り，口縁部は肥厚する。 口縁端部は凹み気味におさめる。	体部内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 底部内面はナデ調整。 底部外面は縦方向に粗いハケ目調整	色調：黄褐色～褐色（内面） 黒色（外面） 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み。

図版No.	出土地点	器種	法量	形態	成形・調整	備考
				体部と底部の境はあまり明瞭でない。	後ナデ調整。 口縁端部は横ナデ調整。	金雲母が見られる。 底部外面は火を使用したために煤がかなり付着する。 特に体部下半に顕著である。 全体的に外面の凹凸が著しい。 （指頭痕あり）
24	5 郭 北 側	鉢	口径 29.7 cm（推定）	口縁部は肥厚し，外へ折れ曲がる。 口縁端部は平たくおさめる。	内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 外面は斜め方向の粗いハケ目調整後ナデ調整。 口縁端部は横ナデ調整。	色調：黄褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。 外面に黒煤が付着する。 全体的に外面の凹凸が著しい。 （指頭痕あり）
25	第4号住物跡かまど跡そば	内耳鉢	—	口縁端部は肥厚し，ほぼ直角に内耳がつく。 口縁端面は凹み気味におさめる。 内耳は貼り付け後，上から穿孔する。	内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 外面は縦方向のハケ目調整後，ナデ調整。 口縁端面は横ナデ調整。	色調：黄褐色（内面） 　　淡黄褐色（外面） 焼成：良好 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が比較的多く見られる。 内外面に煤が付着する。
26	1 郭 西 側	内耳鍋	—	口縁端部は肥厚し，ほぼ直角に内耳がつく。 口縁端面は平たくおさめる。 内耳は貼り付け後，上から穿孔する。	内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 外面は縦方向のハケ目調整後，ナデ調整。 口縁端面は横ナデ調整。	色調：淡黄白色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母がわずかに見られる。
27	3 郭 西 側	内耳鍋	—	口縁端部は肥厚し，ほぼ直角に内耳がつく。 口縁端面は凹み気味におさめる。 内耳は貼り付け後，上から穿孔する。	内外面共横方向のハケ目調整後ナデ調整。 口縁端面は横ナデ調整。	色調：淡黄褐色 焼成：良好 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。
28	第4号掘物跡西寄り	羽 釜	口 径 13.8cm（推定） 胴 部 最大径 22.4cm（推定） 鍔 幅 2.3cm 鍔 厚 0.7～1.7cm	口縁部はほぼ垂直に立ち上り，口縁端部は平たくおさめる。 胴部には両側から穿孔した釣手を貼り付ける。 鍔も貼り付け。	体部内面は，横方向のハケ目調整後ナデ調整。 外面は縦直上に粗いハケ目調整。 口縁部内面は斜め方向のハケ目調整後ナデ調整。 口縁端面及び鍔は横ナデ調整。	色調：黄褐色（外面） 　　暗黄褐色（内面） 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。 鍔以下は火を使用したために煤が付着する。
29	第3竪穴穴列	羽 釜	胴部最大径 23cm（推定） 鍔 幅 18cm 鍔 厚 0.5～1.3cm	鍔は貼り付け。	鍔以上は内外面共横方向のハケ目調整後ナデ調整。 鍔以下は外面が縦方向のハケ目調整後ナデ調整。 内面は横方向のハケ目調整後ナデ調整。 鍔は横ナデ調整。	色調：明褐色 焼成：やや軟調 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母がかなり多く見られる。 鍔以下には火を使用したために部分的に煤が付着する。
30	5 郭 北 側	香 炉	口 径 8.5cm 脚高（合脚） 4.4cm 脚 高 0.7cm	体部は内彎しながら立ち上がり， 口縁内部は平たくおさめる。 底部は平ら気味である。 脚は貼り付けており，元は3箇所あったと思われる。	内面は横方向にハケ目調整後ナデ調整。 外面は丁寧なナデ調整。 体部外面には，上部・下部それぞれに2条ずつのヘラ状工具による凹線が巡る。 上部には，その区画的に4本単位の長方形の型押文が連続する。 下部には脚のつけ根部分と脚間の計6ケ所に，中を6つに区画した菊花文の型押が施される。	色調：黒色（内面） 　　赤褐色（外面） 焼成：良好 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母がわずかに見られる。 内面は火熱のため黒色に転じており，外面も口縁部付近は黒い部分がある。
31	3 郭 西 側	香 炉	口径 9.9cm（推定）	体部は内彎しながら立ち上がり， 口縁端部は平たくおさめる。	内面は横方向にハケ目調整後ナデ調整。 外面は極めて丁寧なナデ調整を施し，	色調：黒灰色 焼成：良好 胎土：砂粒を比較的多く含み，

図版No.	出土地点	器種	法量	形態	成形・調整	備考
			器高（含脚） 5.25cm（推定） 脚高 0.65cm	底部はやや下がり気味である。脚は貼り付けており，元は3箇所あったと思われる。	光沢をもつ。 体部外面には，3条のヘラ状工具による凹線が巡る。 上部には中を8つに区画した円形の型押文が隙間なく連続する。 その下には中を8つに区画した菱形文2対と，中を6つに区画した円形花文1つの押印文による組み合わせが，脚の上部と脚裾に計6ケ所施される。 これらの型押文は，それぞれ前述の3条の凹線により区分されている。	雲母が見られる。
32	2郭西側	香炉	口径 9.3cm（推定） 器高（脚除く） 3.4cm	体部は内彎しながら立ち上り，口縁端部は平たくおさめる。底部は平ら気味と思われる。脚については不明。	内面は横方向とハケ目調整後ナデ調整。 外面は極めて丁寧なナデ調整を施し，光沢をもつ。 体部外面には，上部下部それぞれに2条ずつのヘラ状工具による凹線が巡る。 上部にはその区画内に4本単位の長方形の型押文が比較的広い間隔をおいて連続する。 下部には中に7個（推定）の珠文をもつ円形の型押文が見られる。	色調：赤褐色 焼成：良好 胎土：砂粒を比較的多く含み，金雲母が見られる。
33	2郭かまど跡前	仏花瓶	ふくらみ部分中央径 7.0cm	体部はふくらみ部分を有し，上へ向って外反気味に開き，下へ底かってほぼまっすぐに下がる。	体部以上はナデ調整。 ふくらみ部分の中央は円形浮文を6ケ所貼り付けている。 その上下には雷文帯を隙間なく巡らせ，ふくらみ部分の盛上には同様に雷文帯を隙間なく巡らせている。 その上には2条の凹線をはさんで，円形巴文の印刻を2対ずつ施す。 下部は外面にヘラ状工具を用いて縦方向にナデ調整を施し，内面は横方向にヘラ削りを施した後ナデ調整を行う。	色調：明褐色 内面はふくらみ部分の中央より上が黒色に転じる。 焼成：良好 胎土：砂粒を若干含み，金雲母が見られる。 ここでは開く側を上と見たが上下逆になる可能性が皆無というわけではない。
34	3郭西側	すり鉢	口径 26.6cm（推定）	体部はほぼ直線的に立ち上り，口縁部は上方に大きく拡張する。 口縁部はやや外傾し，口縁端部は全体に丸く仕上げている。	ロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。縦及び横方向に櫛歯状工具によって条線を施す。（下→上）	色調：灰褐色（内面） 灰褐色（外面） 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含む
35	武者走り西側	すり鉢	口径 29.4cm（推定） 器高 11.55cm（推定） 底径 12.2cm（推定）	体部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁部は上方に大きく拡張する。 口縁部はほぼ直立し，口縁端部は全体に丸く仕上げている。	ロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。縦方向に櫛歯状工具によって1単位7本の条線を施す。（下→上） 底部の切り離し方法は板起である。	色調：灰赤褐色（内面） 灰褐色（外面） 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含む 内面体部下半及び底部は使用痕が認められる。
36	1郭西側	すり鉢	口径 26.4cm（推定） 器高 11.2cm（推定） 底径 14.0cm（推定）	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は上方に拡張し，下方にも粘土を若干垂らす。 口縁部は内傾し，口縁端部はやや尖り気味に仕上げている。	ロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。縦方向に櫛歯状工具によって1単位10本の条線を口縁部まで施す。（下→上） 底部の切り離し方法は板起である。	色調：灰色（内面） 灰褐色（外面） 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含む 内面体部下半及び底部は使用痕が著しくカキ目が消えている。
37	4郭西側	すり鉢	口径 27.0cm（推定） 器高 12.35cm（推定） 底径 15.2cm（推定）	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は上方に大きく拡張する。 口縁部はやや内傾し，口縁端部は全体に丸く仕上げている。	ロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。縦方向に櫛歯状工具によって1単位6本の条線を施す。（下→上） 横方向の条線も見られる。 底部の切り離し方法は板起である。	色調：灰色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含むまれに大粒のものあり 内面体部下半及び底部は使用痕が著しくカキ目が消えた部分が見られる。
38	3郭西側	すり鉢	口径 26.0cm（推定） 器高 12.0cm（推定） 底径 12.5cm（推定）	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁部は上方に拡張し，下方にも粘土を若干垂らす。 口縁部は内傾し，口縁端部は全体に丸く仕上げている。	ロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。縦方向に櫛歯状工具によって1単位9本の条線を施す。（下→上） 底部の切り離し方法は板起である。	色調：灰褐色（内面） 褐色（外面） 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含むまれに大粒のものあり 内面体部下半及び底部は使用痕が認められる。

図版No.	出土地点	器種	法量	形態	成形・調整	備考
39	武者走り西側	深鉢	口径 19.05cm 器高 16.95cm 底径 12.7 cm	体部は内彎気味に立ち上がり，口縁端部は平たく仕上げる。	輪積みロクロ成形後，内外面共横ナデ調整。	色調：暗赤褐色～黒褐色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を若干含む 底部は穿孔された可能性が強い。 内面全体及び口縁端部に黄褐色の自然釉がかかる。 内側にヘラ状工具によって施した篦印がみられる。
40	2郭東側 3郭西側 縦掘状遺構	壺	口径 44.4cm （推定） 器高 88.5cm （推定） 底径 42.0cm （推定） 胴部最大径 73.7cm （推定）	胴部は開き気味に立ち上り，肩部を大きく内彎させて頸部に至る。頸部は「く」字状に外反させ上方に伸び口縁部は長く外へ折り返され玉縁を呈する。	輪積ロクロ成形後，口縁部から頸部にかけては内外面共横ナデ調整を施す。胴部内面は頸部直下は斜め方向その下を横方向の板目調整後ナデ調整，外面は横方向の板ナデ調整を施し，底部付近は縦方向のナデ調整を施す。	色調：明茶褐色（内面） 赤褐色（外面） 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含み，小礫も散見する。 内面底部に自然釉が付着する。
41	3郭西側	壺	底径 30.2cm （推定）	胴部は大きく開きながら立ち上がる。	輪積ロクロ成形後，内外面共ナデ調整。	色調：茶褐色～赤褐色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含み小礫も散見する。
42	縦掘状遺構	壺	底径 26.9cm （推定）	胴部は小さく開きながら立ち上がる。	輪積ロクロ成形後，内外面共ナデ調整。	色調：茶褐色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含む
43	3郭西側	皿	口径 12.0cm 器高（含高台） 3.25cm 高台径 5.0cm 高台高 0.35cm	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。高台はほぼ直立する。	ロクロ成形後ヘラ削りを施す。 高台は削り出しで，四方をヘラ状工具で削りとっている。 内面全体と外面体部は白色の釉薬が施される。 高台はヘラ削りのままで釉薬が認められない。 内面底部には重ね焼きによって生じた高台痕が認められる。	色調：白色（釉薬） 素地は灰白色 焼成：やや軟質 胎土：精選されており，砂粒はほとんど含まない。
44	3郭中央	皿	口径 10.5cm 器高（含高台） 3.1 cm 高台径 4.1cm 高台高 0.3cm	体部は内彎気味に立ち上り，口縁端部は丸くおさめる。高台は外に張り出し気味である。	ロクロ成形後ヘラ削りを施す。 高台は削り出しである。 内外面全体に灰色の釉薬が刷毛塗に施されている。 畳付部は釉薬が施められない。 内面底部には重ね焼きによって付いた砂粒が円形に近い痕跡を残している。	色調：灰色（釉薬） 素地は灰白色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を比較的多く含む
45	第5号遺物跡 北西側	鉢	口径 17.0cm 器高（含高台） 0.45cm 高台径 6.05cm 高台高 1.0cm	体部は内彎しながら立ち上り口縁端部は丸くおさめる。高台はわずかに外に張り出し気味である。	ロクロ成形後，高台を削り出す。 体部外面はヘラ状工具を用いて連弁文，体部内面はヘラ状工具を用いて草花文を描く。 内外面共全体に淡褐色の釉薬が施されている。 施釉後，外底部は輪状に釉を削りとり中央部分だけを残している。 剣頭と連弁は単位を意識して施されている。	色調：淡褐色（釉薬） 素地は灰白色 焼成：堅緻 胎土：精選されており，砂粒はほとんど含まない。
46	3郭中央	鉢	口径 14.0cm 器高（含高台） 6.75cm 高台径 5.2cm 高台高 1.0cm	体部は内彎しながら立ち上り口縁端部は丸くおさめる。高台はほぼ直立する。	ロクロ成形後，高台を削り出す。 体部外面はヘラ状工具を用いて細い連弁文を描く。 内外面共全体に濃緑色の釉薬が施されている。 剣頭と連弁は単位を意識しないで施されている。	色調：濃緑色（釉薬） 素地は灰色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を若干含む
47	2郭西側	鉢	高台径 5.45cm 高台高 0.65cm	高台はわずかに外に張り出し気味である。	ロクロ成形後，高台を削り出す。 体部外面はヘラ状工具を用いて細い連弁文を描く。 内外面共全体に淡緑灰色の釉薬が施されている。	色調：淡緑灰色（釉薬） 素地は灰色 焼成：堅緻 胎土：砂粒を若干含む

V 永町山城跡



第32図　永町山城跡地形図及び遺構配置図

遺跡の概要

永町山城跡は，北谷山城跡の北西約170mの独立丘陵上に位置している。調査は，堀切の存在が予想されていた城跡搦手の水田部分が，道路建設予定地内に含まれるため，その計画地内について実施した。さらに，城跡全体については，外観を略測するに留めた。

その結果，郭3，縦堀3の存在が想定され，堀切1の存在が確認された。

第　1　郭

第1郭は，本城跡の最高所に位置し，現地表面の標高は59.7mを測る。本城跡の眼下には，温品の沖積地が広がり，周辺の山城はもとより遠く広島湾頭まで見渡すことができる。現存する規模は，長軸約40m，短軸約23mを測り，周囲の水田面との比高差は，現況で最大約27mを測る本城跡最大の郭である。本郭の中央付近には，東一西方向に約40～50cmの高低差が認められる。北側の一段高いものの規模は，長軸約23m，短軸約19mを測り，南側の一段低いものの規模は，長軸約25m，短軸約20mを測る。

また，本郭の周囲には，第2郭・第3郭の存在する北西側を除き，石積み状の遺構が認められる。この石積み状の遺構は，表面観察によると部分的にしか残存していないが，埋土中にも多くの石材の存在が予想される。(注1)これらの石材は，大部分が河原石であまり大きな石は使用されておらず，形態は石を数段積み上げて構築するという簡素なものであることから，土留めを主目的として造作されたものと考えられる。

さらに，第1郭の南西側には，第2郭と接して縦堀1が，第1郭の北西側には，第3郭と接して縦堀2が認められる。

第　2　郭

第2郭は，第1郭の西に配された郭で，第1郭との比高差は，現況で約2.5mを測り，現存する規模は，長軸約25m，短軸約12mを測る。

第2郭の北東側，第3郭に面する場所からは，第1郭の石積みの遺構と同様に土留めを行うために造作されたと考えられる石積み状の遺構が認められた。さらに，第2郭の北東隅から第3郭南西隅にかけて，犬走りを想起させる小道が走っており，この小道の北西斜面部分には，土留め用としての簡素な石積みが認められる。

第　3　郭

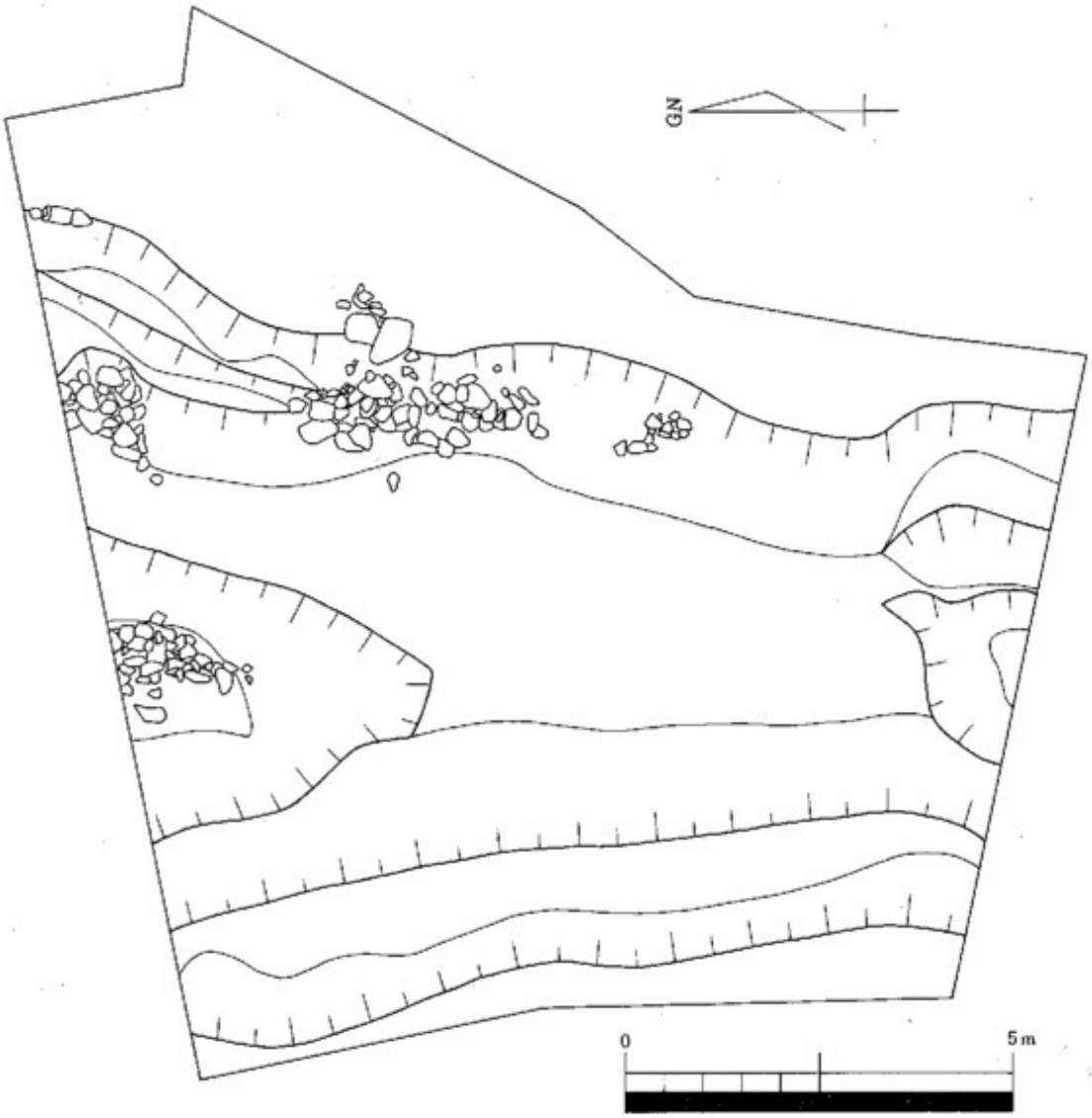
第3郭は，第2郭の北に配された郭で，第2郭との比高差は，現況で約4.5mを測る。現存する規模は，長軸約27m，短軸約14mを測るが，本郭の南東側は，第1郭側の斜面の土砂が相当流れ込んでいることから，築城当時の規模は，現況より若干広がっていたものと思われる。

さらに，本郭の北西側，犬走りと思われる小道が第3郭と連結しているあたりには，縦堀3が認められる。

堀　　切　（第33図）

堀切は，本城跡の搦手にあたる水田面から検出されたもので，尾根と直交するように南一北方向に掘り込まれている。規模は，堀切が調査区域外までおよぶため定かでないが，現況では長さ20m以上，最大幅約11m，深さは最大で約2.5mを測る。断面は箱薬研状を呈しており，第1郭から堀切底部までの深さは約21mを測る。

また，本堀切内からは，集石状の遺構が確認された。これらの石材は，堀切底部から尾根側にかけて見出され，城跡側からは検出されなかった。石材は，大小さまざまな大きさで，河原石も相当含まれ，かつ，地山を整形して設置していない。さらに，石材の構築方法にも規格性が認められないため，石垣等の施設とは想定しがたく，遺構の性格については明確にし得なかった。



第33図　永町山城跡堀切実測図

なお，本堀切内からは，若干量の陶磁器片や土師質土器の破片が検出されたが，いずれも細片であったために図示し得なかった。

小　　結

永町山城跡は，温品川の造り出した沖積地の最奥部に位置する独立丘陵を利用して築かれた山城である。構造は，丘陵の形状から郭を螺旋状に３郭配し，郭間には縦堀りを配している。また，搦手には，堀切を設けることにより，城跡の周囲は急峻な斜面となっている。さらに，本城跡は，城跡西側を流れる温品川を天然の堀として利用するなど，自然地形を最大限利用しているが，城跡が小規模であるため，防禦機能が弱いことは否めない。このことは，本城が戦国期の戦闘を目的とした城跡とは異なり，守りより領国経営を目的に築かれたことを物語っていると思われる。

また，本城跡と立地，形態，構造等において同様の傾向をもつ城跡は，第3表のようになり，これらは河瀬正利氏の型式分類によると，第Ⅰ型式（土居型式）(注2)の山城にあたるものである。第3表からもわかるように，

これらの山城は，東国の本貫地に本拠を置いていた中小の武士が，安芸国に下向した際に築城したものであり，築城時期は，概ね鎌倉期から南北朝期に比定されている。

さて，温品の地に目を向けてみると，承久３年（1221）承久の変の勲功により，武蔵国金子郷の金子氏が温品村の地頭職に補任されている。(注3) その後，金子氏は，貞治６年（1367）までの間，温品村の地頭職であったと考えられるが，(注4) これ以後，温品村の地頭職は明確にし得ない。しかし，嘉慶元年（1387）(注5) 及び康應元年（1389）(注6) には，温品村の地頭大蔵少輔，金子大炊助により国衙領が押領されている。この金子大炊助は，地頭でないにしても，それに近い地位にあったものと思われる。

永町山城跡は，前述したように，立地，構造，形態等から考えて，第Ⅰ型式の範疇に含まれるもので，温品の他の山城と比較した場合，最も早い時期に築城された可能性が高い。さらに，第３表のように，第Ⅰ型式の山城は，鎌倉期から南北朝期を中心に西遷武士により築かれていることから考えて，永町山城跡の築城者は，当時温品村の地頭職であった金子氏をあてるのが妥当であろう。

本城跡の築城時期については，郭部分の調査を実施していないため，断言は避けたいが，以下の２点より，ある程度推測ができよう。

① 金子氏は，武蔵国金子郷に本貫地を持っていた武士で，温品（現広島市）のほかに玖村（現広島市）(注7) や斑鳩（現兵庫県揖保郡）(注8)・西之土居（現愛媛県新居浜市）(注9) に下向している。また，その時期は，玖村が遅くとも正安３年（1301），(注10) 斑鳩・西之土居が鎌倉中期 (注11) には下向している。

② 温品村には，建治元年（1275）に地頭代が置かれている。(注12)

以上のことより，本城跡の築城時期は，他の金子氏の動向から，建治元年以降の鎌倉末期，それも正安３年を前後する頃に求められよう。

次に，本城跡の廃城時期についてであるが，築城時期と同様明確にはし得なかった。

ただし，空堀内から検出された備前焼の破片は，口縁部を長く折り返した玉縁を造り出しており，Ⅳ期後半頃 (注13) の特徴を有している。また，芸藩通志によると，本城跡の城主を温科氏としているが，(注14) その温科氏は明応８年（1499）に武田氏に対し謀反をおこし，誅伐されている (注15) ことから，これらは，本城跡の廃城時期を考える上で，一つの手掛りとなろう。

最後に，温科氏と温品の金子氏の関係について若干ふれてみたい。温科氏と金子氏の唯一の接点は，康永11年（1404）の国人一揆契状に求められるが，(注16) この金子氏は，玖村の金子氏の可能性もあるため，(注17)

第３表　永町山城跡と類似の城跡

名　称	所　在　地	比　高	城　主	出身地	築城年代
伊勢ケ坪城	広島市安佐北区可部町	30m	熊谷氏	武蔵国	鎌倉末期～南北朝初期
駿河丸城	山県郡大朝町	30	吉川氏	駿河国	鎌倉末期
旧郡山城	高田郡吉田町	100	毛利氏	相模国	南北朝初期
米山城	東広島市志和町	20	天野氏	伊豆国	鎌倉期
御薗宇城	東広島市高屋町	20(?)	平賀氏	出羽国	鎌倉後期
古城山城	三次市和知町	25	広沢氏	武蔵国	鎌倉期
恵下山城（遺跡）	広島市安佐北区高陽町	55	金子氏(?)	武蔵国(?)	鎌倉末期
金子山城	愛媛県新居浜市	70	金子氏	武蔵国	鎌倉期

両者の関係は明確にはし得ない。しかしながら，康應元年（1389）を最後に温品の金子氏は，文献上からその姿を消し，(注18) 康永11年（1404）には，湯科氏が文献上に登場している。(注19) このことは，比較的短い期間でスムーズに，永町山城跡の城主交替が行なわれたことを物語っていると思われる。その上，この時点で温科氏は，国人一揆契状を結ぶほどの勢力を有していることなどから考えて，温品の金子氏が在地名をとって温科氏と称した可能性も捨てきれない。

（注1）　ボーリング探査の結果による。
（注2）　河瀬正利「広島県における中世山城跡について」『芸備地方史研究110，111合併号』　1977年
（注3）　『毛利家文書』　1493号
　　『毛利家文書』　1504号
（注4）　『毛利家文書』　1494号
　　『毛利家文書』　1502号
　　『毛利家文書』　1504号
（注5）　『東寺百合文書』　193号
（注6）　『東寺百合文書』　198号
（注7）　『芸備郡中士籍者書出』　所収文書1号
　　『芸藩通志』　巻41
（注8）　埼玉県入間市公文書館平岡氏の御教示による。
（注9）　『日本城郭大系』　第16巻　1980年
（注10）　（注7）と同じ。
（注11）　斑鳩については，（注8）と同じ。
　　西之土居については，愛媛県新居浜市教育委員会の御教示による。
（注12）　『藤田精一氏旧蔵文書』　1号
（注13）　間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古学館研究集報』　1・2・5号　1966～1968年
（注14）　『芸藩通志』　巻42
（注15）　『毛利家文書』　167号
（注16）　『毛利家文書』　24号
（注17）　『芸備郡中士籍者書出』　収入文書　1号
（注18）　（注6）と同じ。
（注19）　（注16）と同じ。

VI　ま　と　め

今回調査した北谷山城跡は，道路建設工事範囲内に含まれる城跡の大部分を調査したことにより，その概要を明らかにすることができた。ただし，本城跡の南側については，工事範囲外にあたるため，地形測量にとどめた。

まず，郭等の配置からみた北谷山城跡の性格について触れてみたい。本城跡は，既に述べたとおり，高尾山山系から西方へ派生した尾根を利用して築かれている。城跡の最高所に第1郭を置き，これをとり囲むように北から南西に向けて，概ね尾根線の方向にそって，第3郭，第4郭，第5郭を配しており，第2郭は第1郭と第3郭との間に設けられている。また，第3郭～第5郭は，通路によって郭間を連絡させている。本城跡の後背部にあたる第1郭の南東側は，尾根を掘り切って遮断している。以上のような郭の配置からみて，本城跡は，尾根が派生する西側に防禦を集中させていることが窺え，温品南城の沖積地あるいは広島湾頭を意図して築かれたものと推定されよう。

また，調査範囲外ではあるが，第4郭の西側約50mの地点は，現在墓地として利用されているが，舌状に延びる平坦面が存在している。遮断はできないが，先に述べたとおり，大手方向であることを考え合わせれば，この平坦面も，城跡に伴う郭として機能していた可能性が考えられよう。逆に，搦手側についても，調査範囲外ではあるが，地形観察の結果，尾根を遮断している部分には，縦堀の存在が窺える。しかし，掘り切った部分の深さや，第1郭へ上がる傾斜角度を見る限りでは，相手方の進行を妨げるには，やや不十分であったと考えられる。

さて，本城跡は，発掘調査の結果，改修が加えられていたことが明らかにされた。第2郭では，第1郭側の斜面を当初よりもさらに奥へ掘り込み，その残土で前方へ拡張し，第1郭側も第2郭へ下がる斜面を盛土によって拡張し，第1郭，第2郭間をより急斜面にし，かつ両郭の有効面積を拡大させている。また，第3郭，第4郭についても，当初狭小な地山削平部だけであったと考えられる郭を縁辺部に盛土することによって拡張している。これらのことから，最低でも1～2回の大きな改修が加えられており，改修が加えられることによってその都度郭が拡張され，より実戦的な山城へと変貌していったことが窺える。

遺物について見ると，その出土地点は，第2郭，第3郭，武者走りに集中している。これらの中には，中国製磁器類も含まれるが，甕，すり鉢などの陶器，供膳用，煮沸用にした土師質土器のような日常雑器，さらに石臼，硯，火箸のような生活用具の他に，香炉・仏花瓶といった仏具が出土している。このことは，第2郭，第3郭にかまど跡が存在していたことから見ても，戦時のみならず，平時の際にもある程度生活の場として利用されたことを強く想起させよう。

次に，本城跡の築城時期や城主について検討を加えたい。本城跡は，文献上で，唯一，『芸藩通志』に「北谷山　尾太山　鶴江山　並に同村（温品村）にあり」と見られるだけである。(注1) 築城時期については，第3郭を拡張したとみられる盛土内から南北朝期の特徴を有する備前焼の口縁部(注2)が見つかっており，本城跡の改修を考えれば，少なくとも南北朝期には築城されていた可能性が高いと思われる。先に述べたとおり，本城跡の北西に位置する永町山城跡は，この時期に既に築城されていたことと思われることから，北谷山城跡も，永町山城跡同様，鎌倉時代末には温品村の地頭職として下向していたとみられる金子氏との関係をもつ城とみて大過なかろう。この場合，永町山城跡が実戦的な機能に若干乏しい点を考慮すれば，両者の関係は，居館的な色彩をもつ城と，それに付随する根小屋的性格をもつ詰城という関係でとらえることが最も妥

当であろう。また，北谷山城跡の下限については，出土遺物の形態的特徴からみて，概ね，16世紀中葉をやや前後する時期に求められよう。

さて，温品周辺の歴史的背景を振り返ってみると，温品村地頭職としての金子氏は，南北朝期まで，その名を見ることができる。(注8)温品村には，国衙領や在庁官人の田所氏の所領があったが，(注4)鎌倉時代末から南北朝期にかけて地頭又は地頭代によって国衙領の押領が行なわれている。(注5)このような状況下で，北谷山城跡，永町山城跡が築城されたと思われ，温品南域に広がる沖積地を望むことができ，かつこれを潤す最大水系である温品川水系を掌握できる地形的条件にあるこの場所を，所領の確保・拡大を進める上での拠点として着眼したものと思われる。

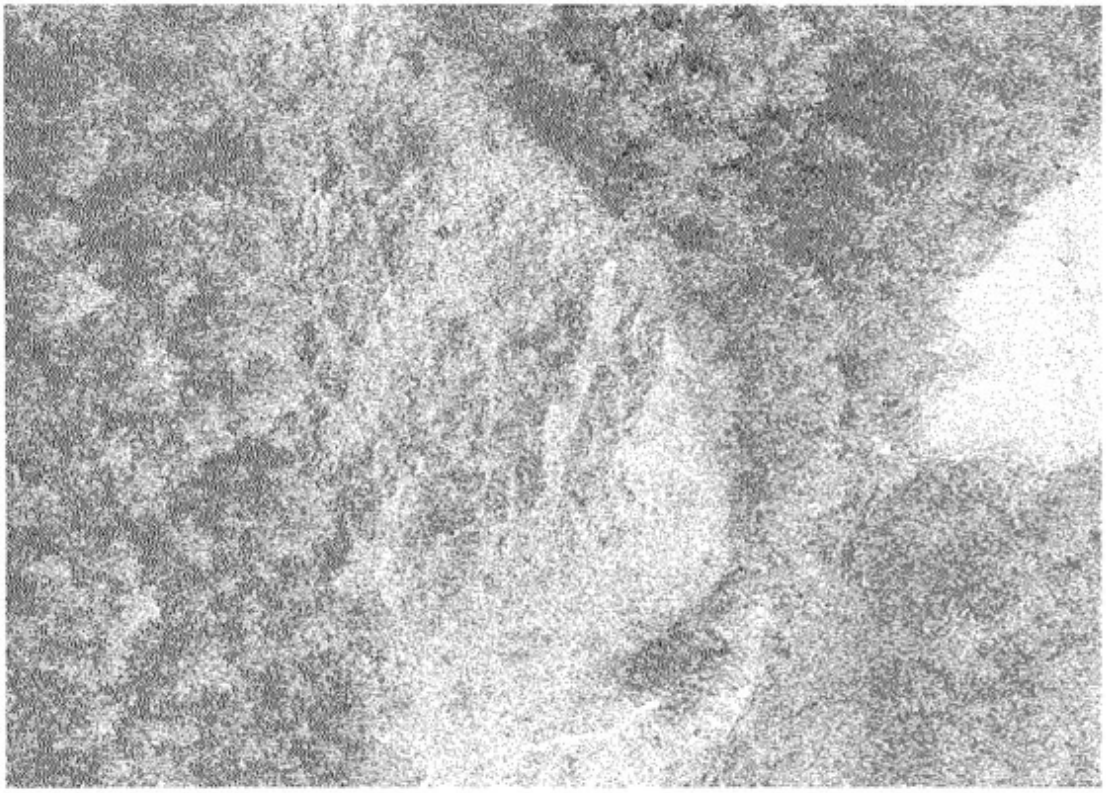
明応8年（1499），温品村では，守護武田氏によって被官化されていた温科氏が，武田氏から離反し，大内方に就いたために滅ぼされた。(注6)温科氏は，既に永町山城跡の項で述べたとおり，同時期に併存していたとみられる北谷山城跡も同氏との関係が示唆されよう。その後，16世紀に入ると，温品は，武田氏，大内氏の支配下に置かれていく。大永5年（1525）には，大内氏から毛利氏に対し温科300貫の地を預けられているが，(注7)武田氏の存在を考えれば，実際に行われたかどうかは定かでない。ただし，このことは，武田氏の勢力衰退を傍証すると共に温品の動向を見る上で興味深い。大永二年（1522）以降，出雲の尼子氏の進出に伴い，広島湾頭をめぐる争いは激化の一途をたどる。この中で，広島湾東岸に位置する温品周辺の地域は，広島湾頭を支配するための陸海上交通の要衝であることから，重要視されたものと思われ，北谷山城跡はそうした地域をにらむ拠点として使用され続けたと考えられる。そして，天文11年（1541），毛利氏が武田氏を滅し，さらに弘治元年（1555），厳島において，陶氏を敗ったことにより，実質的に同氏が広島湾頭を制圧した頃には，本城跡もその役割を失っていたと思われる。

（注1）『芸藩通志』巻42
（注2）間壁忠彦・葭子「備前焼研究ノート」『倉敷考古館研究紀要』1・2・5号　1966～1968年
（注3）『毛利家文書』1504号
（注4）『田所文書』1号，2号
（注5）『東寺百合文書』193号，198号
　　藤田精一氏旧蔵文書　1号
（注6）『毛利家文書』167号
（注7）『毛利家文書』251号

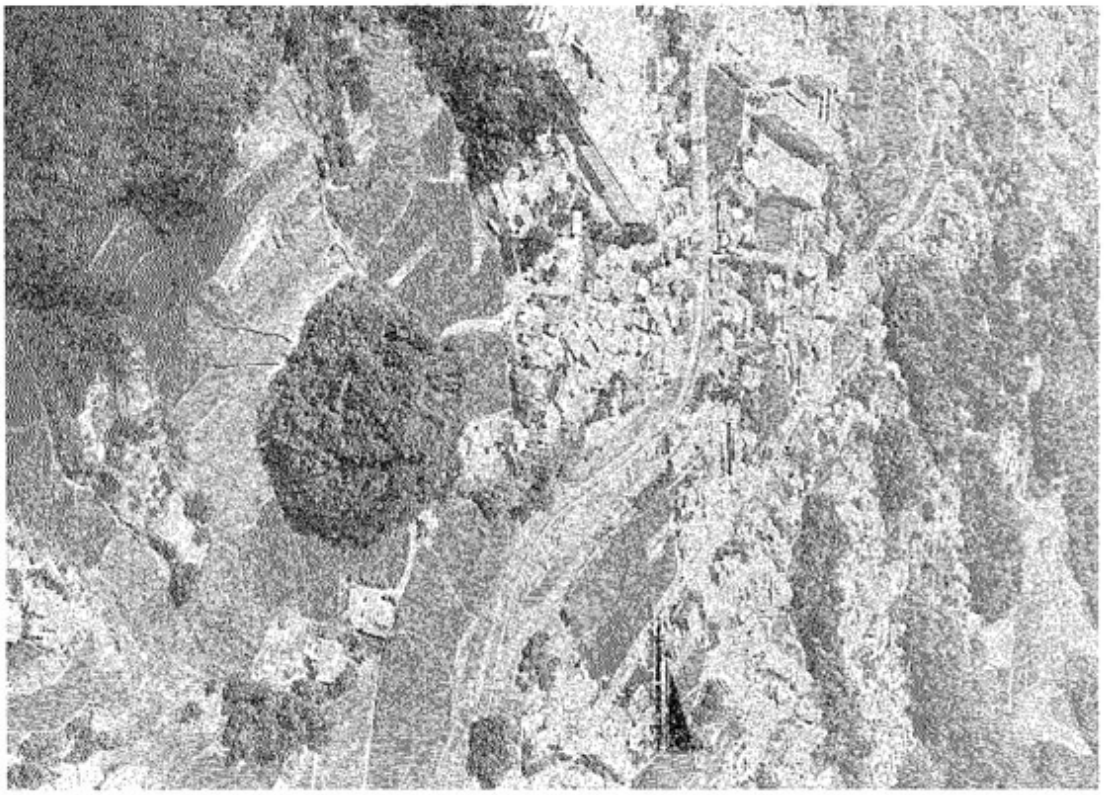
図　　版

北谷山城跡（上）・永町山城跡（下）全景（航空写真）

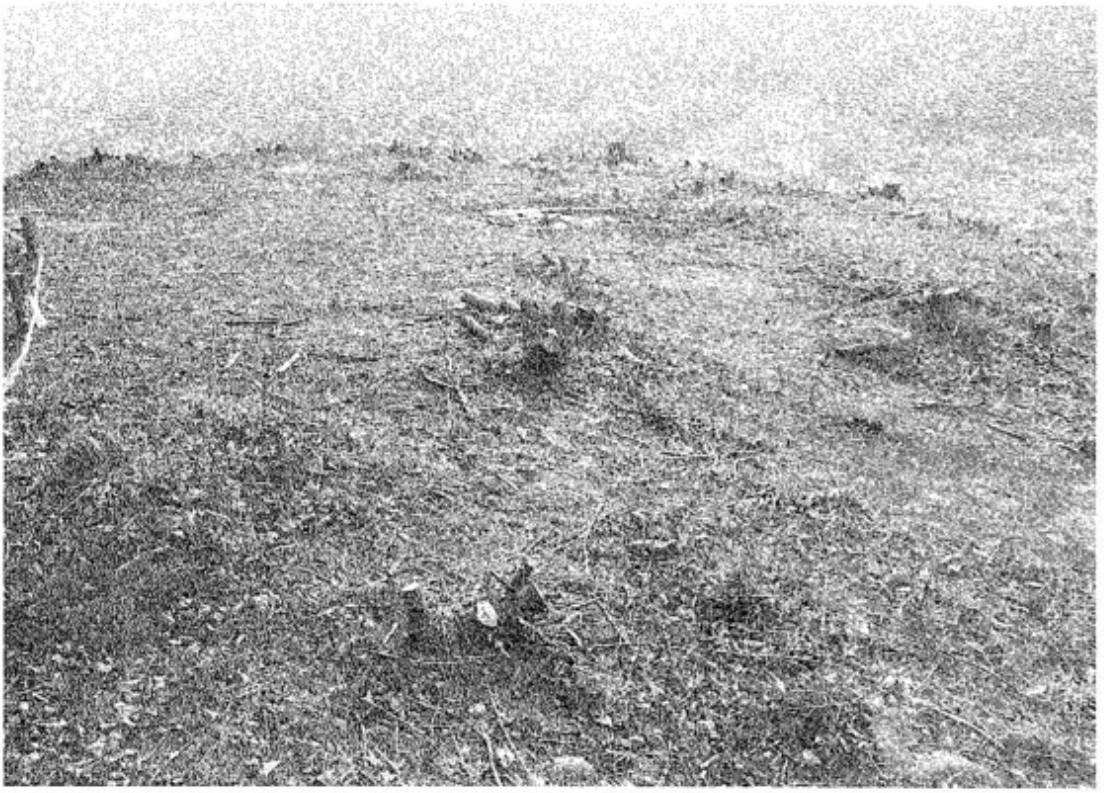
図版 2



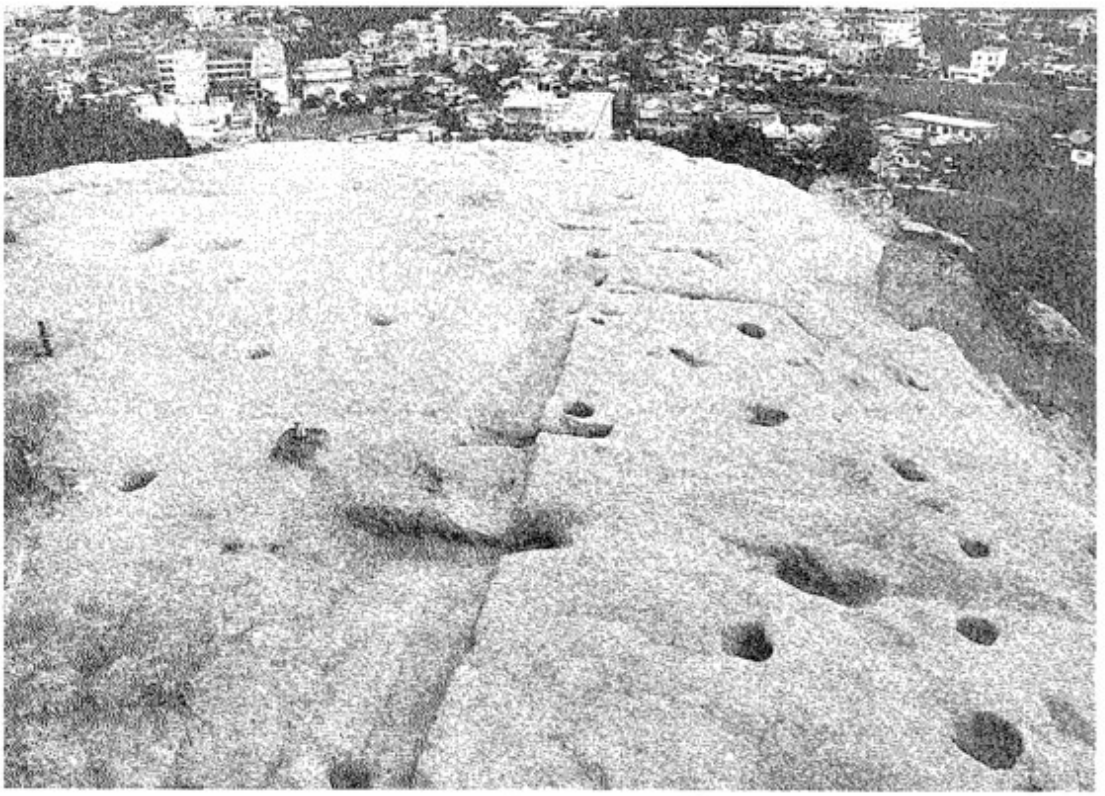
a．北谷山城跡全景（航空写真）



b．永町山城跡全景（航空写真）

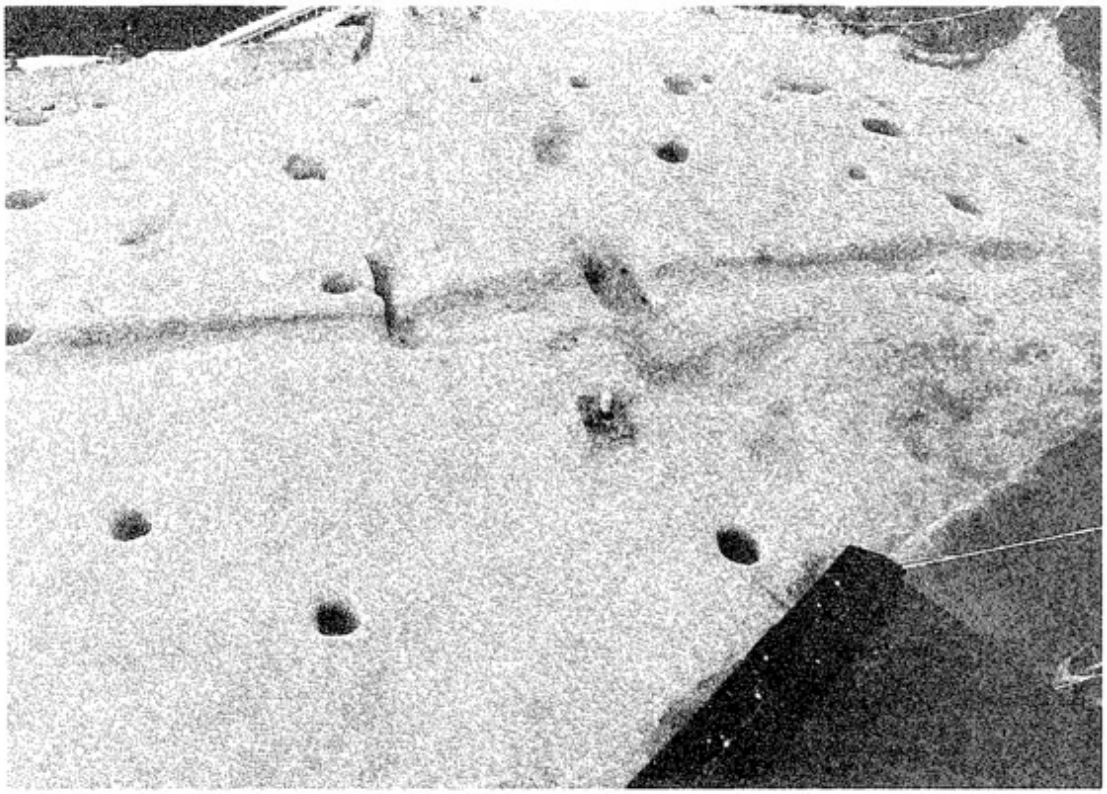


a. 第 1 郭 近 景（東から・調査前）

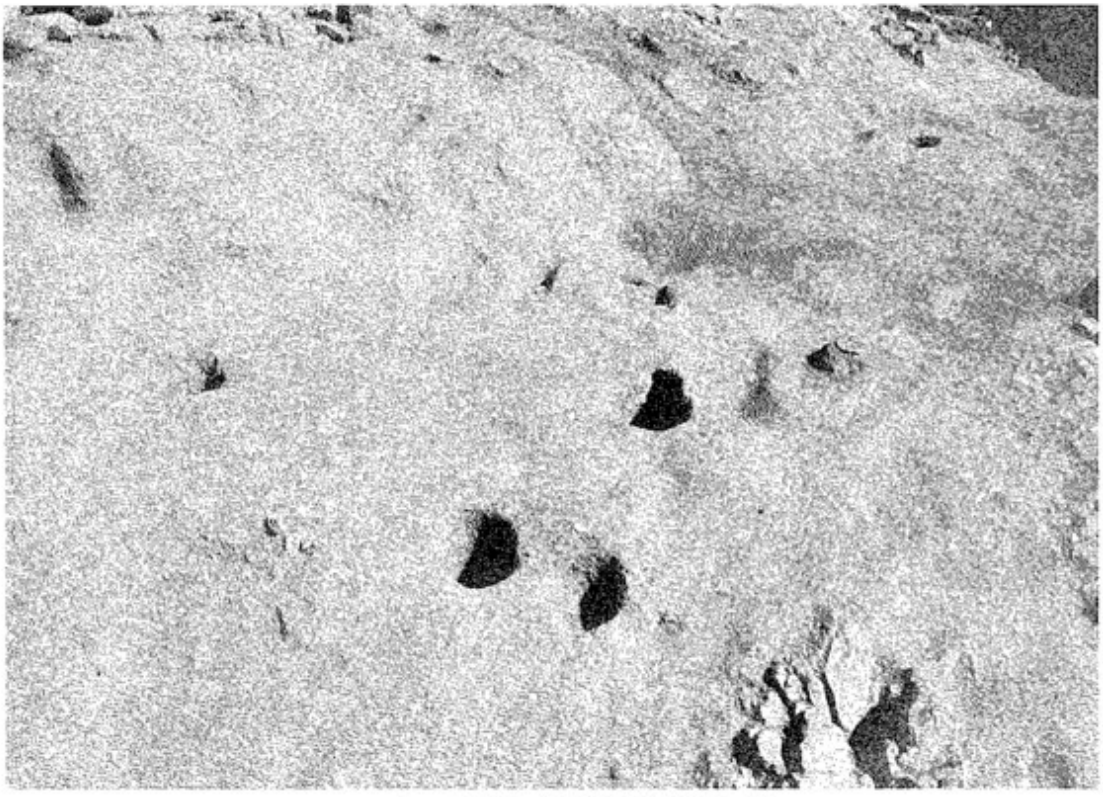


b. 同　　上（東から・調査後）

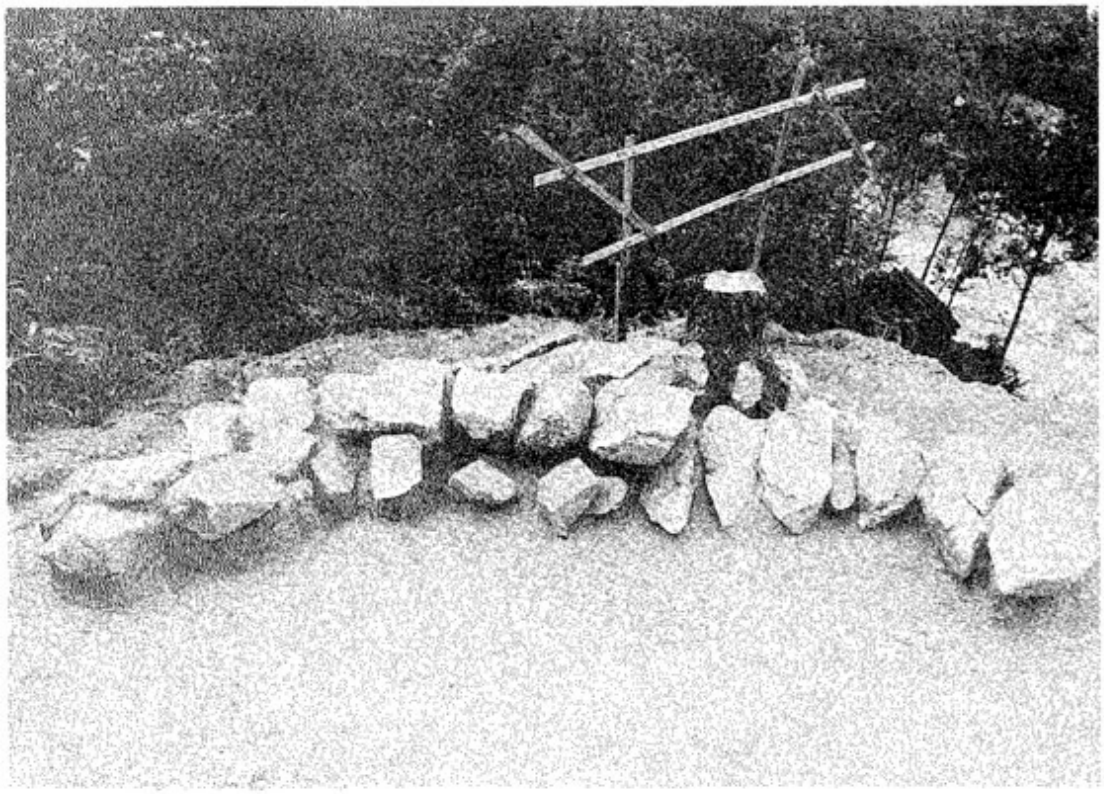
図版 4



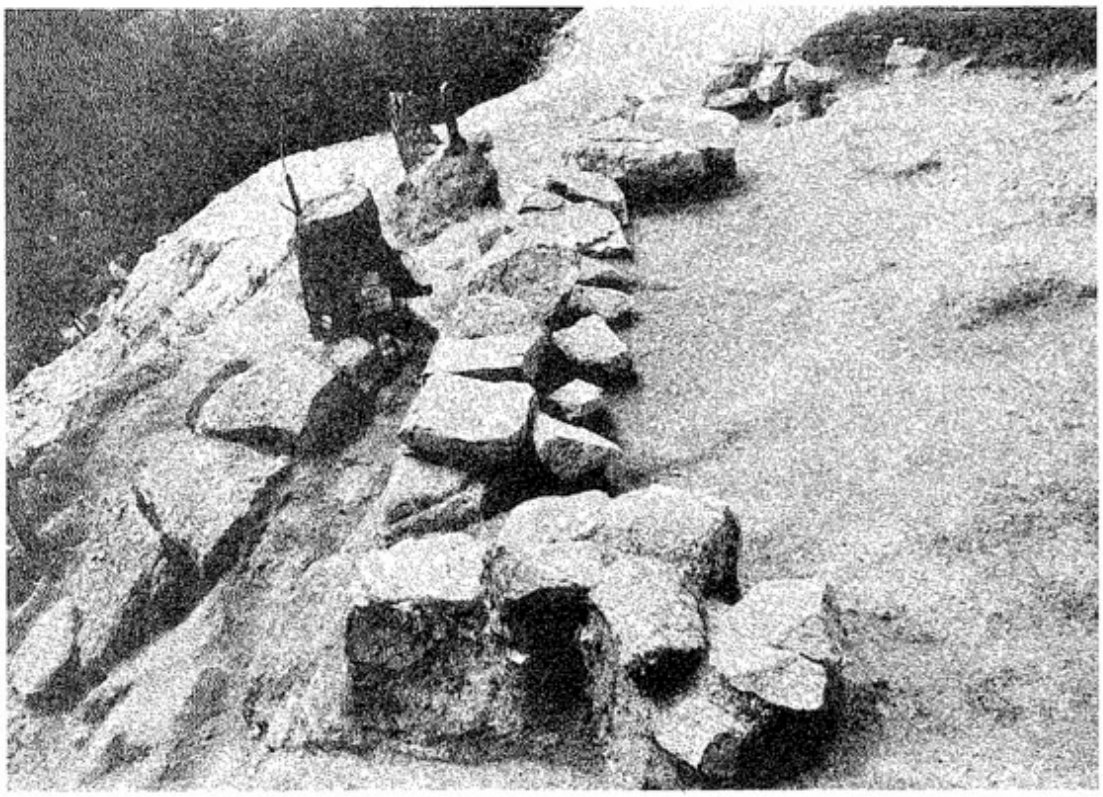
a. 第1郭東側近景（南から・調査後）



b. 第1郭第3号建物跡（北から）

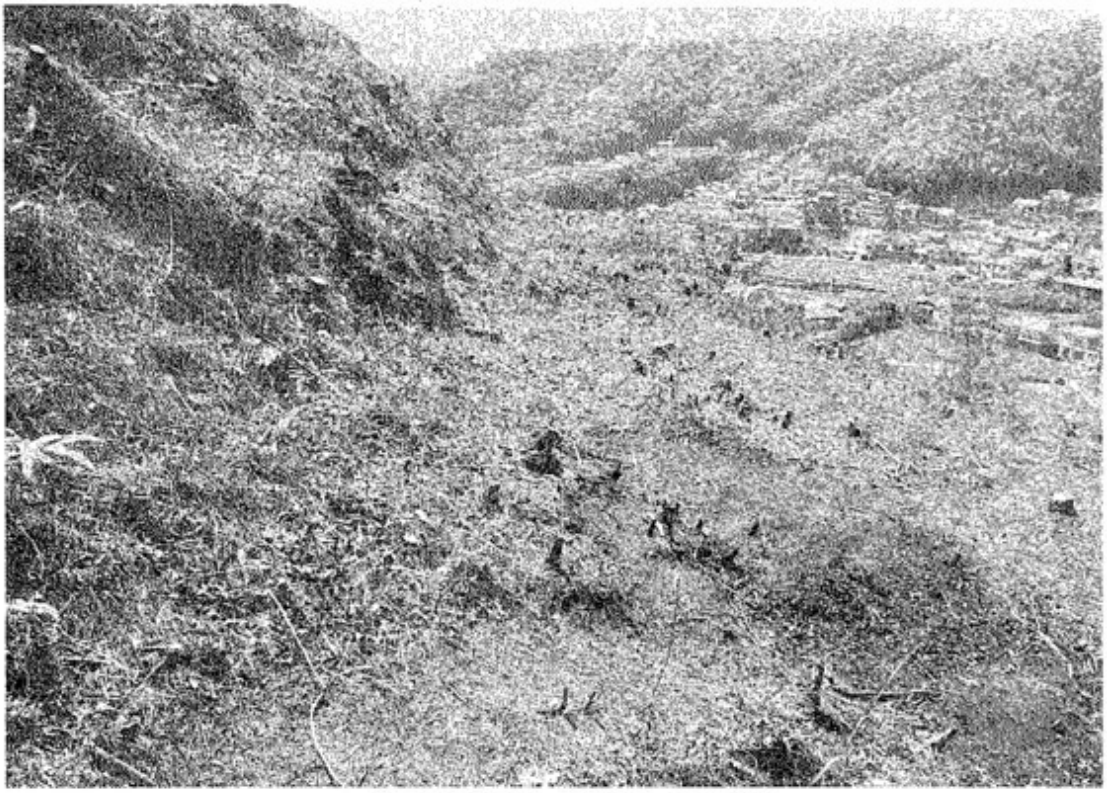


a. 第 1 郭石列（東から）



b. 同　　上（南から）

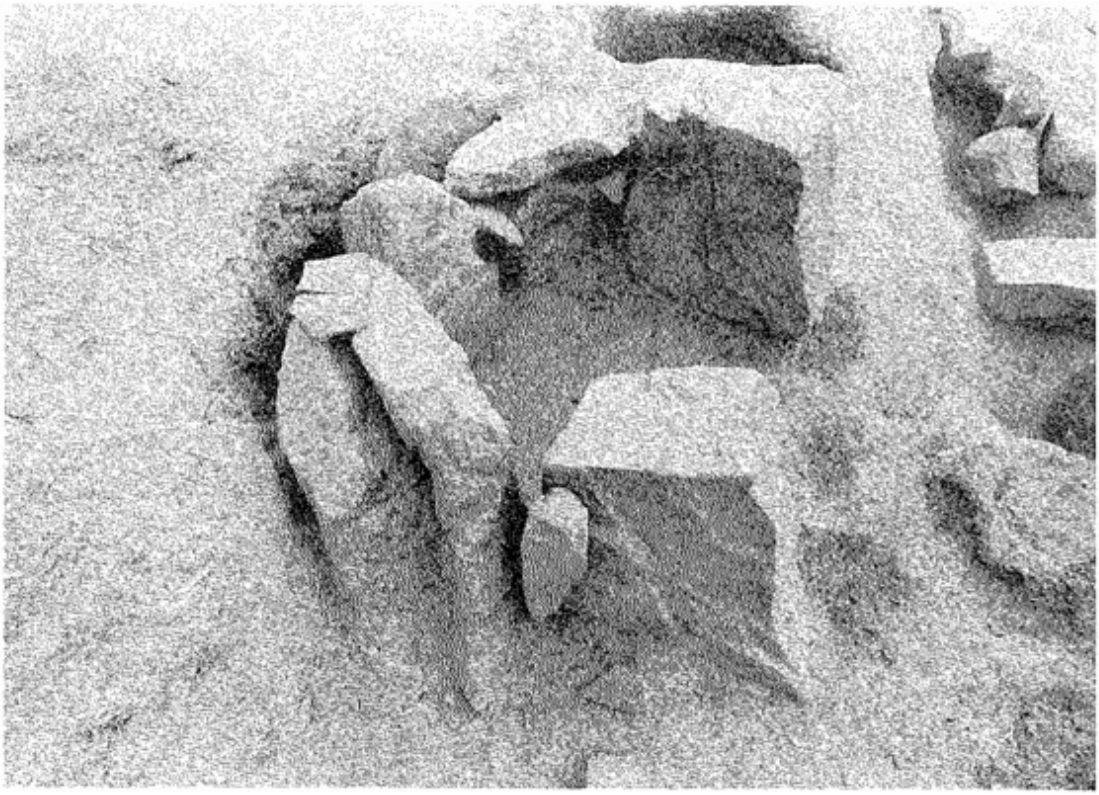
図版 6



a. 第 2 郭 近 景（東から・調査前）

b. 同　　上（東から・調査後）

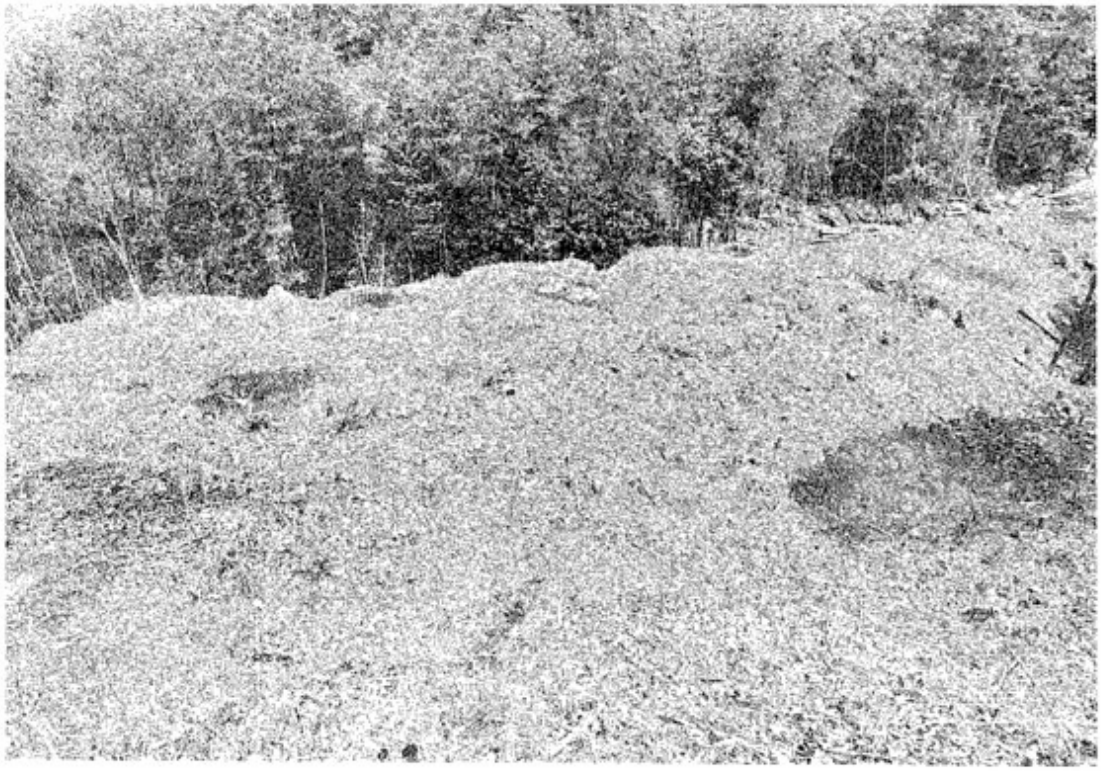
a. 第２郭第１号かまど跡近景（西から）



b. 第２郭第１号かまど跡検出状況

a. 第2郭第1号かまど跡前遺物出土状況

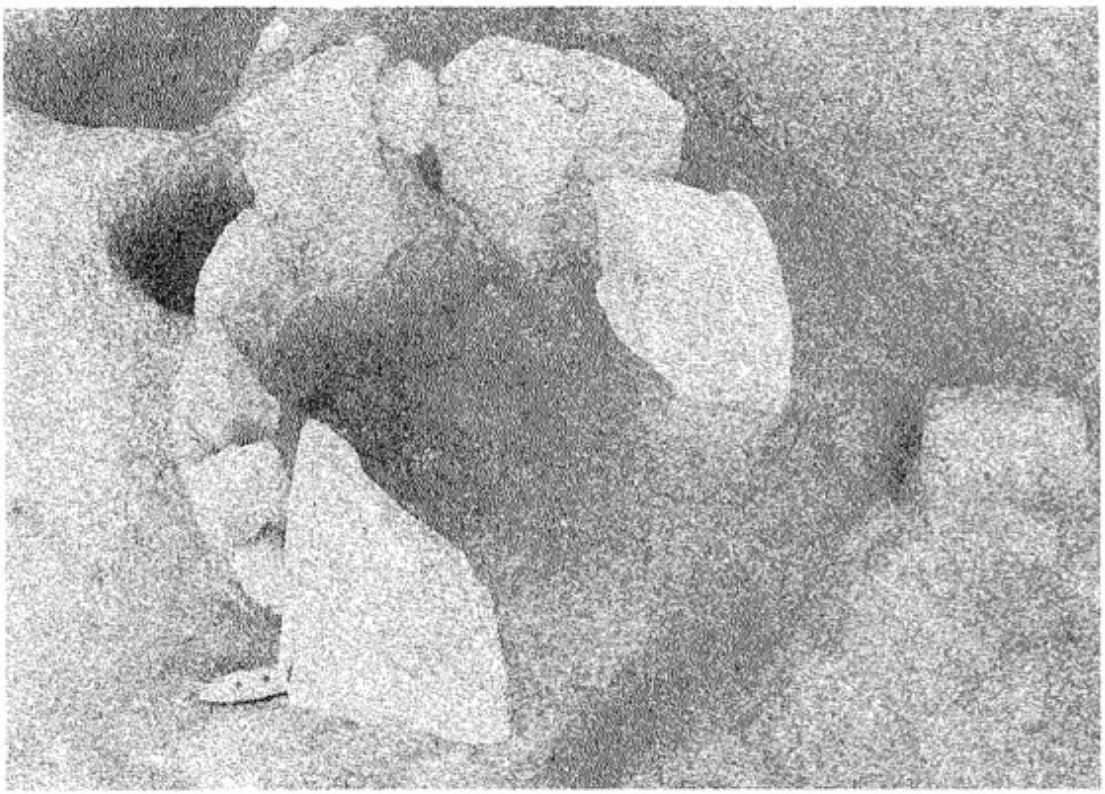
b. 第2郭東側遺物出土状況



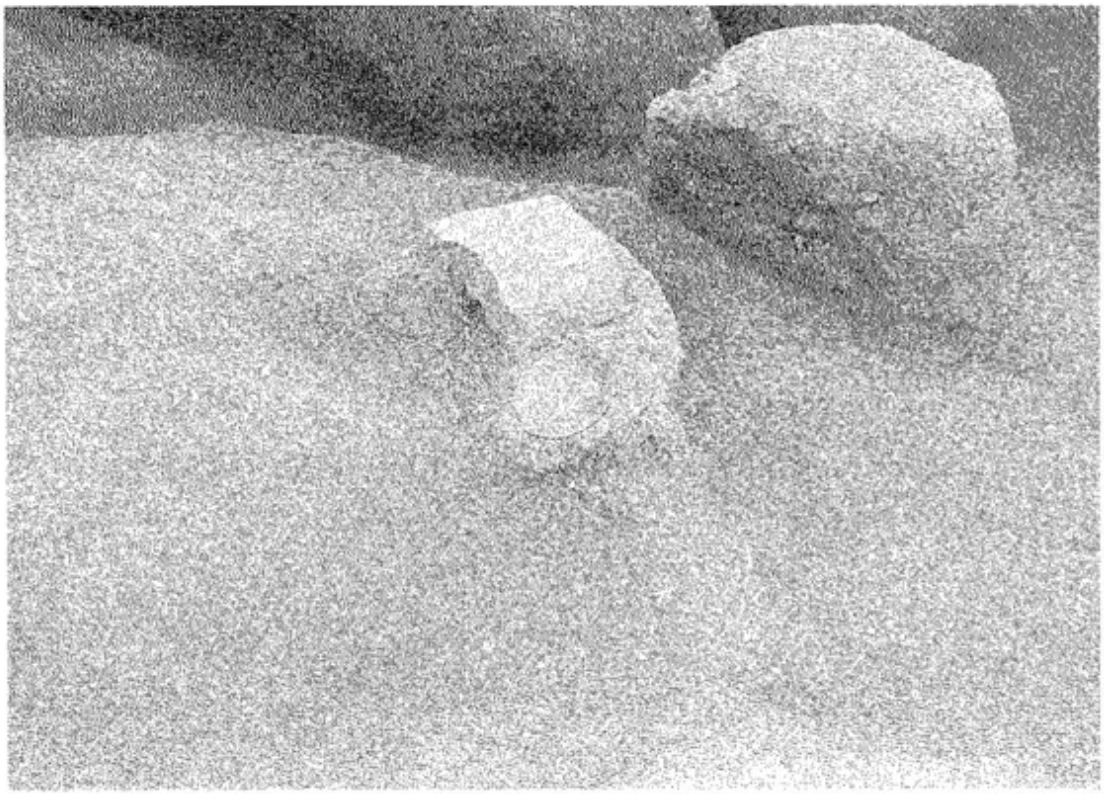
a. 第 3 郭 近 景（南から・調査前）

b. 第3郭第4号建物跡（西から）

図版 10

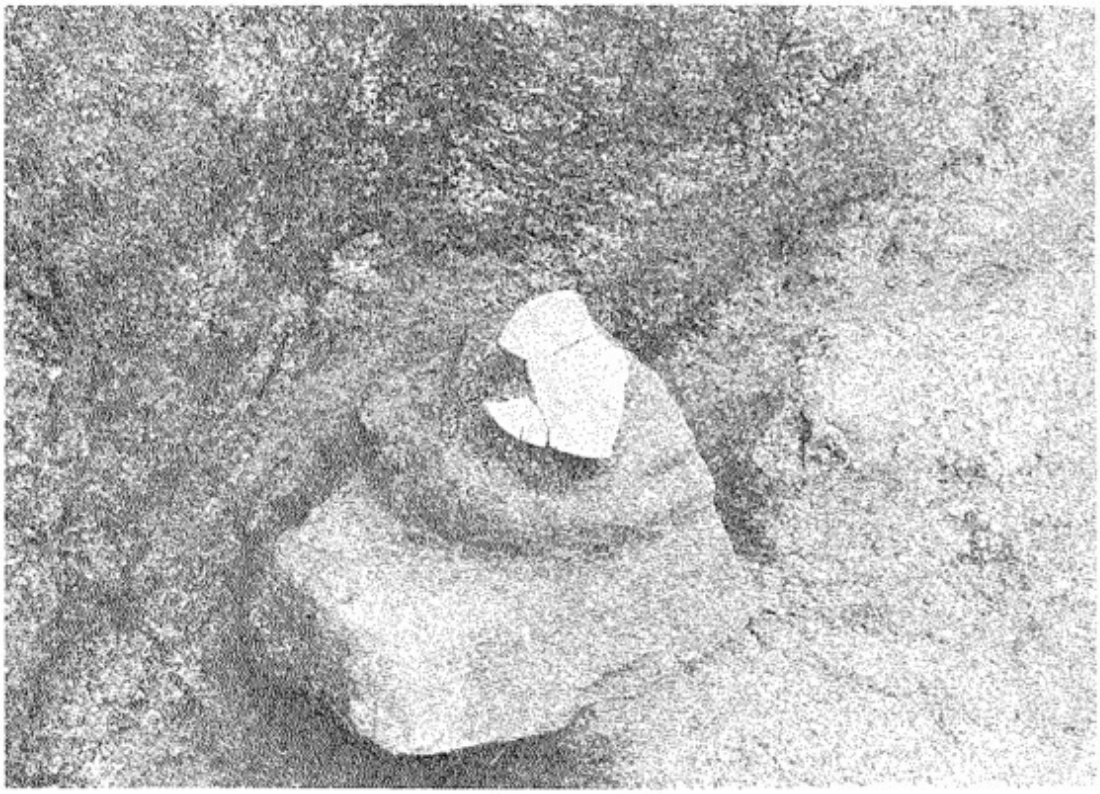


a. 第3郭第2号かまど跡検出状況

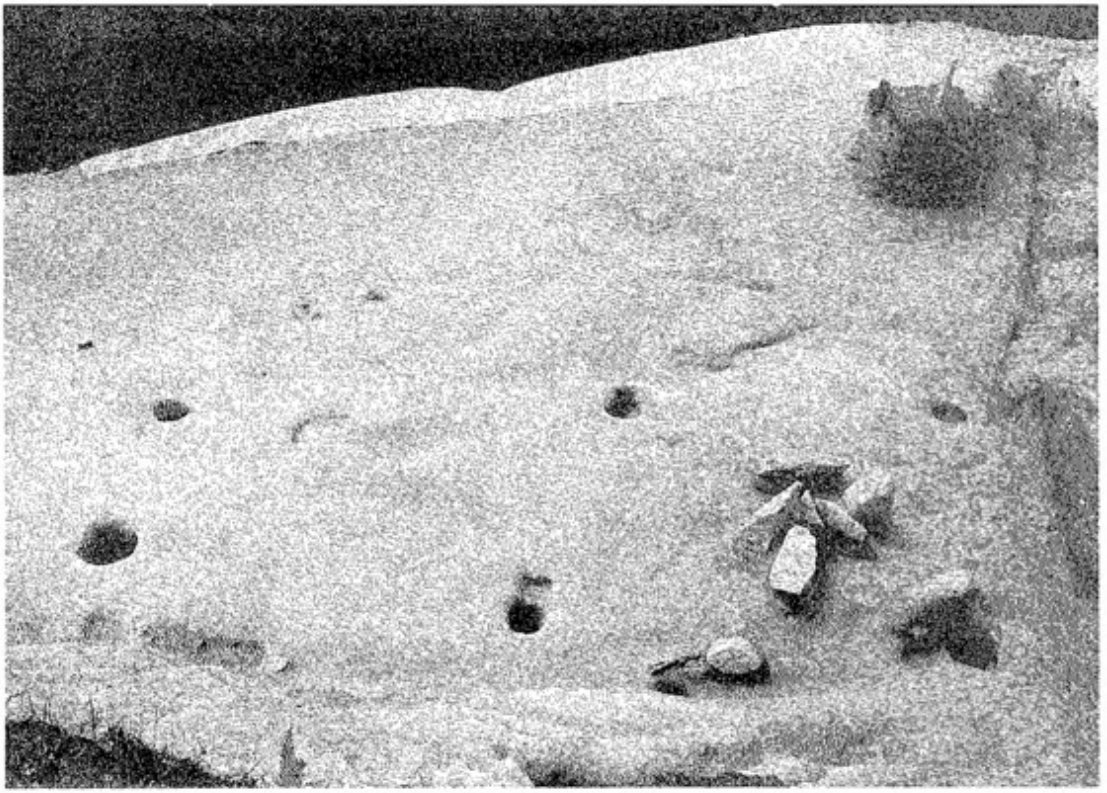


b. 第3郭中央部遺物出土状況

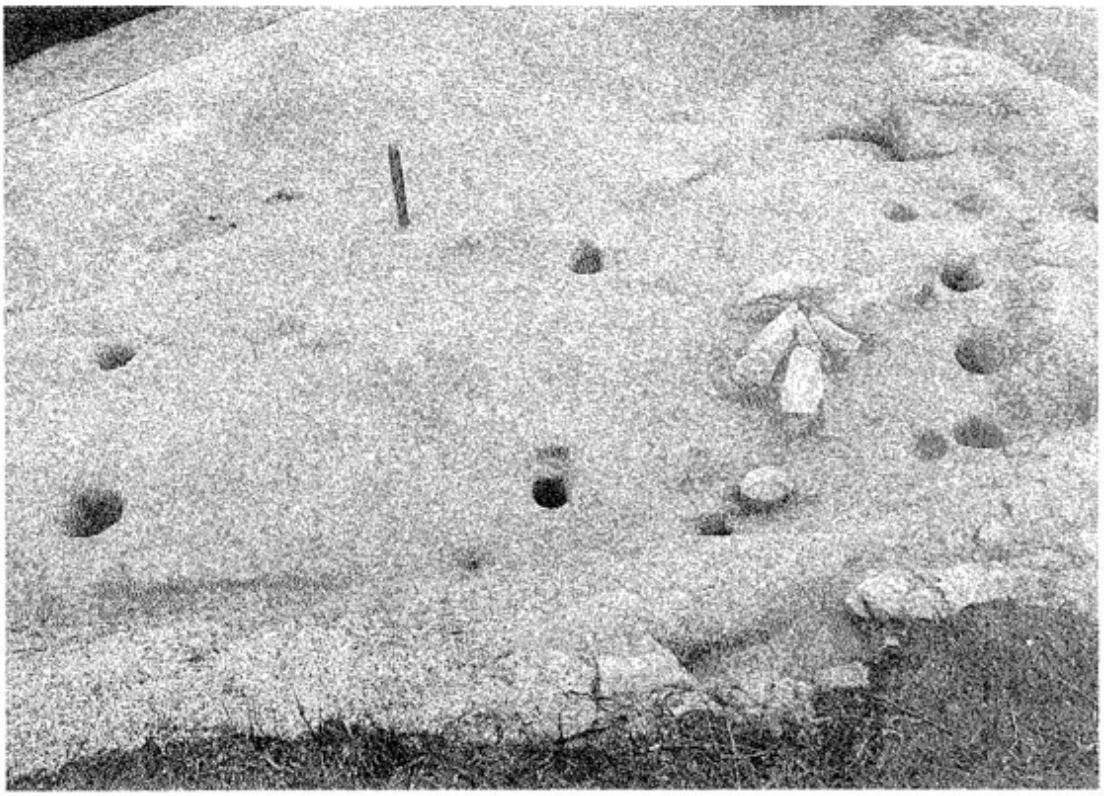
a. 第3郭中央部遺物出土状況



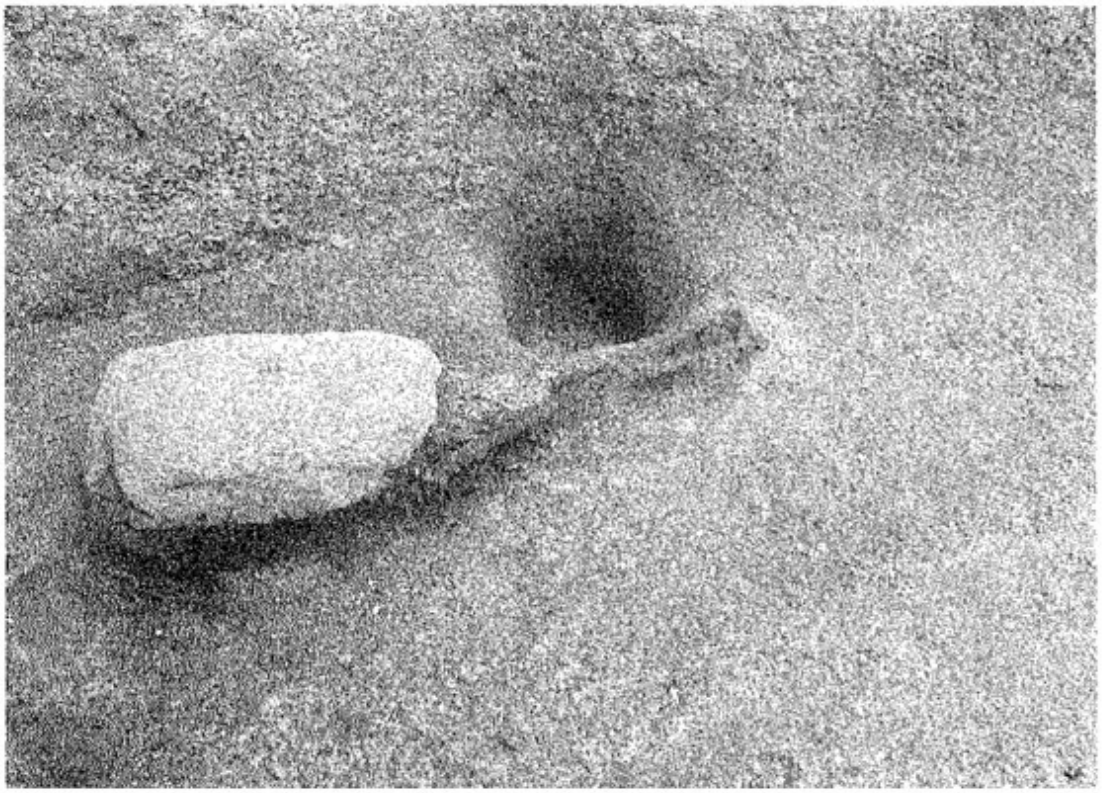
b. 第3郭白磁皿出土状況



a. 第3郭第4号柱穴群（南から）



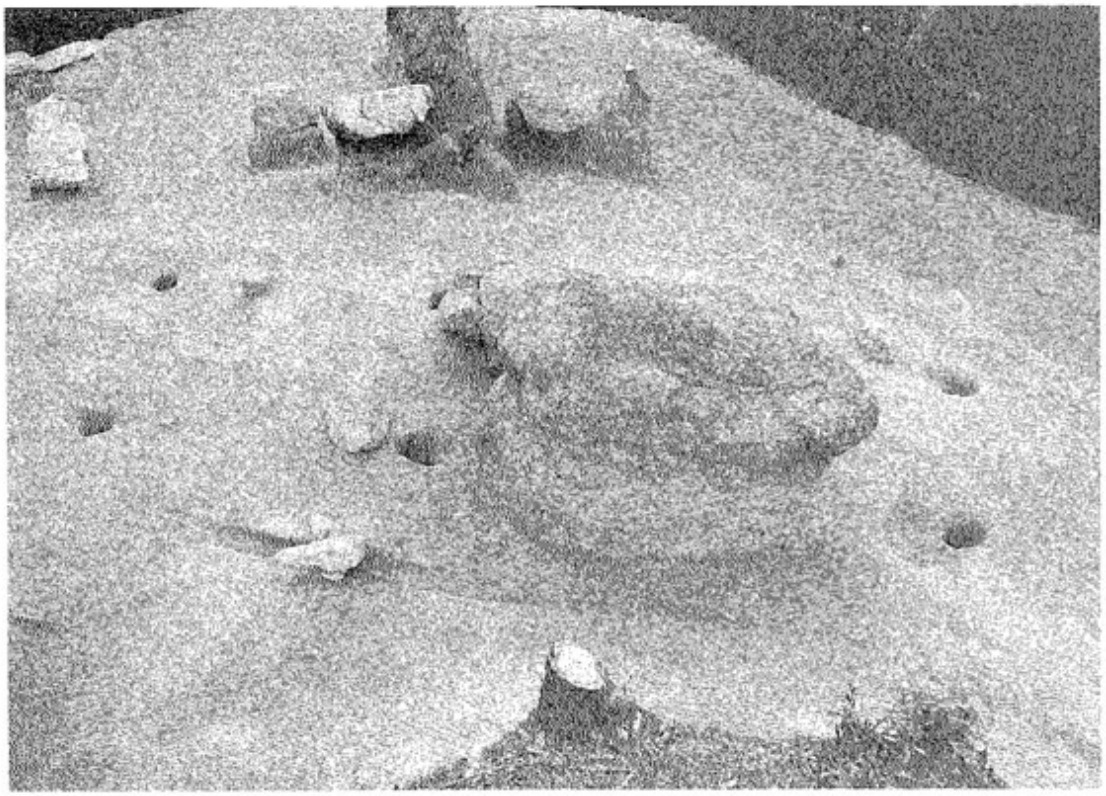
b. 同　　上（南から・調査後）



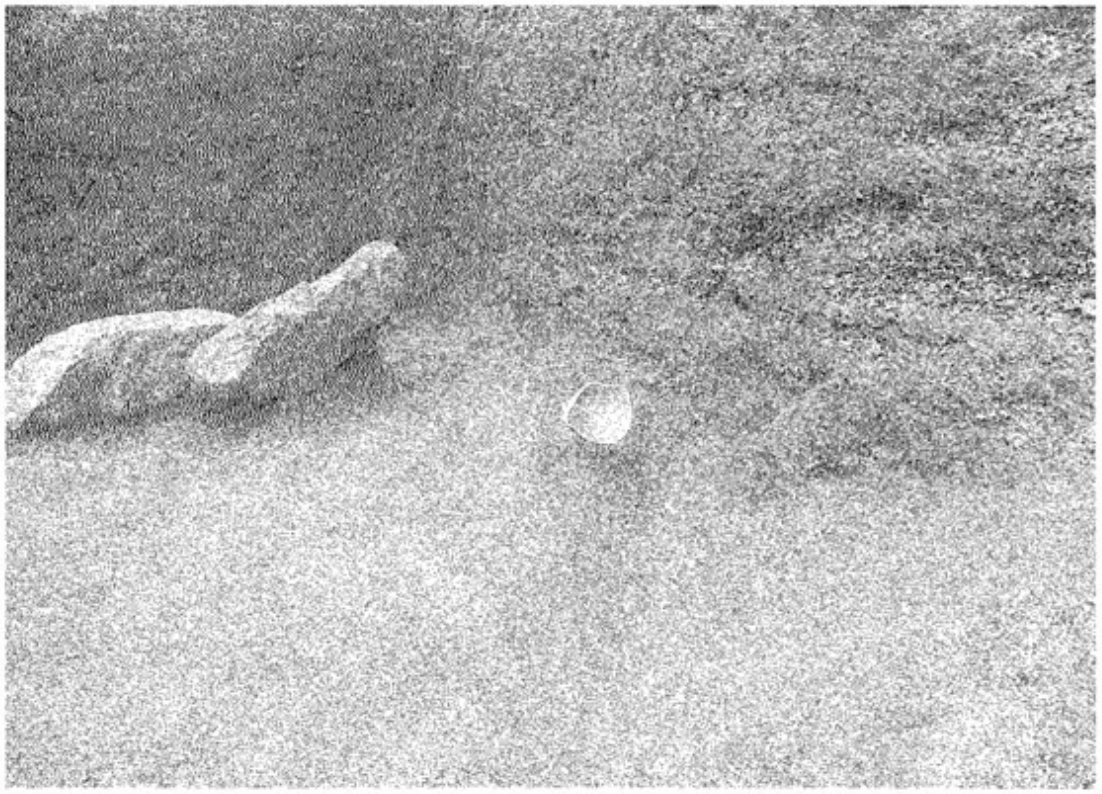
a. 第3郭第4号柱穴群内火箸出土状況

b. 第3郭第4号柱穴群内土師質土器出土状況

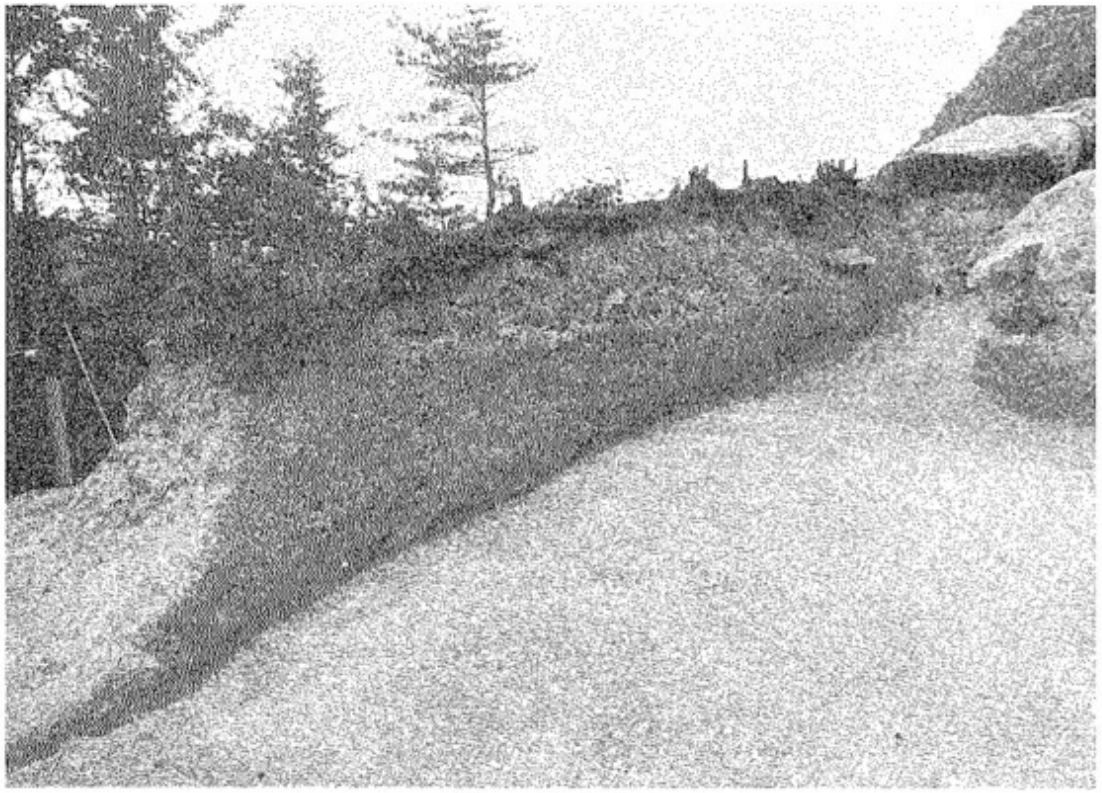
a. 第 4 郭 近 景（東から・調査前）



b. 第 4 郭第 5 号建物跡（東から）



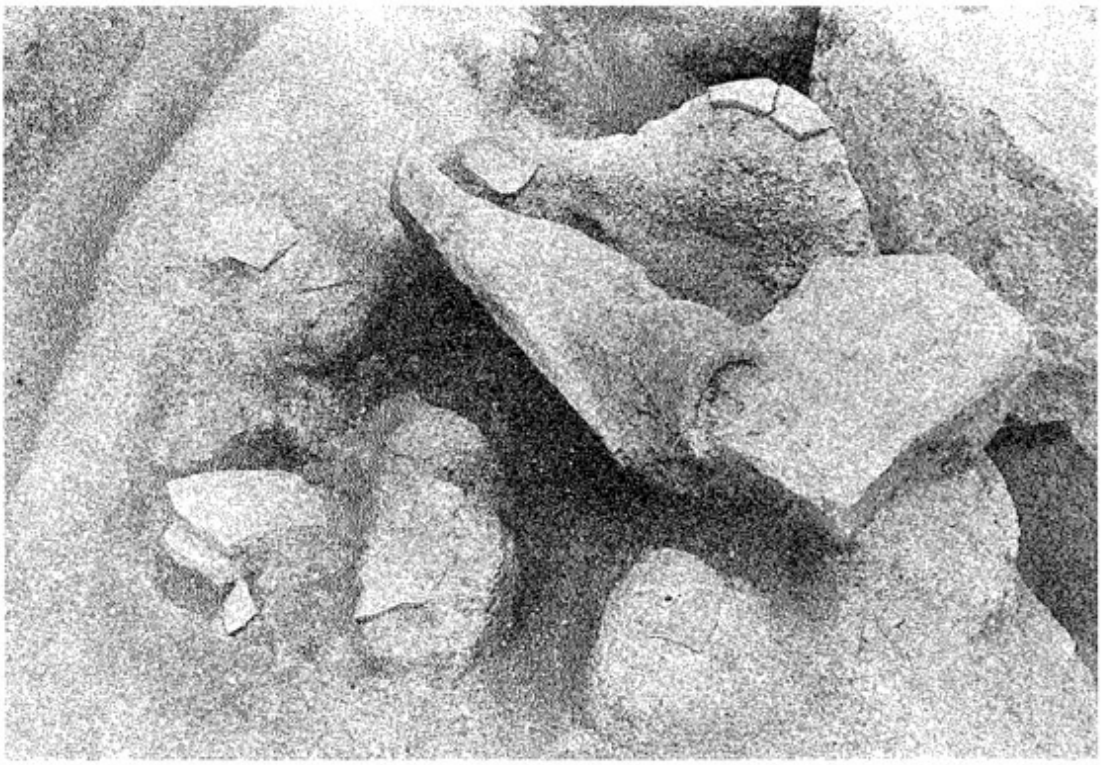
a．第 4 郭青磁碗出土状況



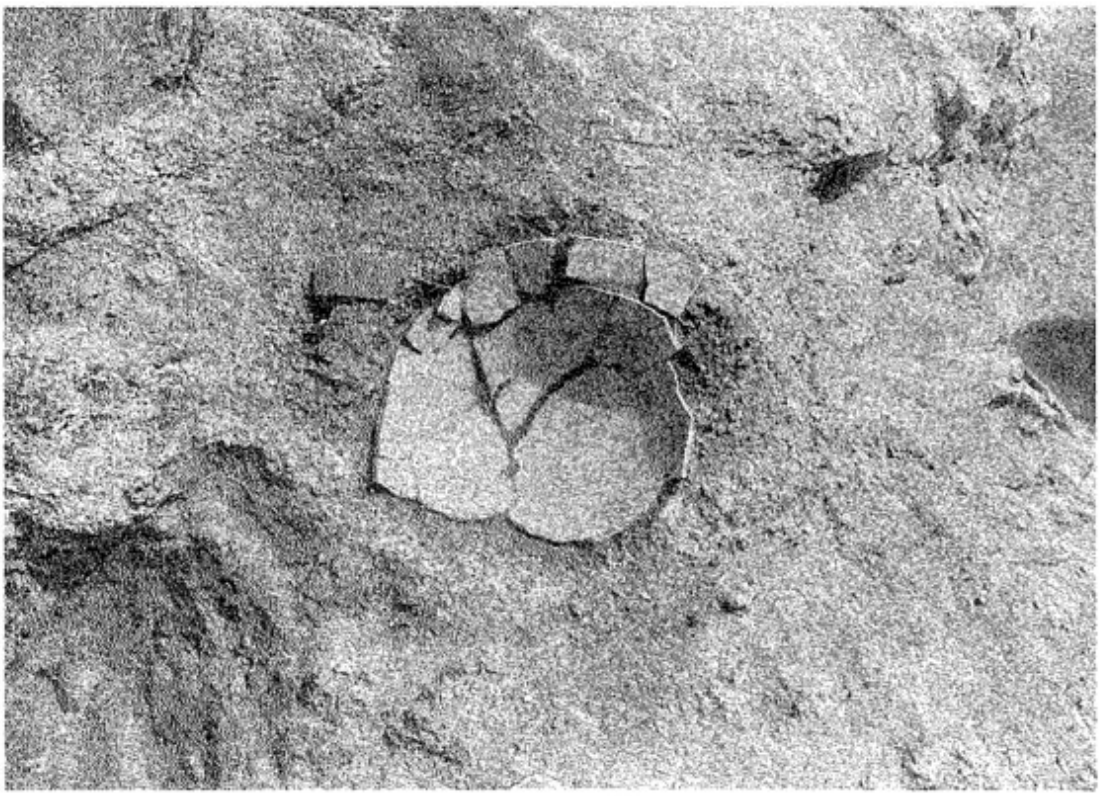
b．第 4 郭盛土断面

a. 武 者 走 り （東から）

b. 武者走り上遺物出土状況

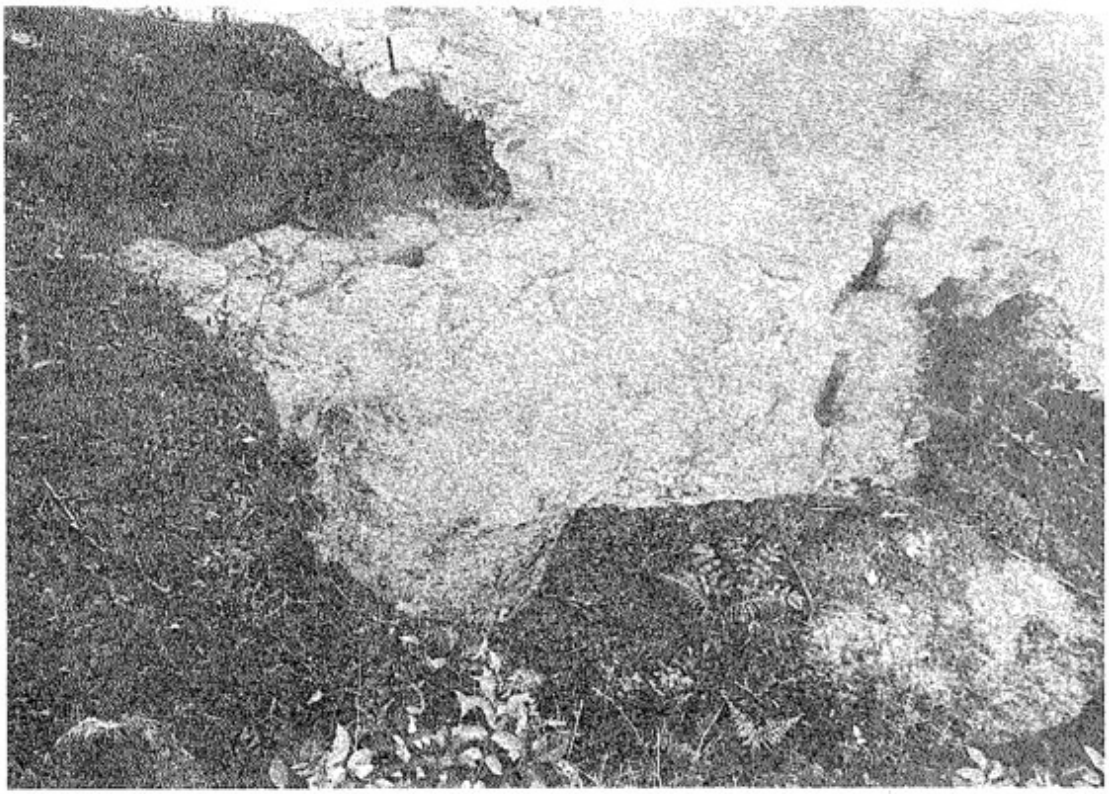


a．武者走り上遺物出土状況



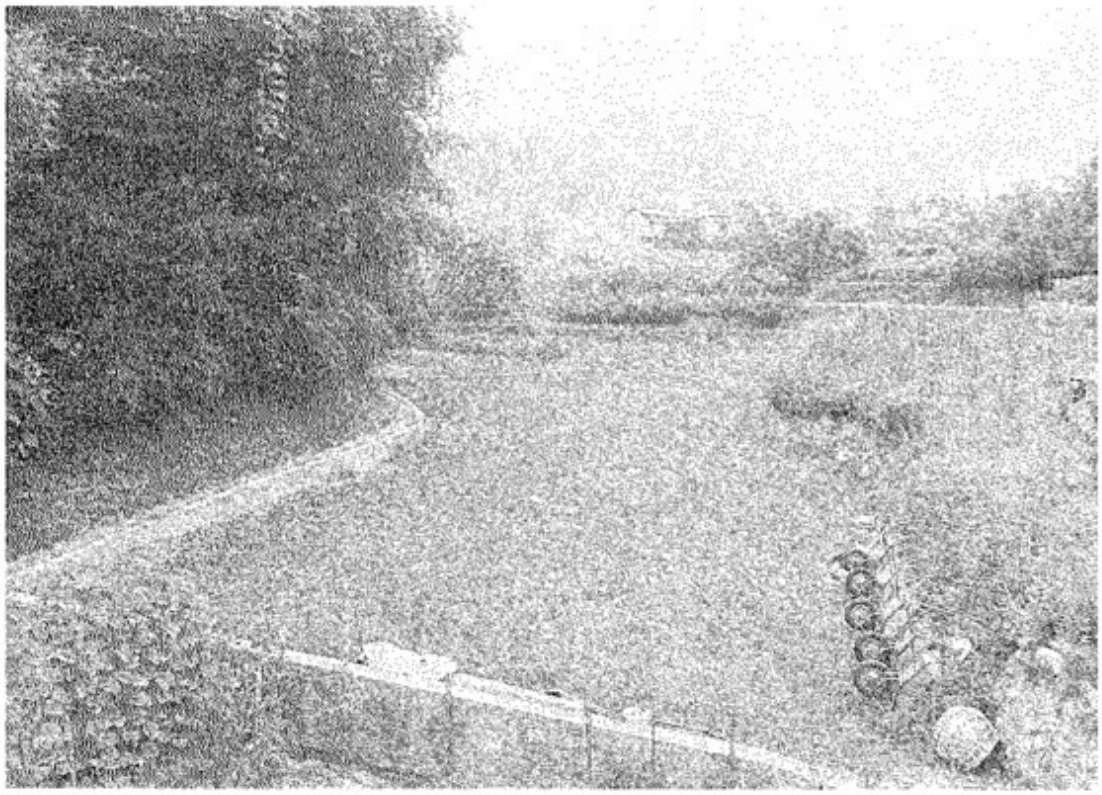
b．同　　上

図版 18

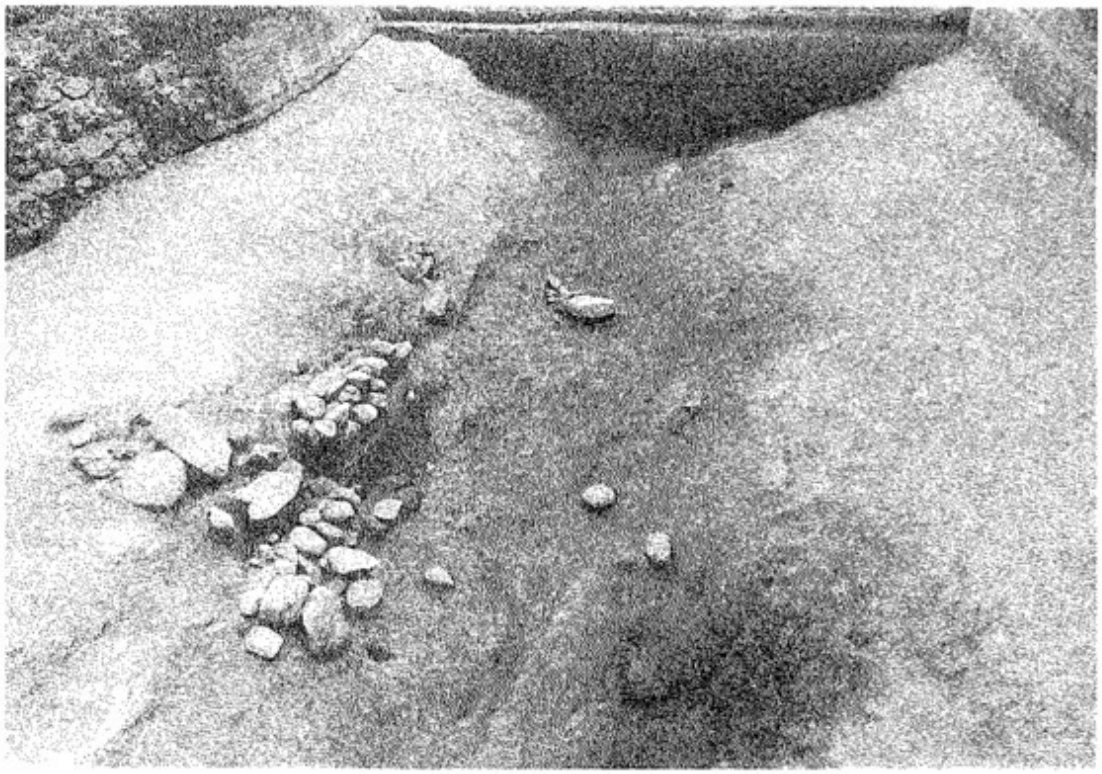


a. 縦 畑 状 遺 構 （南から）

b. 第1郭・第2郭間第5号土壙（南から）

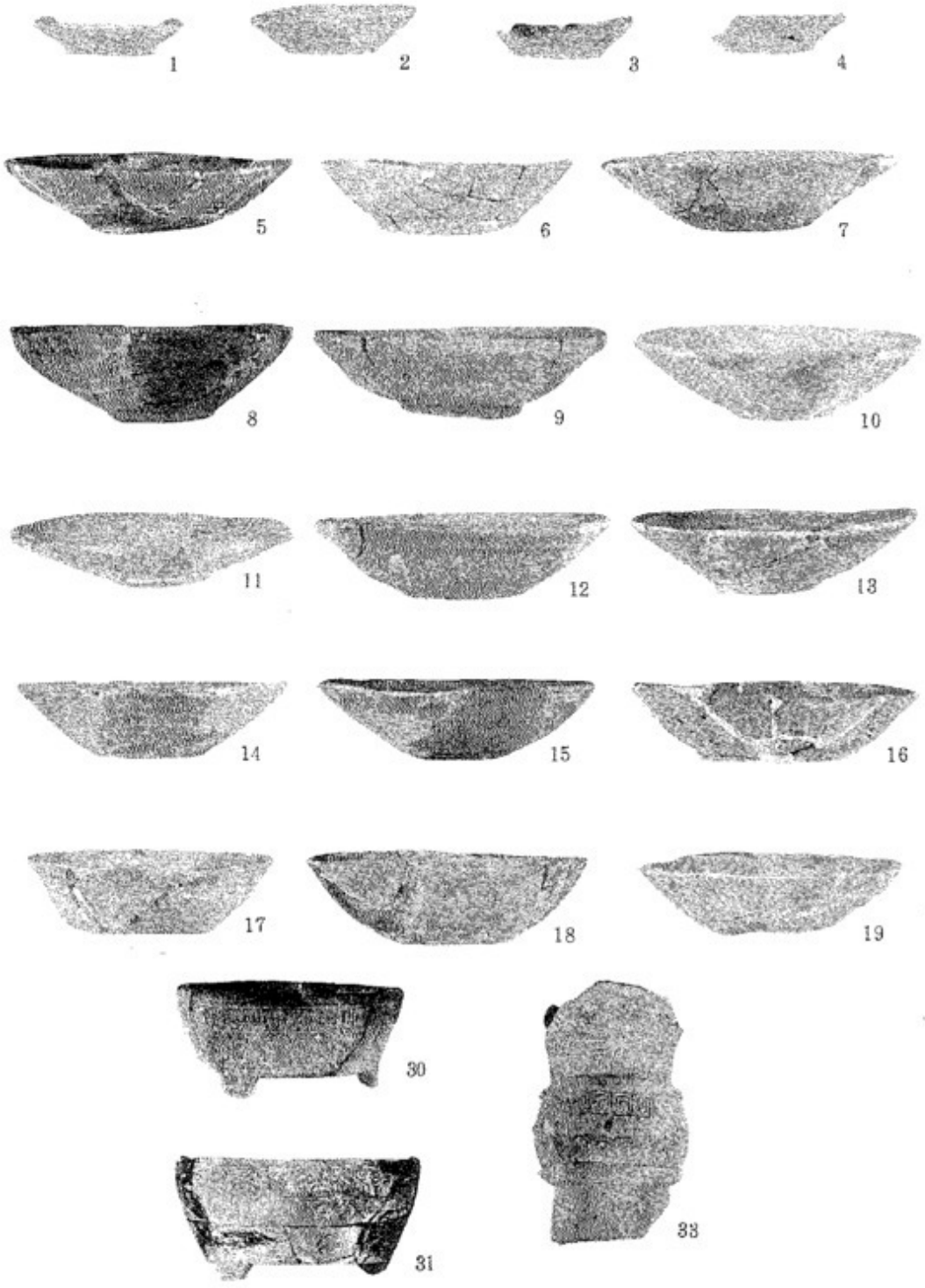


a. 永町山城跡東側近景（南から・調査前）

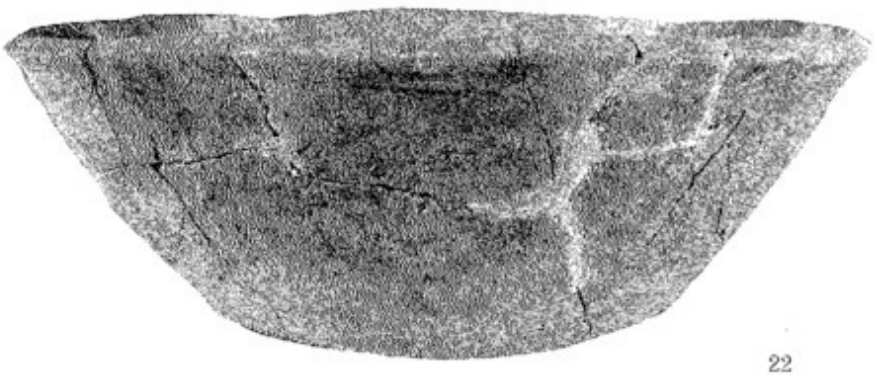


b. 永町山城跡東側堀切（北から・調査後）

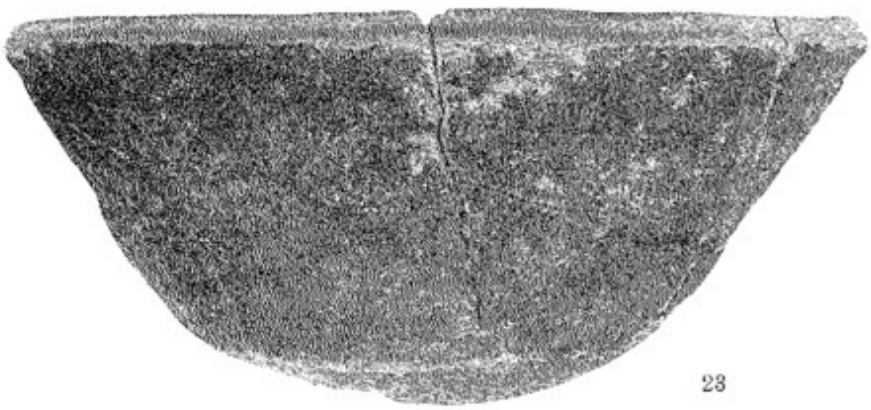
図版 20



北谷山城跡出土遺物 (1)



22



23

28

北谷山城跡出土遺物 (2)

43

44

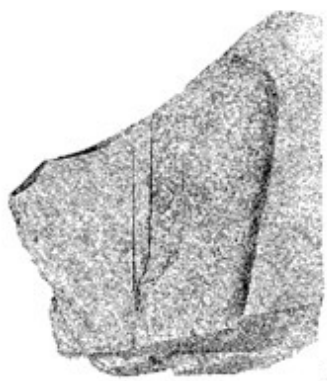
45

47

46

42

32

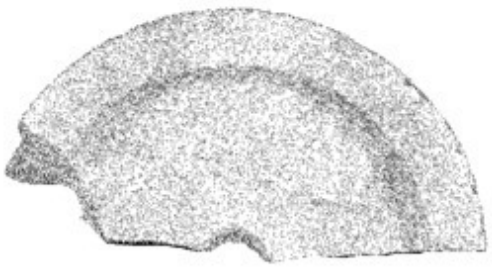


51

北谷山城跡出土遺物 (3)

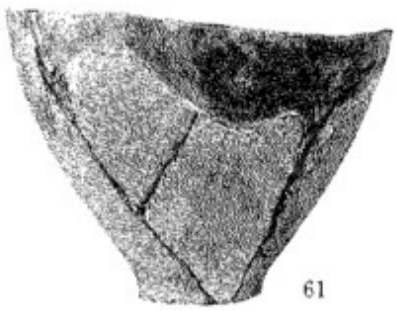
39

52



50

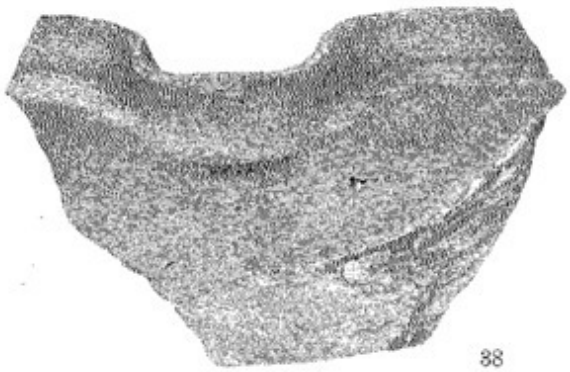
60



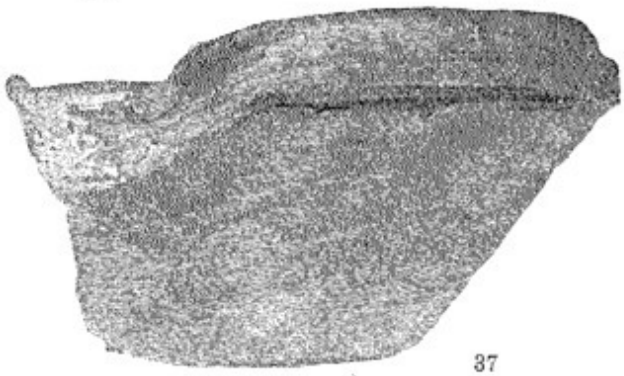
61

62

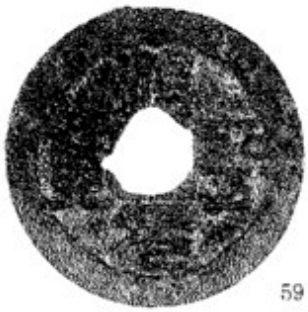
北谷山城跡出土遺物 (4)



38



37



59

北谷山城跡出土遺物 (5) （古銭は×2）